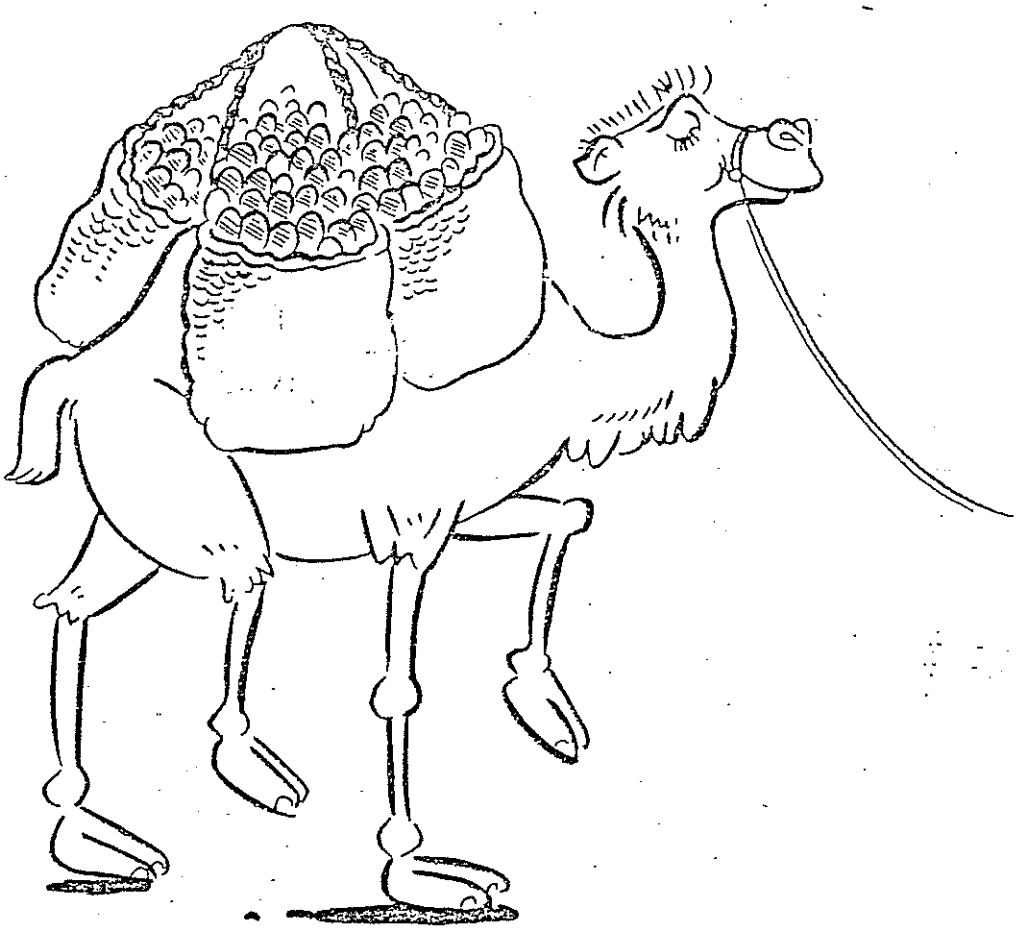
河西回廊と天山北路の旅

中国シルクロード



昭和６０年１０月４日－１５日

河西回廊と天山北路の旅（シルクロードー）目次

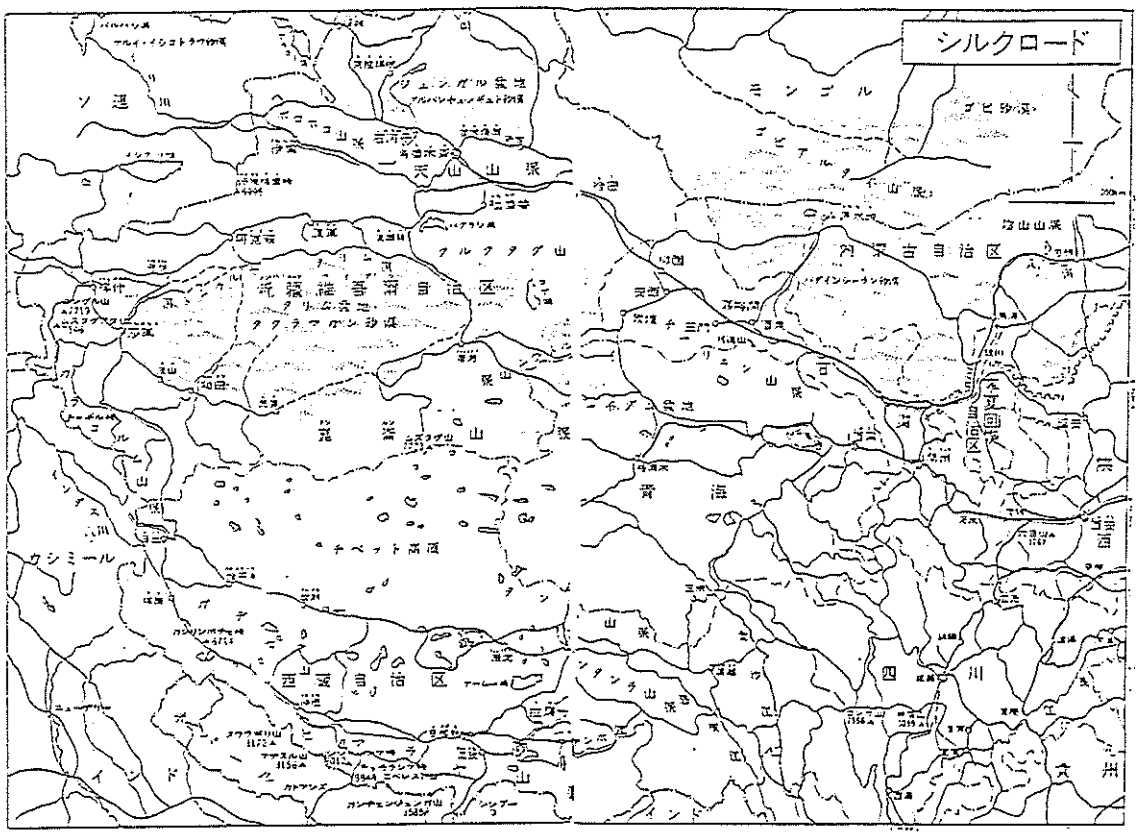
きしかがき　・・・・1
10月5日　・・・・2
西安へ飛ぶ　・・・・2
西安西門　・・・・3
鐘楼　・・・・4
華清池　・・・・5
始皇帝陵　・・・・7
兵馬俑　・・・・8
10月6日　・・・10
阿房宮　・・・10
咸陽　・・・11
茂陵　・・・11
張騫　・・・12
楊貴妃墓　・・・14
乾陵　・・・16
則天武后　・・・17
日程変更　・・・19
10月7日　・・・19
大雁塔（大慈恩寺）　・・・19
玄奘三蔵　・・・20
青竜寺　・・・22
興慶公園　・・・23
陝西省博物館　・・・25
清真寺　・・・26
街頭風景（西安）　・・・27
西安事件　・・・28
西安離別　・・・32
10月8日　・・・33
西安から蘭州へ　・・・33
蘭州の概要　・・・34
炳霊寺　・・・35
河西回廊の英雄「霍去病」　・・・38
10月9日　・・・39
蘭州から酒泉へ　・・・39
酒泉の概要　・・・40
夜光杯工場　・・・41
酒泉公園　・・・42
酒泉博物館ー鐘楼　・・・43
10月10日　・・・44
嘉峪関　・・・44
少数民族部落と万元戸　・・・46
10月10日　・・・48
酒泉ー敦煌　・・・48
敦煌の概要　・・・51
10月12日　・・・53
莫高窟　・・・53
鳴沙山と月牙泉　・・・58
10月13日　・・・60
陽関　・・・60
敦煌ー柳園ー夜行列車　・・・62
10月14日　・・・64
トルファン到着　・・・64
トルファンの概要　・・・65
交河故城　・・・67
カレーズ　・・・68
葡萄郷　・・・68
トルファンの夜　・・・70
10月15日　・・・71
ベゼクリク千仏洞　・・・71
高昌故城　・・・73
アスターナ古墳　・・・74
火焔山　・・・75
額敏塔　・・・78
10月16日　・・・79
トルファンーウルムチ　・・・79
ウルムチの概要　・・・81
新疆ウイグル自治区博物館　・・・82
絨毯工場　・・・84
ウルムチの寒い夜　・・・84
10月17日　・・・85
紅山とカシミヤ工場　・・・85
西域の大自然　・・・87
自然　・・・87
遊牧民　・・・88
オアシス　・・・88
天山山脈　・・・89
トルファンー上海　・・・89
上海新発見　・・・90

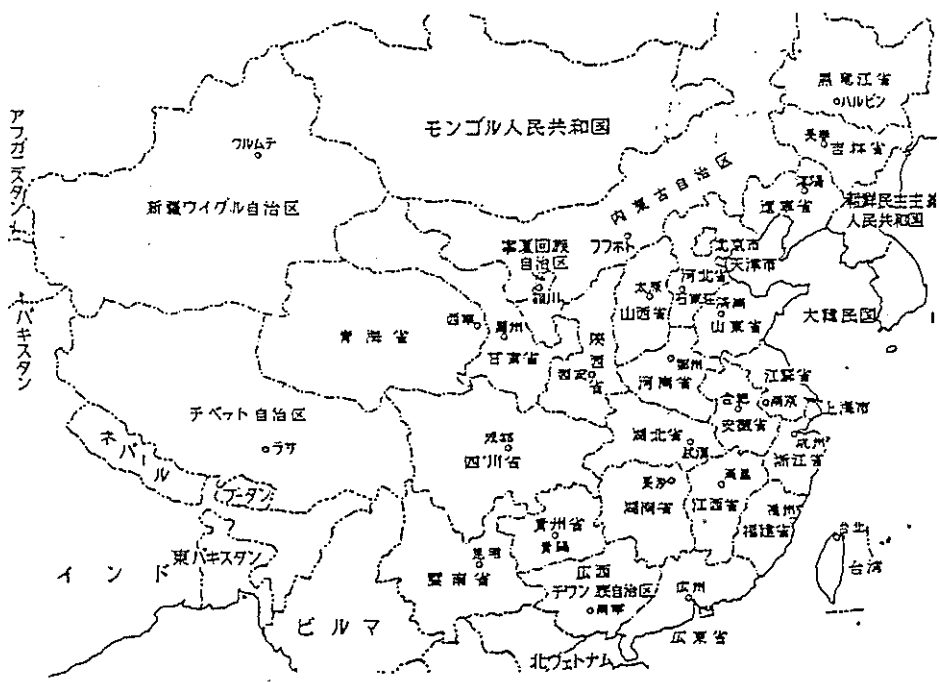
中国雑感 ・・・92
対日批判の裏を考察 ・・・92
経済体制改革の目的 ・・・93
権力闘争は消滅したか ・・・94
百万削減の人民開放軍 ・・・95
中国国歌の内容を知れ ・・・97
新聞記事 ・・・99

歴史年表

		中国事項
原始	旧石器時代	BC3000頃 黄河流域での原始農耕生活開始
	夏	BC2000頃 仰韶文化(黄河上流)(彩陶文化)
奴隷社会	殷(商)	BC1500頃 青銅器・甲骨文字
	西周	BC1000頃 周の武王、殷の紂王を討つ 封建制度の成立
	東周	BC771 平王、東周を建国
	春秋戦国	孔子の儒家思想成立 諸子百家の活躍、鉄器の使用
封建社会	秦	BC221 始皇帝の全土統一 万里の長城の建設、焚書坑儒
	前漢	BC202 前漢成立 張騫の遠征、仏教の伝来、馬王堆漢墓、司馬遷「史記」
	新	新朝成立
	後漢	25 光武帝後漢を建国 74 班超、西域を征服 この頃紙の発明 208 赤壁の戦
	魏蜀呉	魏(220～265)、蜀(221－263) 呉(222－280)
	西晋	265 司馬炎、魏を奪い西晋を興す 280 西晋、呉を滅ぼし中国統一
	五胡十六国	317 東晋起こる 386 北魏建国
	南北朝	420 南北朝はじまる 仏教の普及、雲崗の石窟 439 北魏、華北統一 471 北魏孝文帝(－449) 漢化政策 589 隋の文帝、中国統一
	隋	604 隋帝(～618)、大運河をひらく 618 高祖、隋を滅ぼし、唐を建国
	唐	629 玄奘のインド旅行 690 則天武后(－705) 712 玄宗皇帝(－756) 勢力圏の拡大、西域文化流入 李白、杜甫、白居易の活躍 755 安史の乱(－763) 875 黄巣の乱(－884)
	五代十国	907 唐滅び、五代・十国時代(～960)
	宋	960 太祖、宋を建国(首都汴京―開封) 1069 王安石の新法開始 羅針盤、火薬の発明、木版印刷 宋、江南へ移る―南宋成立

		中国事項
封建社会	宋	1126 朱子、宋学大成
	元	1206 モンゴル王国成立―ジンギス汗 1271 元朝始まる(フビライ汗) 1274・1281 日本遠征に失敗 各地に反乱
	明	1368 朱元璋、明を建国(首都南京) 小説盛んに、王陽明活躍 1402 永楽帝即位(－1424) 鄭和の南海遠征、永楽大典 1421 北京遷都 1537 ポルトガル人のマカオ居住始まる 貿易盛んに 宦官の専横による政治の乱れ 東林・非東林の党争 1616 ヌルハチ後金建国 1636 後金、国号を清に改む 李氏朝鮮を従属化 1644 清の中国支配始まる(首都北京) 1661 康熙帝即位(－1722) 康熙辞典 1673 三藩の乱 1683 台湾征服 1689 ネルチンスク条約 1697 モンゴルを領有 1698 対英、広東貿易 1720 チベット支配 1735 高宗乾隆帝(－1795) 1747 キリスト教布教禁止令 1757 新疆領有 1794 英・印・中三角貿易 1796 白蓮教徒の乱 アヘン輸入の禁止 1813 天理教徒の乱 アヘン販売の禁止 1823 ケシ栽培、アヘン製造禁止 1840 アヘン戦争(－1842) 1851 太平天国(－1864) 1856 アロー号事件(－1860) 1884 清仏戦争(－1885) 1899 義和団事件(－1901) 1911 辛亥革命


シルクロード
ソ連邦
モンゴル
ゴビ砂漠
天山山脈
クルクタグ山
新疆維吾尔自治区
内蒙古自治区
崑崙山
青海
チベット高原
カシミール
西蔵自治区
四川
インド


モンゴル人民共和国
黒竜江省
ハルビン
吉林省
アフガニスタン
ウルムチ
新疆ウイグル自治区
内蒙古自治区
遼寧省
朝鮮民主主義人民共和国
寧夏回族自治区
フフホト
北京市
天津市
河北省
太原
石家荘
済南
山西省
山東省
大韓民国
西寧
蘭州
青海省
甘粛省
陝西省
西安
郑州
河南省
江蘇省
合肥
南京
上海市
パキスタン
チベット自治区
ラサ
ネパール
成都
四川省
武漢
湖北省
安徽省
杭州
浙江省
ブータン
長沙
高安
湖南省
江西省
福州
福建省
貴州省
貴陽
昆明
雲南省
東パキスタン
インド
広西
チワン族自治区
南寧
広州
広東省
台北
台湾
ビルマ
北ベトナム

河西回廊と天山北路の旅
シルクロード

はしがき

世界を広く観察して通暁すること即ち広博瞻望の欲望が、馬令を増す毎に盛んになつたようだ。本年第３回目の海外の旅も、足腰の衰えない間にという一種の焦燥が心の奥に存在していたことは真実である。

今より４５年前に河南省に駒を進め、或いは黄河沿線から山西省を西進し、洛陽・西安の古都を地図上で眺めたことも懐かしい遠い過去のことになつてしまつた。昭和５５年４月雲南省に、昭和５６年４月河南省に、各々慰霊巡礼のために訪れて昆明・開封・鄭州・洛陽の各地を旅したときから、一段と中国に対する慕情が募り、本年２月に呉越の地に足跡を残した。さらにＮＨＫのシルクロードの放送は、その魅力を煽動させて輾転反側していたのであつた。

世はまさにシルクロード時代だが、シルクロードの言葉は使用されてから１００年にもならないだろう。それにたいして「西域」という語は２０００年来、敦煌から西の方を指す語であつた。河西回廊（黄河の西の渡り廊下と言う意味）とは蘭州の西を流れる黄河以西から、敦煌までの間を指す語である。前漢の第７代皇帝である武帝が黄河の西の匈奴勢力を一掃し、武威・張掖・酒泉・敦煌に河西４郡を設置し、この河西を橋として中国本土を結んでいたのである。

西域や河西回廊は東西の文化の通路であり、西洋にとつては中国の絹を運ぶ道としてシルクロードと呼んだことは周知の通りだ。しかし我々日本人にとつては、仏教を含む西の文化が主に此の道を通って中国に伝えられ、さらに我が国に普及したことの方が重要な事であるかもしれない。

インドに仏教を求めて、法顕（その旅は３９９－４１２年）や玄奘（その旅は６２９－４５年）らが、此の道を通って行つたのである。法顕は帰路を海にとつたが、玄奘は往復とも西域を通つている。そして単に文化の通路であつただけでなく、多くの文化遺産を残している。俗に正倉院がシルクロードの東の終着点とも言われているが、我が国に残る古い仏像や絵画の中には、西域や河西回廊に近い関係の有るものも、あるのではなかろうか。

今回の饒舌味豊かな河西回廊から西域にかけての旅は、張騫や法顕・玄奘の足跡の僅かの一部に過ぎない。主として西安－蘭州－酒泉－敦煌－柳園－吐魯番（トルファン）－烏魯木斉（ウルムチ）だけであつたが、世界の秘境と言われる天山山脈までも越えた旅の想い出は多く、中国歴史への興味もまた深まるばかりであつた。

旅は文化の母と言われ百聞は一見にしかずである。其の旅の経過や見聞した事を詳しく記録しておくことは、少しは価値があることと思い、毎回の旅ごとに紀行文を記述することにしている。何もしなければ忘却の中に失うばかりである。記録は想い出と反省の材料となるばかりでなく、親しい友人に対しても新しい知識を提供し、交友の絆を深める事になるのである。

１０月５日

西安へ飛ぶ

昨日の夕刻、成田からシルクロードの旅に鹿島立ちをして、９ヵ月ぶりに雨の上海に一泊。１０月５日、上海の南京路にある有名な和平飯店を早朝の５時に出発した。６時５５分発の中国民航３２１１便は生憎の台風の影響を蒙り、約１時間の遅れで漸く離陸して安堵した。旅の初日から予定が変更になつては前途が思いやられる。早朝の出発は睡魔をおさえきれず、機上の席に着くや否や直ちに眠りに着いてしまつた。勿論、西安散策のための体力維持が第一目的でもある。

９時半頃に睡りから覚めて爽快な気分が溢れ出してきた。時間的に洛陽付近を飛行中と推測して瞰下すると、洛水と思われる独特の黄色い濁流が、山間に悠長な曲線を描いていた。常に深刻な因縁に結び付けられていた黄河を見るにつけ、河南省の地が思い出され、洛陽の竜門石窟もまた懐かしい地である。彼の有名な三門峡及び函谷関や、山西省との境の黄河屈曲点は、反対側座席のために鳥瞰することができず残念であつた。

そうこうして懐古していた暫くの間に飛行機は西安に近ずき、渭水は整然と区画した関中平野を分断して流れ、二千年の歴史を物語る唯一のもののように映っていた。上空から眺望する関中の地は肥沃にして平坦、広大な大穀倉地帯は天下を制する為の必須の要件の一つであり、悲惨な争奪の地となつた理由を証左している。

我が脳天の中は流れるように古代の歴史を追及していた。渭水と泾水とに囲まれた黄土地帯の稷を主とした農耕民族が、殷朝（別名は商・河南省）を倒して周朝（西周）を建て（前１０５０年）、西安付近の鎬京に都したのが西安の歴史の第一歩である。社（土地の神）と稷（穀物の神）をまつり、社稷（シヤシヨク）と云う字が「国」を意味することになつたのも周の時代のことであり、大公望の呂尚も当時の政戦両略に卓越した人物であつたことも思い出すのである。

弱肉強食の争乱時代であつた春秋戦国時代が約５００年も続き、前２２１年、秦の始皇帝が天下を統一して西安西方の咸陽に都した。焚書坑儒に始まる思想統一から彼の出生の秘密、驪山（リザン）の始皇帝陵や兵馬俑坑など、旅立つ前に何回となく眺めた写真が眼に浮かんだのは当然だ。

項羽と劉邦の歴史小説は好んで読みふけつたが、前２０２年、漢の高祖（劉邦）が都した長安の名は今もなお、北京の天安門広場前の大通りの名称や、多くの都市に名をとどめている。またシルクロードの開拓者の「張騫」（チヨウケン）の名前が、ハイライトとして我が脳細胞の中のフイルムを廻していた。

時代は激しく変遷して三国志の時代に移り、覇権を争つた董卓（トウタク）も一時は都を洛陽から長安に移し、五胡十六国時代から南北朝にかけて、長安を都とした国も数多いことだ。南北に分かれていた中国を統一した隋（５８１－６１８年）も長安を都とし、続く唐（６１８－９０７年）も３００年の長期にわたつて大国家をつくり、天下した地でもある。唐と云えば先ず玄奘三蔵が筆頭に網膜に浮かび、則天武后や楊貴妃など、長安の春秋が駈足で通り過ぎて行く。

十一の王朝が前後一千百年も都としていた西安は、古都の中の古都である。シルク

ロード募集の各社の中で、最つとも長時間、西安に滞在するツアーを選択したのも、西安の歴史の役割を理解したい願望からであつた。

西　安　西　門

午前１０時、華胥のゆめから醒めたように憧れの西安の空港に着陸した。豪雨だつた上海とはうつて変わり、慶雲も浮かぶ快晴の上に、気温もまた予想に反して温かく、最高気温は２４度ということであつた。太平な旅立ちである。

空港は市街の西側にあり、非常に近くて至便だ。中国国際旅行社西安分社の黎愛寧嬢が我々を出迎えて、先ず案内したところは西安の西門であつた。

城門や城壁は完璧にのこり、他の古都といえども見ることの出来ないことである。中国らしい金城湯池の威圧観は気品があるばかりか、荘重な構えを眺めるだけでも値千金だ。開放後の中国では誠に希少な遺物であつて、残存に尽力した人たちを絶賛したい。城壁は多くの歴史を物語り、大陸情緒を表現して、我々をして心から愛着を感ぜさせたのである。

西門は長安時代には「開遠門」と称し、シルクロードという遠くに開いた文明交流の門であつたが、位置は現在とは異なり、遥か西の方にあるはずだ。城門の上に登ると西関正街の大通りが真っ直に延びている。通訳はシルクロードは此処を起点としていたと説明していたが、現在の城壁や楼閣は明時代の城郭をもとにして造つたもので、当時の長安は西安の１３倍もあつたのである。

楼閣から遠望して一瞬脳裏に閃いたものは、「国破れて山河在り、城春にして草木深し云々」の杜甫の詩であつた。安禄山の反乱（安史の乱・７５５－７６３）でつかまつた杜甫が、長安の荒廃を目の当りにして感傷して作詩した「春望」である。都の長安が破壊されて、山や川の姿のみが変わらずに残つている。町に春がきて草木は伸び放題である云々。絶望のどん底に沈む心境を詠んだものだが、中国戦線で死闘を交え、ビルマの悲惨を体験し、敗戦を迎えたものの一人として、城壁に登ごとに思い出す詩である。

唐時代の長安城の地図を繙いてみると、東西南北の城門は各三か所となつている。現在の二か所に比較して面積の割合から少ないようだ。平坦な関中盆地の防御の困難性から考え出された策であろう。大城壁にそびえる楼閣は三層の華麗重厚な建物で、一望を睥睨して古都の面目が躍如としている。明時代では辺境に過ぎなかつた此の西安に、このような建築が施されたことは、歴史的な古都保存の一環として成されたものであろう。

西門から受けた西安の第一印象は素晴らしく最高であつた。

鐘　　楼

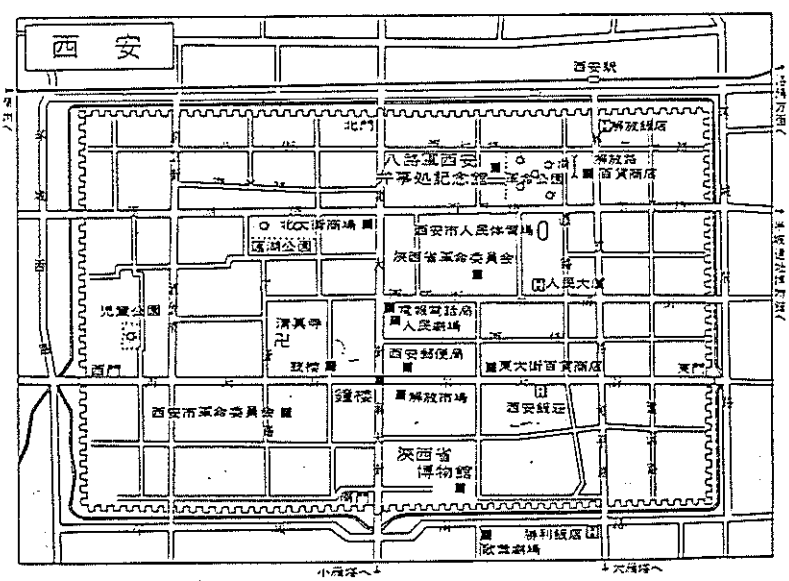
西門を降りて西大街を東進し、南・北大街の交差点の真中に威風堂々と天高く聳えているいる楼閣が、西安のシンボルの鐘楼である。何処の古都の中心にも建っていたが、開放後は自動車の発達の為に除去されている都市が多いようだ。青春時代を過ごした前宋の都、河南の「開封」（七代の王朝があつた古都）の鐘楼も取り壊してターミナルとなり、バスの発着の起点となつていた。

西安の鐘楼にも四つのアーチ型の通路があり、煉瓦造りの台座上に外観三層・内部二層の楼閣が建つている。１３８４年、明の太祖時代に時鐘の楼として城内の中心に建てられ、１５８２年の神宗の時に現在地に移築した。釘を用いない継ぎ目なしの一本柱様式は、当初のままという貴重なものだ。

鐘楼にのぼり四周を眺望すると、王侯貴族の気分が味わえる反面、年年歳歳、花相似たり、歳歳年年、人同じからずと、白髪を悲しみ月日の流れを惜しむ心境にたたされ、鐘楼は栄枯盛衰の人生を教えているようであつた。

往時の鐘は楼閣の西北角の処に卸され、現在は楼閣だけが象徴的建築物として残り、繁華街は楼を中心にして発達して、百貨店をはじめ商店街が並んでいる。睥睨するように聳える楼閣を廻つて写真におさめると西北の直ぐ傍に鼓楼の姿が美しく映つていた。西安のように鐘楼と鼓楼が別々に建つているのも珍しい。中国の他の都市では大体一つの建物である。

地図上で推察すると、唐時代の長安の皇城は此の付近一帯である。しかし前漢時代の長安と、隋や唐時代の長安とは同じ場所ではない。勿論、皇城の位置も違っている。唐の都の正式な名称は「京城」と云う。そして玄宗以降は「西京」とか「中京」或いは「上部」と改めたが、当時の人たちは長安という昔の呼び名で呼んでいたのであつた。長安と云う名称は、秦時代に長安街という村が此の辺にあつたらしく、其の名が国都の通称にまでなつた事は面白いことである。親しまれた長安の名も清代に移って「西安」と改名されて現在まで続いている。



華　清　池

鐘楼付近のレストランで中食を終えた我々は、南門を通過して城外を東に折れて華清池へと向かった。地図を読解すると興慶公園を通る筈だ。通訳嬢に、個人として本日の観光後タクシをチヤターして同公園を訪れ、阿部仲麿呂記念碑を拝観したいと申し込んだところ、現在は公園修理のために参観は不可能だと、あつさりと拒否されてしまつた。無念。

唐の第六代皇帝の玄宗と楊貴妃とのロマンの地「華清池」へとバスは東進を続けた。約３０キロの道程だが、農夫たちの農作業を車窓から眺めると、４年前に河南省を訪問した時と比較して進歩のあとが窺えない。原始的な耕作を営み、すべて人力によつて畑を耕し、鋤を４・５人で引っ張る姿をみると、牛馬や驢馬は一体どうしたのかと疑問を抱いたのは当然だ。農家の主婦たちが汚い水で洗濯をする光景は、４０年前にフイルムを逆戻りさせ、農業の現代化は掛け声ばかりのようだ。我々の眼を誤魔化すことはできない。唯一の進歩したことは、道路の両側に植樹して立派な並木をつくり、全土にわたって緑化したことだ。以前は「植林報国」の看板を見掛けたが、成功したとみえて今では看板を見ることはできない。

この並木街道の延長線上に、項羽と劉邦の戦いで有名な鴻門の会の地があり、更に進むと函谷関となり、又その遥か向こうに洛陽や開封があると思うと、昔が偲ばれて近親感を覚えるのであつた。

バスは華清池に着いたが、通訳からは何一つ説明もなく、集合時間を定めて自由行動となつた。説明を煩わす必要もない程、有名だからであろう。

玄宗皇帝（６８５－７６２）は５３歳で皇后の「武恵妃」に先立たれて非常に悲しんだ。そして後宮には自由にできる女性が沢山いても、本当に愛したいと思う女性がいなかつた。

そのうちに第１８番目の王子である「寿王」の妃が、絶世の美人であるという宦官の高力士の進言をいれて、これを妃として迎えた。要するに早い話が、父親が息子の嫁を取りあげたのであつた。この女性が四川省出身の楊玉環で、玄宗は６０歳、彼女は２６歳の時であつた。

その翌年に彼女は貴妃に任命されて、正式に「楊貴妃」と呼ばれるようになつたのである。

唐時代の後宮制度では、皇后の下に貴妃・淑妃・賢妃の各一人の妃があり、その下に九嬪といつて昭儀・昭容以下の九段階があつて各一人、その下に婕妤・美人・才人が各九人、その下に未だ三段階があつた。

玄宗は毎年十月になると楊貴妃を伴い、長安の東方の温泉地、驪山の麓にある華清宮に出かけ、避寒のために年末まで滞在し、彼女を寵愛したことから一段と有名になつたようだ。

華清宮の門の両側には個人風呂や家族風呂があり、中国の人が列を作つて順番を待つている光景が眼に着いた。秦の時代からの名のある温泉で、一風呂浴びてみたいと覗いたが超満員であつた。

そこをくぐると写真で見馴れた通りの雄勝華麗な景観が展開していた。清く澄んだ

池の周囲に朱塗りの亭や楼閣が点在し、明鏡な池を廻って奥に進むと、楊貴妃の濃艶な身体が漬つた浴槽が残されてあつた。大理石造りの大浴槽である。早速浮き名を流した風呂場に降りて記念撮影をする客は黒山である。遠路を遠しとせず、日本人を始めとして白人までが、ロマンの風呂を偲んで見学に来るとは、玄宗や楊貴妃の心境や如何にだ。愛は万事に勝つと云われているが、後日の悲劇は哀れであつた。人の一生は晴れたり曇ったりする日が交互にやつてくる教訓かもしれない。人間万事塞翁が馬である。

華清池にはもう一つの歴史がある事を忘れることはできない。即ち、昭和１１年１２月１２日、蔣介石は軍閥「張学良」に対し、共産軍の討伐を命じて西安まで督促にきたとき、逆に捕らえられて軟禁された所が此の華清池であつた。蔣介石は共産軍と団結して抗日を迫られ、周恩来の調停に応じて釈放されたが、ここに第２次国共合作が成立して、抗日統一戦線が結成されたのである。

蔣介石が軟禁されていたという捉蔣亭は、悌泣しそうな貧相な小部屋であり、今もなお汚い寝台や机が陳列され、玄宗や楊貴妃のロマンとは全く対照的な存在だ。蔣介石のみすぼらしい写真を掲げ、現中国人民の国敵の標本みたいに宣伝されている姿は誠に哀れであつて、同情を禁じ得ない心境であつた。

若し、この西安事件が発生していなかつたとしたら、東亜の情勢も大きく変わった方向へと、展開したのではなかろうか。本当に運は天に在りである。如何に物換り星移つても、華清池や貴妃池、其の周りに生える枝垂れ柳までが、三人の名を伝え末永く哀愁を残すことだろう。

玄宗皇帝と楊貴妃の物語りは、白居易（白楽天）の長恨歌に余すところがないほど、作詩されている。

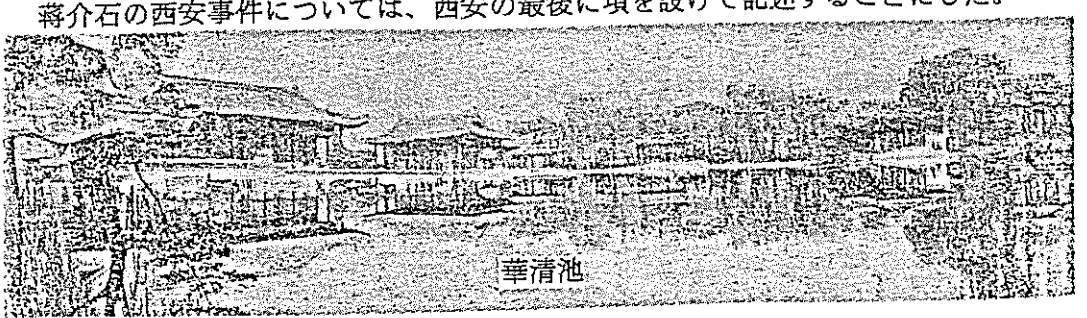
「漢皇色を重んじて傾国を思う」から始まつているが、漢の天子は暗に唐の玄宗皇帝をさしている。

華清池のところは初めの項のみ記すことにする。

「春寒くして浴を賜う。温泉水滑らかにして凝脂を洗う。侍児扶けて起させば嬌として力なし。始めて是れ新たに恩沢を承くる時・・・・・」

春もまだ浅く寒いころで、天子は彼女に華清宮の温泉を賜つた。温泉の水はなめらかで、こり固まった脂肪のように白くひきしまつた美人の肌に、そそぎかかつた。腰元がかかえおこすと、あでやかになよなよとして、力もないようである。今やまさに天子の御寵愛をお受けする時がやつてきたのである。

蔣介石の西安事件については、西安の最後に項を設けて記述することにした。



華清池

始　皇　帝　陵

華清池の直ぐ東側に小高い丘が見えている。画報などでみなれた此の丘は秦の始皇帝の陵だと、誰れしも気が付く陵墓である。陵までバスが進入できないのか、道路上で車は停車してシヤツターを切らせた。枯れかかった黄色い高粱畑の向うに、濃い緑りに包まれた丘がくっきりと浮かんでいる。人工の丘である。

戦国時代の兵馬倥偬の間を馳駆して、始めて中国を統一した秦の始皇帝は、すべての権力を独り占めにしたものの、最も恐ろしいことは自分の寿命が尽きることであつた。

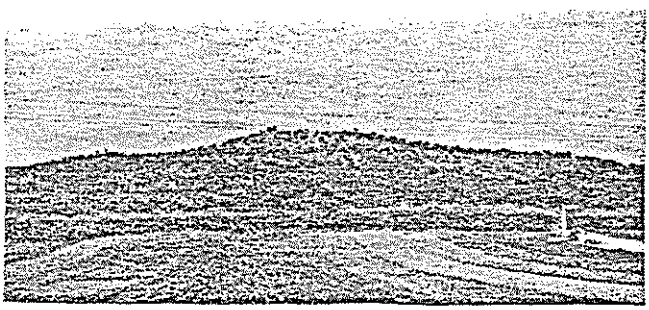
彼は即位（前２２１）と同時に、咸陽の東方の驪山の北麓に、死後の住居である墓を造り始めた。古代エジプトの王と同じく、死後も生前と同じような生活が出来るものと考えていたのである。２６年の歳月と７０万人の人民を徴発して墓の建設を進める一方、不老長寿の薬を求めて仙界入りを果たそうとしたのであつた。権力を握った人は皆そのように考えるのであろうか。春秋戦国に義戦なしと云われた時に、鶏群の一鶴のように頭角を表わした彼は、尚更のようだ。

此の墳丘は東西の長さ３４５メートル、南北の長さ３５０メートル、高さ４３メートルというから、日本や朝鮮半島の陵と比較して、見当もつかない大規模なものである。

この方形の墳丘を取り囲む四角い内城は、東西が５７８メートル、南北が６８４メートル、更にその外郭の外城は東西が９７４メートル、南北が２１７３メートルといわれている。この二重になつた城郭は、都市の構造そのものを表しているだけでなく、機能もそなえているのである。そして盗窟を防ぐための手段が構じられていたが、秦の滅亡後には総ての財宝は略奪され、現存するものは陵の一部に過ぎない。

臥竜のようであつた秦が、１５年足らずの短期間で滅亡した大原因の一つは、民心の安定を度外視した、万里の長城を始めとする始皇帝の工事好きではなかつたか。まつりごとの要諦は、民を養うことである。頂点に立つ者として民の心を聞き、国民の楽しみを楽しむ事に徹しなければならないと、教訓を示している。

秦の始皇帝



秦始皇陵　始皇帝は70万の人民を動員し，地下宮殿を有する陵を生前に構築した。

兵　馬　俑

始皇帝陵の東方約１２００メートルのところにある西楊村で、１９７４年におびただしい等身大の陶製の武人や馬が発見された。日本の各所で此の俑が展示された機会に、わざわざ東京まで胸をふくらませて見学に訪れたことは、極く最近のことであつた。

始皇帝陵が墳丘から内城と外城を備えた都市構造であるばかりか、外城の外に発見された俑坑群を含めて、更に超広大な墓と広がり、空前絶後の大墳丘を形成している。誠に始古墳皇帝であり世界に類がない。

俑坑に近ずくと車窓から、銀色に輝く体育館のような近代的大建築物が見えた。内部の写真撮影が禁止されているために、カメラをバスの中に残しての参観であつた。

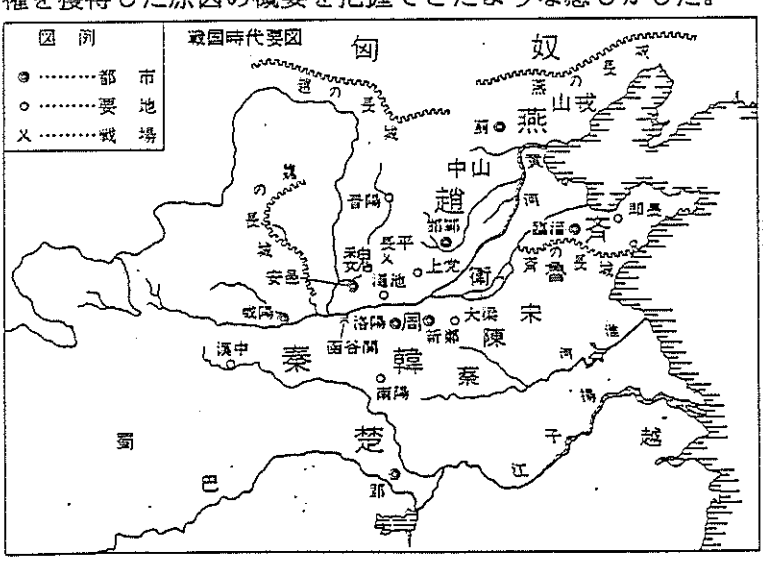
幅６０メートル奥行２１０メートルの超大な白色ドーム型の建物に入ると、何人も唖然とさせられる想像外の大規模なものだ。

地表から４・５メートルのところに縦に１０の坑が並び、一坑ごとに兵馬の俑（古代中国で殉死者の代わりに埋葬した人形）が、前衛から後衛まで十列に整列している。歩兵から砲兵・戦車隊と皇帝の生前の軍団をそのままに配置し、まさに専制君主の皇帝が親兵式に臨んでいる威容だ。現在も発掘中であり推定８０００体に及ぶのではないかと、いわれている。よくも２２００年前の昔に、これほどのものが造られたものだと、身に戦慄を覚えるのであつた。

説明書によると、髪形や服装は全部異なっており、兵士でも騎兵と歩兵では鎧の構造が違っている。容貌も一人一人が違い、関中の人とか、巴蜀（四川省）の人とか、或いは西北の異民族とか、それぞれの特色があるという。

春秋時代の覇者であつた晋が衰微して、爾後、戦国時代の七大国が覇権を争った中で、秦が何故に天下の統一を成し得たのであろうか。青春時代に中原の野に鹿を逐うごとく戦った我々には、誠に興味の深いものである。

関中地域を空から瞰下し、今此処に始皇帝陵から兵馬俑坑を見学した結果、秦が覇権を獲得した原因の概要を把握できたような感じがした。



秦が国土とした関中平野の黄土層地帯は農耕に適し、原始的な農機具でも十分耕すことが出来た。また関中八水といわれる水量の豊かな河川が農地を潤し、作物の出来が良く、経済的に他国に勝っていたことが第一だ。地理的に西方に位置した関係から、西方の冶金技術が取り入れ易く、兵器や車両造りに大いに貢献したと思われる事が第二だ。地形的に守り易い有利さが第三だ。即ち中原地区（黄河中流）から関中へ侵入するのには、函谷関の嶮を突破しなければならず、南に武関、北に蕭関、西に隴関があり、天下の嶮に囲まれた国家そのものが、大城郭となつていたのである。

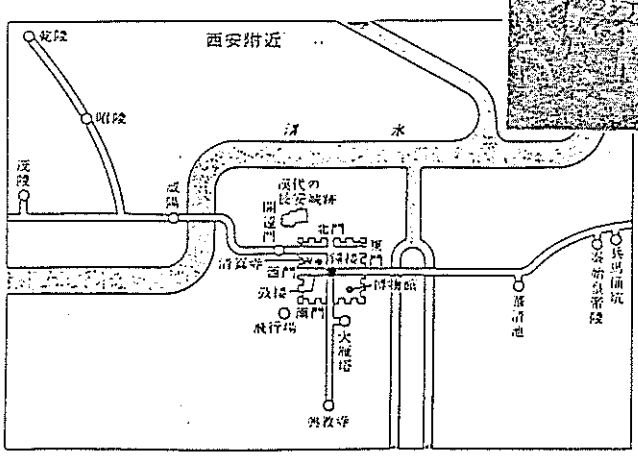
其れに加えて等身大の兵馬俑で想像できるとおり、秦の兵士の体格の良さが第四であろう。身長１８０センチもある周辺民族の血が濃厚に入り、中でも騎馬民族の血は機動力のある騎兵に適し、中原の兵士とは比較にならない立派な体格である。

最後に、始皇帝は軍事面でも戦略家であつたことの他に、他国に人材を広く求めた点も見逃すことはできない。

このように始めて中国を統一した彼の遺物を眼前にするとき、人馬は今にも動き出すような実感が我々の肌に流れ、彼の威厳は２０００年後の我が前に、再び息を吹き返したようであつた。

万里の長城にも匹敵する壮大な兵馬俑坑は、一体誰が発見したのか。西楊村の人民公社で働いていた楊培彦という人が発見者であり、現在も生存しているという。楊さんたちが農作業の井戸を掘っていたところ、地下４メートルのところで土器を発見したことが、切っ掛けとなつたのである。大発見者は秦にとつても現中国にとつても、最高の貢献者である。

兵馬俑の参観を終わると、我々の前に中国の物売りが殺到し、広場には堂々と屋台店が御土産の品を並べていた。これも過去の訪中では見ることの出来なかつた光景である。経済が変化して自由な商売も認められてきたのである。



中国に友好と興味をもつ我々に強烈な印象を残した本日の予定は終了して、一路、西安賓館へと帰路に着いた。数々の歴史を流した渭水には数本の橋梁が懸けられ、小・中学生たちの下校時と重なつて、人の往来がはげしくなつて来た。

バスは小雁塔に立ち寄ったものの、塔に登る時間がないからと写真撮影のみに終わつた。此のことは我々に時間がないのではなく、運転手や通訳が労働時間を厳守する為であり、依然として社会主義の国家にはサービス精神が欠如している。

小雁塔は旧長安城のほぼ中心部にある大薦福寺境内に聳える、７０７年に建立したものであり、十五層４５メートルの高さがあつたが、大地震によつて上部の二層が崩壊し、現在は十三層４２メートルである。病弱で死んだ高宗を悼み、則天武后の発願によつて建立されたものという。

西安賓館は眼下に小雁塔を見おろす閑静な場所に建ち、十四階建のアメリカン・スタイルの近代的ホテルである。昨日宿泊した上海の和平賓館より数段も優り、西安の印象は更に良好であつた。徒然に売店をひやかして中国語を交えたショピングもまた、旅の想い出を助長させたのである。

十月六日

阿　房　宮

長崎と同じ程度の緯度と思う西安は、天候異変らしく夏型で非常に暑い。天山山脈は寒いと云うことで、冬服の準備を整えてきた我々は、予想外の暑さに面をくらつた格好だ。

八時半に西安賓館を出発して、今日は予定道りの茂陵と乾陵の観光へとバスは西の方に進んで行つた。途中には地図に示す阿房宮跡がある。数分間でもよいから是非立ち寄ってくれるようにと、通訳に請願したが、昨日と同じく体よく拒否されてしまつた。

理由は畑ばかりで跡形もなく、観光の価値なしとの、すげない返事であつた。其の点は教えられなくとも承知のうえだ。古代史を学ばない否教えられない中国の若い通訳たちと、我々年代のものとの間には大きな価値観の相違がある。此の点は過去にも幾回となく経験したことだ。

始皇帝の大建築、大工事をあげると、まず六国（りつこく）宮殿である。一つの国を打ち破る毎に、その国の宮殿を模型にした建物を、都であつた咸陽の北の山に造ったことは有名である。これらの遺跡は現在発掘中と聞いておる。

前２１２年に渭水の南の天子の庭園に阿房宮を建てた。この宮殿は階上に一万人以上の人が入り、階下は五丈の高さの旗を立てる事ができ、廊下ずたいに直接南山に行くことが出来たと云われている。

この阿房宮は始皇帝の在世中には完成せず、二世皇帝の時に建築中止となつたもので、非常に由緒ある宮殿の一つである。これから数年後に項羽に占領され、火を放たれた宮殿は三か月にわたつて燃えつづけたと云われる、歴史的遺物の跡である。

口惜しい思いを味あうなかをバスは通り過ぎて行つてしまつた。

咸　　陽

渭水を渡ると秦が都した咸陽市である。渺渺とした一望千里の平坦な地形の中に、一つの高層建築が一際高く聳えているのが見えている。小さな町にある日中合弁のカラーテレビ工場で、そのほかは他の町とかわるところはない。バスの中から素早く渭水の流れをカメラにおさめる事が出来たことは幸運であつた。渭水といえば長安、長安といえば渭水と云われるほど、日本の人にも親しまれているのである。

当時の秦は戦国七雄の中では最も西方に位置して、その領土は現在の甘粛・陝西省一帯にまたがつていた。秦は前３５０年の孝公の時に、都を陝西省の岐山西方から咸陽に移し、時が流れて彼の名声高い政治家・商鞅が大改革を断行し、他国に先駆けて近代化をはかつた事を思い出す。

咸陽に遷都した理由は、ここは秦国の中央にあつて渭水に近く、土地は平坦にして肥沃、農産物は豊富であり、東方諸国にも近いと云うことであつた。また軍事戦略的にも有利で、外交往来にも便利な点もあげている。

始皇帝が即位した時には、本拠地の関中（陝西省）を中心に、南は四川・漢中（陝西省南部）から宛（河南省南部）、北は山西省、東は河南省の中部にまで及んでいた。以来、咸陽は秦王朝が崩壊する前２０６年まで、約１５０年にわたつて首都として栄えたのである。

写真で見ると、咸陽城跡は平坦地の中に保存されていて、小規模ながら博物館も設けられている。しかし時間に余裕がないのか、此の名高い咸陽の都も亦素通りであつた。

茂　　陵

咸陽を通り過ぎると一面に浩洋とした渭北丘陵地帯がひろがり、農村部落には刈りとつた「とうもろこし」が、軒下や周りの樹木に所せましと吊るされていた。この異様な光景は初めて我が眼を楽しませてくれて、唐の地だつたという感をうけた。一望の平野に小高い丘が点在し、いずれも前漢時代の墓で古色蒼然としている。西安からバスに揺られること一時間半、漸く到着した所は茂陵博物館の前であつた。

茂陵は秦に代わって中国に君臨した前漢（前２０２－紀元８年）王朝の第七代目皇帝「武帝」（前１４１－８７の間在位、享年７０歳）の墓である。

秦の始皇帝が天下を統一すると、万里の長城を築いて北方に対する防備を固めると共に、匈奴討伐に大軍を派遣したが、秦末の大混乱に陥ると同時に、匈奴は再び中国の北辺に深く侵入した。

漢の高祖（劉邦）が天下を制覇して自ら匈奴作戦に乗り出したが、高祖自身が危うく捕虜になりそうな敗戦に陥り、匈奴と屈辱的な和解をしなければならなかった。

その後、漢帝国は約６０年のあいだ国力を蓄積する時期に入り、武帝が天子に就いた時には、国家の金蔵には金がうなり、穀倉には穀物が山積みになつていたという。

覇気に満ちた若い皇帝は、匈奴のために西方に追われた月氏国（げつしこく）と同盟を結んで、東西から匈奴を挟撃するという戦略態勢を整える為に派遣された人が、有名なシルクロードの開拓者である「張騫」（ちようけん）であつた。

対匈奴作戦に当っては、武帝が起用した衛青（皇后の弟）と、後日の霍去病（衛青

の甥）らの将軍が目覚ましい働きをしたのであつた。特に霍去病（かくきよへい）は、西安の次ぎに訪れる蘭州一酒泉から祁連山脈地区までも駒を進めたのである。対匈奴作戦の勝利は漢帝国始まつて以来というか、中国始まつて以来の大勝利であつたと云えるだろう。

これらの作戦によつて河西の地である甘粛ばかりでなく、更に西の新疆からも匈奴勢力を駆逐し、この地区を漢の支配下に収めることに成功したのである。

前１２９年から始まった数次の匈奴作戦は紀元１１９年の出撃を以つて終わり、結果的には匈奴を撃滅することは出来なかったが、決定的な打撃を与えたのであつた。武勲赫々であつた霍去病は１２１年に２４歳の若さで病没し、彼はまるで対匈奴作戦に生まれたようなものであつた。夷狄に膝を屈しなかつた筆頭の軍人であろう。

武帝はまた北方や西方ばかりでなく、今の広東・広西省からベトナム北部にかけての南越国や西の雲南省全域を制圧し、引き続いて矛を朝鮮に向けてこれを支配下に置き、竜が勢いに乗ったようであつた。

このように武帝の目ざましい外征に依って、当時の世界史上かつてなかつた大帝国を打ち立て、まさに其の名の通り「武」にたけた皇帝である。

茂陵博物館には馬・牛・象・虎などの巨大な石の彫刻群が展示され、匈奴を組み伏せる天馬の石刻は特に目に着いた。館の裏の小高い丘が霍去病の墓となつていて、墓丘の上に登ると、西の方に武帝の寵妃李夫人の陵が直ぐ前に見える。また其の延長線上の遥か向うに、武帝の陵がやや大きく盛られ、歴史的な武勲を偲ばせていた。

帰路、武帝の永眠する茂陵の参道の手前で下車してシヤツターを切ったが、今日では観光客だけが訪れる寂しい静かな墳丘となつていた。

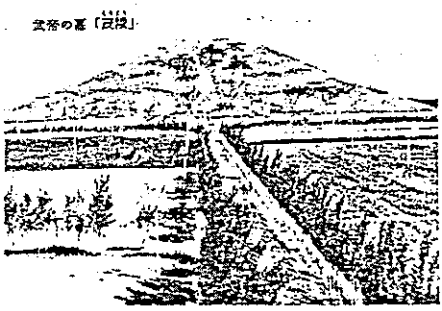
張　　騫

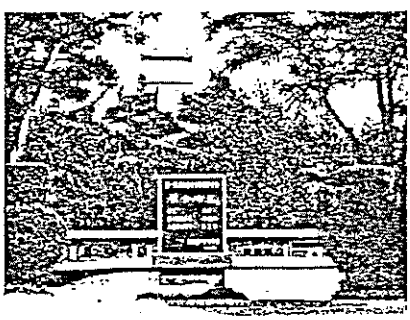
武帝の茂陵を記述しながら、シルクロードの先駆者であつた張騫の功績を書き漏らしては、今次旅行の紀行文にならないだろう。

項羽が劉邦を「漢中の王」に任命してライバルを僻地に閉じ込めたが、劉邦は其の「漢中」の地を足がかりにして、遂に項羽を倒して天下をとつた事は有名なことである。劉邦が再興起した地名にちなんで、自分の王朝の国号を「漢」と称したのである。

張騫は其の「漢中」の出身で今の陝西省の西南部である。

武帝が即位した前後に「匈奴は月氏王を破り、その頭を以つて飲器となす。月氏は遁走して常に匈奴を怨み仇とすれども、ともにこれを撃つものなし」という情報が入って来たのであつた。


武帝の墓（茂陵）


霍去病の墓

月氏は遊牧と農耕を兼ねた敦煌地方を根拠地とした民族で、その領域は背後の中央アジアまで広がつていた。匈奴に破れた月氏は、月氏の富強の源泉であつた拠点の敦煌を失い、西方に遁走して行った。

匈奴に対して燃えるような復讐心を持つ月氏と同盟ができれば、漢は宿敵の匈奴を撃ち破る事ができるかもしれない。そのように思った武帝が軍事同盟締結のために、月氏へ使者を送ろうとした。それに応募したのが張騫であつたのである。（従人に匈奴出身の甘父がいた）

漢の都である長安を出発した張騫の一行は百余人であり、（前１３９年頃）彼らは現在の蘭洲のあたりから西に向い、匈奴の勢力圏に入って行った。甘粛省の西部である今の鉄道沿線の地域は、山と砂漠にはさまれ、長い渡り廊下のようになつている。これを河西の回廊とよんだが、全長１０００キロをこえるだろう。

匈奴の警備の手薄なルートを選定したが、細長い地域であるために、敵の目を逃れることは至難である。やはり匈奴に捕まってしまつた。

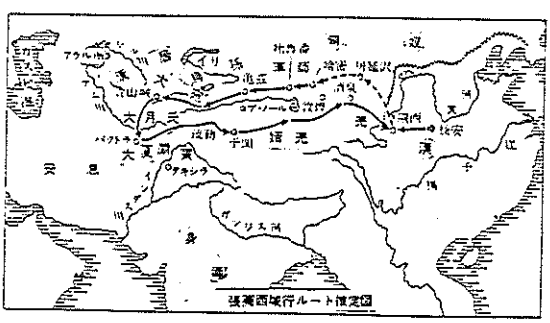
帳騫は匈奴の単于（ぜんう・王のこと）のもとに送られて抑留期間は十余年に及び、匈奴は彼に妻まで与え子供もできたのである。特別待遇を受けて満足しているやうに見せ掛けながら、彼は初志貫徹の志は曲げずに脱出の機会を窺っていた。

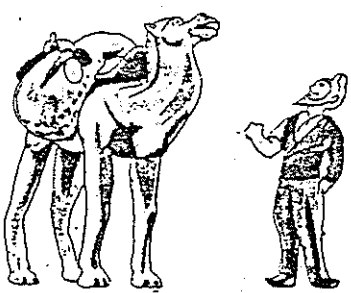
前１２９年に武帝は匈奴に対して積極策をとり、漢軍は大軍を以て進撃を開始すると、匈奴軍もまた大動員を実施し、その混乱に乗じて張騫は脱出に成功したのであつた。

彼は長安に帰国せずに西走すること数十日、漸く大宛国に到着した。大宛は現在のソ連ウズベク共和国フェルガーナ市付近（タシケント東南方）である。再び小国の康居国を経て大月氏に着いたものの、大月氏は漢国との軍事同盟には同意しなかつたのである。（匈奴に破れたあと、移動した集団を大月氏と称し、敦煌に残って匈奴の支配を受けた集団を小月氏と呼び分けている）

大月氏が移住したサマルカンド地方は土地肥沃で、南の大夏族も臣従している状態から、現状に満足して匈奴に対する復讐心を失っていたようである。万策尽きた張騫は帰国するほかはなかつたが、帰路は匈奴の勢力圏を避けて、西域南道即ち崑崙の山麓に沿つて東に向かつた。しかし途中再び抑留されたが、運良く一年余で脱出する機会をつかみ、長安を出発から十三年を経て前１２６年に帰国できたのであつた。

出発した時には百余名いた者が、帰還したのは張騫と甘父の二人に家族だけであつたという。死と対決しながら、かけがいのない生命を賭けた彼の強固な意志は、戦闘以上であつて感服しなければならない。





張騫の軍事同盟締結という目的は達成できなかつたが、西域の地形・産物・住民・政治などの諸事情が明瞭になつて、漢にとつては東西交易は勿論のこと、軍事面においても大きな利益となつた。彼は其の功績によつて博望侯に封じられて、故郷の関中には「博望侯の墓」が建てられ、敦煌莫高窟の第３２３番に張騫の西域物語りが壁画となつている。

後日の玄奘三蔵の旅路にも大いに参考になつたと思うが、国に殉じて死せず、異民族の中へと困難な道を選び、窮境に立つて自棄にならない鉄石の意志は、世を震動させたことだろう。

楊　貴　妃　墓

茂陵を去り時間の余裕があると云うことで、予定以外の楊貴妃の墓を訪れることになつた。図上で見ると西安の西方７５キロ付近だから、茂陵（西安西方６０キロ）からは、そんなに遠くはない筈だ。

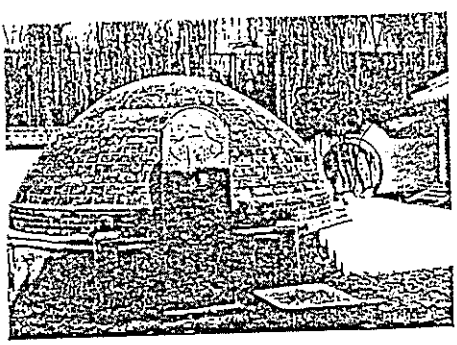
前記の前漢時代から一転して再び唐時代の歴史となる。

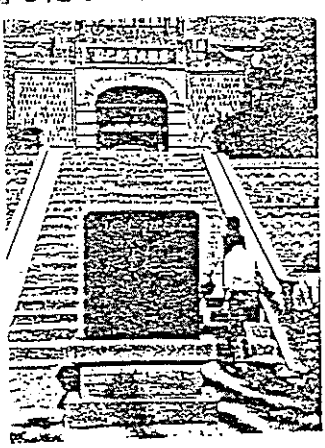
唐の玄宗皇帝（６８５－７６２、在位４５年）の前半期は「開元の治」といわれるように政務に精励したものの、後半期は楊貴妃に溺れて国を傾け、政務は専ら宰相に任せきりであつた。そして楊貴妃の一族であつた楊国忠が宰相にまでスピード出世した。

胡人出身の武将である安禄山は玄宗のお気に入りの男て楊貴妃にも取り入り、彼女の養子になつたとまで伝えられている。楊国忠は７５５年４月、長安にある安禄山の私邸を兵士に包囲させ、安禄山の部下を逮捕して拷問にかけた。安禄山に叛意があるという事で、これに挑発して謀反を起こさせる策略であつた。当時は競争相手を追い落すことは常のことである。

此の事件の直後、玄宗は安禄山に対し、禄山の息子と皇族の娘を結婚させるから、上京せよと言つてきたが、謀略ではないかと不安を感じた安禄山は、病気を理由にことわつた。（玄宗は安禄山に叛意があるとは信じていない）

同年１１月、楊国忠討伐をスローガンにして、２０万の将兵を率いた安禄山は北京から南下して東都の洛陽を陥れ、潼関（西安東方の黄河河畔）で持久戦となつた。７５６年元旦、安禄山は洛陽で帝位につき大燕帝と称したのであつた。





潼関の持久戦は官軍によつて破られたが官軍の完敗に終わり、安禄山軍は勢いにのつて長安へと迫つた。

６月１０日御前会議が開かれ、楊国忠は蜀（四川省）へ避難を提案し、玄宗は意を決して６月１３日早朝長安を脱出したのである。

翌６月１４日、一行は長安から馬嵬（ばがい）という宿場に到着した。たまたま楊国忠が外へ出たところへ、吐蕃（とはん・チベット族）の使者が２０人ほどやつて来て、楊国忠の馬の前で食糧を要求した。

この情景を見ていた兵士の一人が「楊国忠が吐蕃人と謀反の相談をしているぞ」と叫び、兵士たちはおどりかかつて楊国忠を殺し、楊貴妃の姉や国忠の息子を殺害してしまつた。一般民衆の楊一族に対する憎悪が如何に深かつたか、玄宗はいま思い知らされたのである。

玄宗は兵士たちをなだめて解散を命じたが、兵士たちは動かない。「楊国忠が謀反をくわだてたからには、楊貴妃が陛下のそばにおられるのは不都合。おそれながら貴妃のお命を」と迫った。

玄宗は「貴妃は国忠の謀反にかかわりがない」と反発したが、宦官の高力士が口をはさんだ。「貴妃がおそばにおられる限り、将兵は安心いたしませぬ。ご決断ください。此の際は兵士たちをなだめるのが一番です」

結局、玄宗は貴妃を殺さない限り事態の収拾は不可能と判断した。そして高力士に命じ、宿場の仏堂で楊貴妃を自ら与えた薄絹で殺させたのである。このとき貴妃は３８歳。玄宗と共にいること１６年であつた。

このような馬嵬の悲劇の主人公をまつる墓陵の下に、興平県人民政府の名を掲げて陝西省の重要文化財に指定した旨が、書かれてあつた。

墓は二十段ばかりの石段を登ると、煉瓦で囲んだ塀垣の真中に造られてある。直径５メートル、高さ３メートル、煉瓦で包んだお椀を伏せたような墓陵が、世紀の美女の姿である。（前頁の写真）

墓の盛り土は美容に良いということで持つて帰る人が多いために、今は表面を煉瓦で覆つているが、女性の参拝客の多いことも首肯けた。

我々と同時に参拝したクーニヤンたちが、何かの種子をうまそうに食べていた。「センマ」と言葉をかけると向日葵と紙に書いてくれたが、彼女等も遠方からやつて来た美顔志望者の一団であろう。

白居易の長恨歌にある馬嵬のところに、

天旋（めぐ）り地転じて　竜馭を廻（めぐ）らす　此（ここ）に到りて
躊躇して去ること能はず　馬嵬の坡下（はか）　泥土の中　玉顔を見ず
空しく死せし処　君臣相顧みて　尽く衣を霑（うるほ）す　云々

玄宗は楊貴妃を馬嵬で死なせ、蜀の国に落ちのびた。その帰国の途中の事である。天下の情勢は一変して、天子の車は都に向けて帰還する事になつたが、馬嵬までやつて来ると、心は迷つて立ち去る事ができなかつた。馬嵬の坂道のほとり、泥土の中、そこにはかつての玉のような貴妃の姿も見られず、ただ殺された場所が空しくあるばかりだ。天子も臣下も互いに顔を見あわせて、みな涙で上衣をぬらした。云々

乾　　陵

楊貴妃の墓からバスで約一時間走りつづけ、次第に高台へと上つて行くと、各所にほら穴の住居が見えており、現在でも使用している。中原会戦時の山西省のほら穴生活を思いださせてくれたが、田舎でも住宅難だろうか。

途中下車して通訳が世話してくれた熟し柿は実においしくて、これまた空腹の連続だつた中原会戦を思いだした。遠望する限りの浩渺とした中に、やや小高くなつた丘が三重になつて見えてきた。

此の丘が乾県の梁山（１０４０メートル）と云う山であり、自然の山に墓室を造ったものが、唐の第三代皇帝「高宗」と、その妻の「則天武后」を葬つた乾陵である。また周囲の丘には太子や公主の陪塚が十七基もまつられて、唐代墓陵の中で最大の墓群といわれている。

先ず乾陵博物館に案内されて、発掘された陳列品を見学し、特に眼に留まったものは大きな埴輪であつた。矢張り大唐の君主のものに相応しいものばかりである。

続いて永泰公主（えいたいこうしゆ）の墓に詣でたが、この墓は地下５０メートルの奥に棺室があり、４本の黒石の柱で囲んだ棺の中にまつられている。坑道からは運搬できない大石のため、縦穴を山の上から掘り下げて下に降ろし、再び山を埋めたという。古代から盗難予防のために用いられた方法である。

それにしても永泰公主（公主は皇帝の娘のこと）は実に気の毒な人であつた。高宗の孫娘に生れながら武后の怒りに触れて１７歳で殺され、死後に許されて乾陵内に陪葬された人である。地下の優艶な宮女を描いた壁画は素晴らしく、彼女を慰めているようで、尚更悲哀を感じたのであつた。本当に人間の一生は間髪の間に決まるのであろうか。

再びバスに乗車して乾陵の正面に移動した。一直線に梁山にのぼる参道は５００メートル以上の距離はあるだろう。広い参道の両側に並ぶ石人や石獣は１００個ではきかない大変な数だ。献上された動物を型どつて造つた石像である。

乾陵を臨む参道頂上の少し下に、６１体の石像が両側に分かれて立っている。これは高宗の葬儀に参列した諸外国の王や使節の像であると云う。今日では元首が死亡した際に、外国の代表が参列することは通例だが、１３００年の昔から其の習慣があつたようだ。大唐の力を遺憾なく誇示していた。

不思議なことに、此の諸外国の王や使節の石像の首は悉くちよん切られている。一体なんの目的で首をはねたのか。兵牙を受けたにしては不自然だ。

唐王朝が亡んで五代十国の戦乱の時代に入ると、各国とも唐とは無関係であつたという方が都合がよく、そのために人を派遣して自国の像の首を切り落したと、伝えられている。

参道の一番奥に無名碑が建っている。この碑は「私の行った事績はかぞえきれない。余りに多くて碑に書き切れないから、白紙のままにして碑を建てておく。後世の人よ、私の評価が決まったら、思うがままに私の業績を刻むがよい」と則天武后が遺言したからだという。これだけみても空前絶後の自信に満ちた女傑でおつたことを証明している。

此の墓陵を拝観すると、北京郊外の明の十三陵は、乾陵の参道の石像を真似て造ったのではないかと、思われてならない。

参道を下ってバスの待つ所に来ると、古いコインを押し売りする子供が、大勢集まって賑わっていた。良く見てみると概ね清朝時代のものが多く、洛陽を始め古都で見かける光景と同じだ。其の中に珍しい「中華民国二年」の弐百文銭が二枚あり、真贋の程は不明だが、参観記念に買い求めた。

ここをもつて本日の観光は終了し、バスは東方９０キロの西安に向かったのである。

則　天　武　后

乾陵のところの最後に空前絶後の女傑と記述したから、彼女の概要をかくことも意義が有るものと思う。

彼女の姓は「武」で名は「照」である。父親が唐の初代皇帝高祖と第二代の太宗に仕えて、立身出世した関係から、十四歳のときに極く低い「才人」の階級で、太宗の後宮に入った。（後宮制度は楊貴妃の項を参照）

太宗には皇子が十四人おつたが、波乱の決果、第九子の「李治」が第三代皇帝の高宗となつた。

貞観二十三年（６４９）英傑と云われた太宗が崩御。その時太宗の後宮では、天子の寵を受けた事があつても、子女を儲けなかつた宮女たちは、御用済みの御払い箱として、後宮を出て尼になるのが定めであつた。

花も咲かず実も結ばない灰色の生涯を送るべき運命の彼女は、前途を放棄するような「武照」ではなく、それ以前から誘惑ともいえる巧妙な手で、皇太子「李治」と通じ、尼寺に入つてからも其の関係は続いていたいたらしく、高宗との間には既に男の子をもうけていた。それが高宗の第五子「李弘」である。つまり彼女は父の太宗と、息子の高宗との両方に通じていた訳で、近親相姦であつた。唐は色を以て興り色を以て滅びたと云われても仕方なしだ。

高宗の皇后「王氏」には子女がなく、高宗は第四皇子の母である「蕭淑妃」（しょうしゅくひ）を寵愛して、互いにライバル視していた。皇后が思い就いたのは、以前から高宗の愛を受けていた尼の武照を再び後宮に入れて、その力を借りることであつた。このことは高宗の望むところで、武照は後宮入を果たし、遠大な野望を抱く彼女は最上級の皇后の地位を狙ったのも当然だろう。

高宗と武照との間に生まれた女児の嬰児殺しの容疑で、王皇后を失脚させ、手足を切断して酒がめの中に投げ込んだと云う悪さであつた。

先輩の后妃たちを引きずり落して、念願の皇后となつた武后は、夫の高宗より四、五才年上の女房で、生来病弱であつた高宗は次第に政務から遠ざかるにつれて、武后は天皇に代わって政事を決裁し、所謂、垂簾政治を始め、高宗を天皇と称し、武皇后を天后と称した。

異腹の子の長子を廃して実子「李弘」を皇太子に立てたが、自分の意志の外に出る言動を怒り、謎の急死を遂げた。天后によつて毒を仕込まれたと云われている。

続いて立った第六子の李賢も二重三重の罠によつて四川省に流され、第七子で天后の子である李哲が皇太子となり、高宗の死後に帝位について中宗と称したが、これも即位後わずか五十四日の短命皇帝に過ぎなかつた。

次ぎに弟の李旦（高宗の第八子・武照の実子）を皇帝に立てたが、皇帝あつて皇帝なき天后の治世、所謂、則天武后の時代が始まつたのである。

太后の政治は、名目だけの唐の皇帝に代わって政務をとるというだけでなく、自身が后から帝の地位につき、「李」姓の唐王朝でなく「武」姓の新王朝を建てるという遠大な野望にむかつて、密告制度を組織化して恐怖政治を行つたのである。

次々と家臣・忠臣を問わず、邪魔ものは悉く消されて、内外ともに女帝の出現登場を待つばかりの態勢を整えた６９０年９月、傅遊芸という男が団長となり、人民九百人余を率いて、新しい周の王朝を建てて太后が皇帝となるよう請願した。太后は一旦これを辞退した。云うまでもなく打合せ通りの芝居である。続いて官吏・僧・道士・商人・異民族酋長など六万の衆が請願に集つた。これも筋書き道りの演出である。

九月七日、この厳粛な茶番劇も大詰を迎え、太后は皇帝即位の請願を「やむなく承認」し、九月九日には宮城の前殿に出御して布告を発し、唐朝を廃して新王朝を周と称し、年号を「天授」と改めた。

越えて十二日には聖神皇帝の称号を受けて、史上空前の女帝となつたのである。

洛陽で薬を売つていたと云う立派な肉体の持ち主であつた薛懐義（せつかいぎ）が、六十歳前後の太后の閨房の相手を勤め、これを利用して帝政実現の為に演出させ、或いは八十歳近くなつた老女「則天」が薛懐義を消して、二十才代の美少年である張易之と張昌宗の兄弟を、淫楽の相手にしたなど、未曾有の女帝の権謀術数は面白い話ばかりである。

７０５年１月２２日の朝、クーデターによつて退位を迫られた則天は、これを拒否する気力もなく離宮に移され、此の年の十一月に世を去つたのである。

十四歳で太宗の後宮の一侍女となつてから、飽くなき権勢慾と精力から女帝に登りつめた彼女も、遺言によつて皇帝としてではなく、高宗の皇后として葬られる事を願い、翌年、高宗の眠る乾陵にまつられたのである。

日　程　変　更

乾陵からホテルに帰館すると、添乗員は予定が変更になつたことを告げた。予定していた明日十三日発の蘭州行の飛行機の予約が取れず、西安出発は明後日となつたため、明日も西安に滞在するということだ。

ツアーの連中の中から種々雑多な意見が出たのは当然だ。問題は明後日に出発して、蘭州観光の場所が制限される事である。河西回廊の入り口から予定通りの旅が出来ないことは、それから先の長い日程に支障を来すからである。

一か月も前から全額を納めて予約しておきながら、今になつて飛行機の切符がとれないなど、自由諸国では考えられない信用問題だ。我が体験からすると、大手業者では此のような変更は、絶無とはいえないが、先ず有りえないことである。金額が安いからといつて、小さな業者を選定した我々にもミスがあるのかも知れない。それだけ小さい業者には実力がないからだ。

夜行寝台がとれないのかと抗議する人もいたが、実権は中国の国際旅行者が握り、日本の業者は哀れな存在だ。中国よ。もう少し、しつかりせよ、と注意したい心境であつた。

西安における観光は計画通り終了していた。不満を持つ人の中から、函谷関か三門峡に案内せよと通訳に迫ると、１２００キロもあるところに日帰りの旅行は出来ないと却下された。詳しい地図もなく里程表もなくては、反発することもできない。

確かに中国は慢慢的でサービス精神は劣悪だ。外貨獲得の有力な手段の一つの、観光客を余りにも無視している現状では、宣伝通りの発展は望めないだろうと、諦めたのである。

十　月　七　日　　西安滞在

大　雁　塔　（大慈恩寺）

本日午後の蘭州行きの航空券がとれず、終日古都の見学となつた。幸か不幸かは後日の行程が決定することで、西安に満三日間も滞在することは、普通のツアーでは求められず、これ以上の西安見学は少ないだろう。西安に精通するということで諦めることだ。

先ず市の南４キロにある大慈恩寺に詣でた。石と煉瓦で造った七層６４メートルの大雁塔に、老体に鞭打って一気に頂上まで登った。西安のシンボルである此の塔には東西南北に窓があり、西安を一望のもとに眺望することができた。

唐の高僧の玄奘が、インドから持ち帰つた仏典の飜訳と、其の収蔵のために建立を献言し、玄奘の設計によつて６５２年、第三代皇帝高宗の時に建てられたものである。

唐末の８７５年、黄巣集団が蜂起して国内は乱れ、五代時代の後梁の太祖となつた朱全忠が、唐の哀帝に譲位を迫って唐を滅ぼした。

朱全忠は都を洛陽に移した際、長安を徹底的に破壊して、長安は廃虚となつたといわれたが、大雁塔と小雁塔だけは破壊することが出来なかつたのである。両塔ともに長安城内にあつたもので、１３００年の歳月を経た今日も厳然として聳え、唐の昔を

偲ばせてくれた。

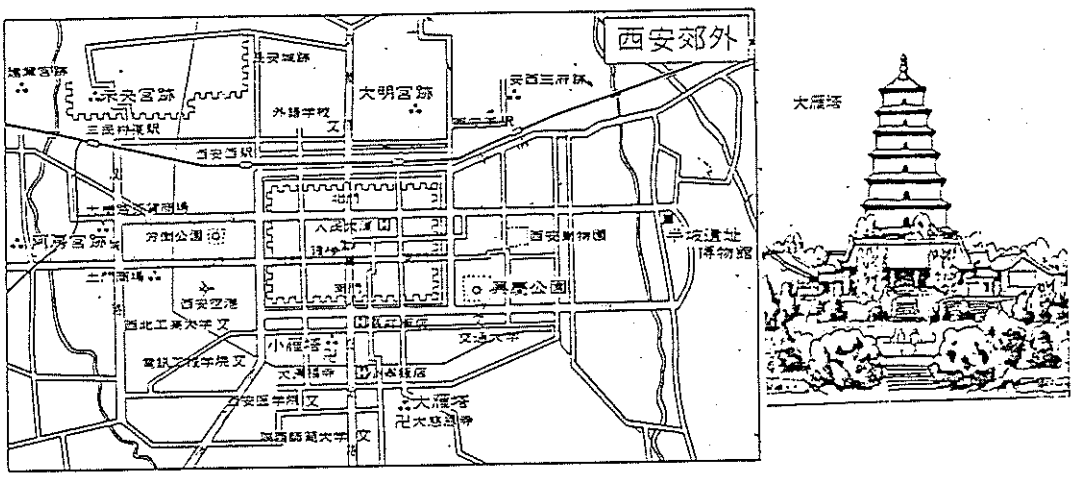
塔の一階には、中国の著名な塔の写真が掲示されてあつたが、其の中に、開封の鉄塔（正式には祐国寺塔）や杭州の六和塔、蘇州の虎丘塔などもあり、懐かしさ百倍であつた。

塔から降りて慈恩寺に参拝し、子供のころから両親に教え込まれた玄奘の写真を撮る。現在の寺院の建物は明時代の建立によるもので、唐代の寺院の大きさは十三倍であつたという。

日本にも慈恩寺という名称をなのる寺は多い。昭和十七年十二月、南京に石棺が発見され、専門家が鑑定した結果、玄奘三蔵の頂骨を納めた棺であることが判明し、中国側が遺骨を葬る五重塔を、南京郊外の玄武山に建設した。日本側からは重光大使が出席し、盛大な落成式が挙行された。

この時、玄奘三蔵の分骨が日本仏教会に贈られ、坂東三十三か寺の一つである埼玉県岩槻市慈恩寺一三九にある慈恩寺に安置された。

数年前に坂東三十三か寺の霊場巡りをした時に、此の寺に参詣したことがあり、其の本家とも云える西安の慈恩寺に額ずく事が叶えられたことは、有難い幸であつた。



玄　奘　三　蔵

玄奘ゆかりの大慈恩寺に詣でて、愈々明日から玄奘の辿った行路を訪れる我々は、高僧の偉大な業績を偲び、師の概要を記して置かねばならない。

世界の文化史を飾る巨星というべき玄奘三蔵は、隋朝の首都・洛陽の東方で生まれ、十歳の時に父母が世を去り、十三歳の時に数百人の中から最年少で選ばれて僧籍に入り、洛陽の名刹浄土寺に於て法名を玄奘と呼ぶことになつた。当時正式に僧籍に入るには、極めて狭い門を通らなくてはならず、天下の俊才が競って仏門に入ることを望んでいたいた。

玄奘十七才の時に兄（玄奘より先に僧籍に入り秀才であつた）と共に、経巻を背負つて新興の唐の長安に入り、引き続き蜀（四川省）の成都へと旅をした。その後揚子江を船で下り河南省の彰徳から河北省に入り、それぞれ各地の高僧に師事し、二十三

才の時に長安に戻った。その時の師から「そなたは仏門の千里の駒である。将来、釈尊の教えを輝かすのは、まさしくそなたであろう」と激賞されたのであつた。それから青年僧の玄奘の名は都の内外でも、有名となつたといわれている。

僧籍に入つて十数年間、各地を遊歴して教えを乞うたけれども、それぞれの宗派の説を立てて、説くところに異同があつた。また自分が今もつて疑問とする根本的な問題だけでも百以上もあり、誰も納得のいく解釈を与えてくれない。此の上は仏教の起こった本源の地までいつて、そこの学者に尋ねる外はない。

彼の地には中国語に訳されていない教典も多くあるだろうし、飜訳にあたつていろいろな錯誤もあるだろう。そして其の旅は極めて困難であることは良く分かるけれども、男子が身命をかける価値のある仕事であることは明白だ。法顕や智厳のごとく、求法取経の大旅行を企て、その目的を達成した人たちもいるではないか。あの先達たちも人ならば、我とても人である。このように自分は聖法の為に、命をかけようと決意したのであつた。

熟慮の末、一度決意するともはや不退転で、百難に立ち向つて屈しない事が、この人の本領であつた。初めは彼と志を同じくし、同行を約束した僧も数名いたらしいが、西域を経てインド行きの願書を提出したところ、国法によつて禁止されているとして却下されると、それぞれ皆は断念してしまつた。

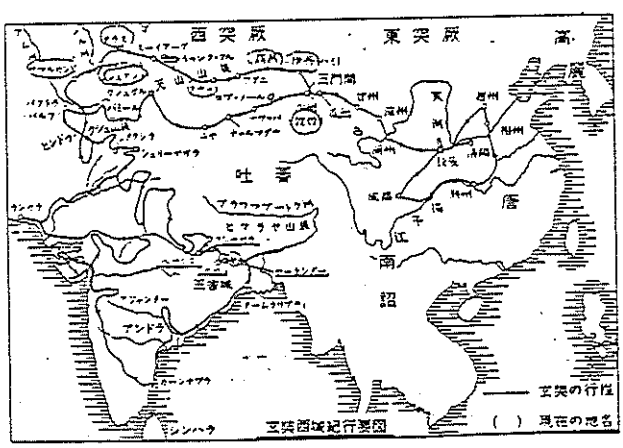
玄奘一人は屈しなかつた。三度まで願書を出して拒否されると、国法を破って出国の決意を固めた。長安出発は唐朝第二代の太宗の即位四年目にあたる貞観三年（６２９）秋であつた。

玄奘の辿つた経路は要図のとおりで、我々の旅行日程にある瓜州（安西）・哈密（はみ）・高昌国（トルファン）等に於ける玄奘の事は、それぞれの地の紀行文の中に記述することにする。

河西回廊を通り玉門関の外に出ると、玄奘を取り抑えようとする命令が各所に配布されていたが、関所の役人たちの同情もあつて、無事に西域に出ることが出来た。

続いて高昌国（トルファン）の絶大な援助を受け、天山北路を廻ってインドに入り、ナーランダー寺院に入った。

当時のナーランダーは仏教世界における最大・最高の学府で、名声と権威を持ち、僧徒は常に万人だつたという。



玄奘の像（慈恩寺）

玄奘は正法蔵と尊称された長老の戒賢に師事して多くの梵書をよみ、五年間修業した以降、四年間にわたりインド国内を大旅行して、ナーランダー寺に戻った。（玄奘三十七歳）またインドのアッサムのクラーマ王や、カノージュの都で戒日王に厚遇されていた。

戒日王は其の都に五インド諸国から、十八か国の王、大小二乗の仏僧三千余人、その他学者たち二千人を集め、玄奘を論主として大乗仏教宣揚の討論会を催した。此の盛事をもつてインド滞在の締め括りとなし、帰国の途についたのであつた。

玉門関を通り沙州（敦煌）に帰着したのは貞観十八年（６４４）十一月の頃で、かつて決死の覚悟で玉門関を突破した青年僧も、もう四十三歳になつていた。そして次ぎの年の一月の始め、長安に通じる漕渠という運河を、多数の経典や仏像と共に、一隻の舟で都入りしたのである。

数千年の中国の歴史の中でも、屈指の名君と称えられた唐の太宗は、これから彼の良き理解者、大援助者となつた。飜訳するところも弘福寺一弘法院一大慈恩寺と変わり、太宗の没後も唐朝の此の高僧に対する敬重な態度は、少しも変わるところがなかつた。

五十七歳の時に西明寺に移り、翌年渭水の北の玉華寺に訳場を移した。太宗時代の離宮を仏寺としたものである。ここで大般若経の全訳に没頭し、三年十一か月を費やして二十万に達する大経典を訳し終つた。書名を大般若波羅密多経と云ひ、合成して六百巻とした。

６６４年２月５日の夜半に眠るように大往生を遂げ、天子は「朕は国宝を失つた」と泣いたと云う。享年六十三歳であつた。下は陝西省博物館にある玄奘の像。

青　竜　寺

バスは大慈恩寺を去って東方の青竜寺遺跡へと向かった。

青竜寺は僧空海が密教を極めたところで、やや小高い丘の上にある。四年前に建てられた真新しい純白な三重の記念碑が、どつしりとして天空を仰ぎ、空海記念碑と金色に刻まれてあつた。我が国・自由民主党の原健三郎氏らの肝煎りで建てたものである。

空海（７７４－８３５）、即ち弘法大師は真言宗の開祖であり、我が国の三筆の一人である。８０３年から８０６年の間、入唐して密教を伝承して帰国し、真言密教を創設。高野山に金剛峰寺を建て、東寺を賜り、庶民教育に尽力した名僧である。

記念碑の前に空海の掛軸をまつた御堂があり、先哲の輝かしい偉大な功績に頭を垂れて礼拝したのであつた。

「投老欲依僧」（老いに臨んで僧にたより、仏法に帰依すること）であるかもしれない。

御堂の横には理由はふめいだが、高知県から松の木の寄贈があつて、植樹されているのが眼についた。仏教関係の友好

のためであろうか。

此の記念碑から１００メートルほど西方に、青竜寺遺跡がある。遺跡のあるところにも新築の仏殿が建ち、「惠果空海記念堂」の掲額があり、堂内には両高僧がまつられてあつた。「惠果」は空海の師である。

旅行の記念にいつも珍しい花を押し花にして、アルバムに添付する習慣が身につき、此の遺跡でも物色して二・三の花を摘んでいたところ、管理人の中国青年が私を手招いて、それらの花の種子を進呈くれたが、これも仏縁と感謝したのであつた。

遺跡を出て帰路につくと、袈裟をかけた日本の僧侶がタクシーで参拝に来たのに出逢つた。真言宗の僧が開祖の修業地に参詣して、日中友好を深めることだろう。

中曽根首相の国連創立四十周年記念講演で読み上げた下記の俳句が、空海ゆかりの地の此処に、建立される句碑に刻まれることになつたと報道された。中国仏教会の希望によるらしく、一日も早く実現したいものである。　　左下写真は記念碑

「天の川　我がふるさとに　流れたり」

興　慶　公　園

西安城壁の東側にあつて、唐の玄宗が即位早々の７１４年、興慶房にあつた皇子時代の自分の住居を宮殿化し、数え切れない壮麗な建造物や池を造り、今日でも其の一部が復元されている。

楊貴妃と共に住んだと云われる興慶宮の跡を、公園にしたものが興慶公園だ。西安滞在が一日延期されたお陰で、此の公園を訪問できたことは幸いであつた。

公園の南門から入ると直ぐ右手に阿倍仲磨呂記念碑が、金箔も鮮やかに輝いていた。１９７９年初夏に、西安と姉妹都市である京都・奈良市によつて、建てられたものである。

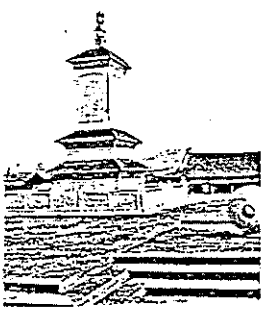
仲磨呂（７０１－７７０）は、傑出した留学生として７１７年に入唐し、「晁衡」（ちようこう）の名で唐朝に仕え、科挙の試験に合格して秘書監にまで昇進し、日中文化交流に生涯を捧げたのであつた。

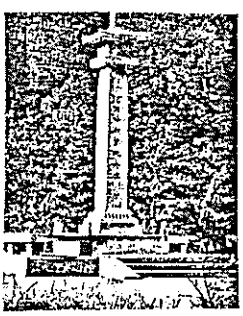
７５３年に帰国の途に就いたが難船し、安南（ベトナム）に漂着してから再び唐に戻って朝廷に仕え、御史中丞（帝室図書館長）となつたが、客死したことは有名である。墓の所在地は不明といわれている。

在唐五十四年の間に、李白・王維らとも親交が深くなり、仲磨呂の望郷の歌が百人一首選ばれて、永遠に彼を偲ぶ歌となつたのである。

「天の原、ふりさけ見れば春日なる　三笠の山に　出でし月かも」

此の歌を下記のように漢訳して、彼の地の人たちに聞かせたと云われている。





阿倍仲麻呂の記念碑

「翹首望天長　神馳奈良辺　三笠山頂上　想又皎月日」

公園の南門の道路を隔てた反対側に交通大学がある。以前に運輸省の管轄だつた関係から其の名称がついたが、現在は総合大学である。紀行文の中に取り上げた理由は、この旅に出る前日即ち十月三日の読売に「中国の地方でも反日運動・数千人の学生が参加」という見出しで、掲載されていたからだ。

中国西北都市の古都西安で二日まで三日間、延べ数千人の学生が、街の中心部（鐘楼）で交通大学生などが主体となつて、「日本商品をボイコツトしよう」「日本軍国主義の復活を許すな」などのプラカードを掲げて、反日集会を開き、国慶節休暇二日間で数千人の学生が参加したという。

通訳に対日感情を質問したところ、一般市民は無関心で、一部の学生だけだとの返答だつたが、日本の経済発展からくる嫉みを抱く若者の行動と、単純に認める訳にはいかない。此の点は項を改めて考えて見る事にする。

中食は興慶公園を一周して園の北門の所のレストランでとつた。三層の楼閣のレストランは興慶池に面し、湖畔には大公望の若者が糸を垂れ、湖上は楽しくボートを漕ぐ恋人で賑わい、楊柳の枝が美しく湖面に映える光景は、中国ならではの情緒である。

米で造つたという白い酒のサービスがあつた。日本のどぶろくに似たもので、李白は酒を飲まないと、立派な詩が詠めなかつた事にちなんで、盛んに奨めていた。園内の到る所に李の木が植えられておるのも、李白の影響かもしれない。しかし詩を詠む雰囲気には到底なれない。

渭水でとれたのか、こなごのような小魚の空揚げは珍味豊かで、白人観光客が慣れない箸を、不器用に使う食事もまた微笑しい光景であつた。

興慶宮で有名な李白の詩を掲げて此の公園の記事を終わる。

一枝濃艶露香を凝らす　　雲雨巫山枉しく断腸　　（巫――ふ　　枉――むな）

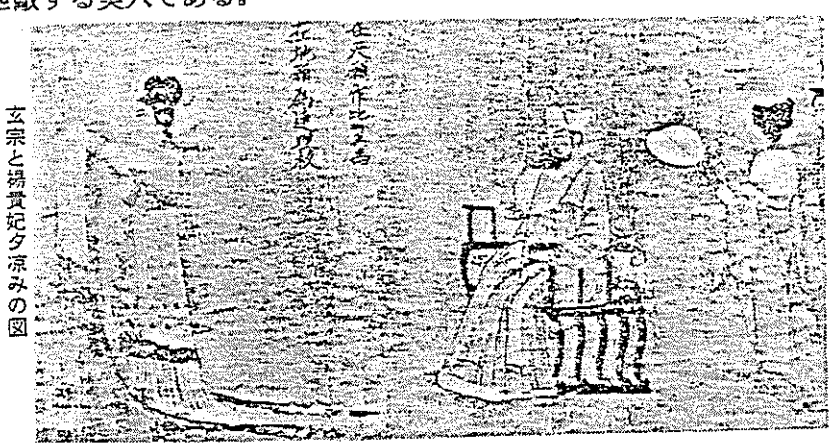
借問す漢宮誰か似るを得たる　　可憐の飛燕新粧に倚る　　（倚――よ）

楊貴妃の美しい姿は濃艶な牡丹の花が露を含んでいる風情だ。

昔楚の襄王は巫山の神女に思いこがれたが、人間でないので雲となり雨となるのを見て断腸の思いをしたという。

其れに比べると皇帝は楊貴妃を得て、此の上もなく幸せなことである。

美人ぞろいの漢の王室で最も美しかつたのは飛燕と伝えられているが、楊貴妃は飛燕にも匹敵する美人である。



玄宗と楊貴妃夕涼みの図

このように詩をたちどころに作つたと云われているが、飛燕も、彼女を寵愛した漢の成帝も終りを完うしていない。李白に含む所があつたかどうかは知らないが、此の詩が原因になつて、李白は長安を去らねばならなくなつたのである。

陝　西　省　博　物　館

西安城の南門の東寄りにあつて、かつては清代の孔子廟の建物があつた所である。文化大革命で孔子様も、そつちのけにされてしまつたようだ。中国のためにも誠に口惜しい事柄と云わねばならない。

門をくぐると右側に鐘があり、唐時代の物と云われている。それほど大きいものではないが、ニユーヨークに於て開かれた鐘の音の競争会で優勝した古色蒼然としたものだ。

反対の左側には漢時代に造られた石の馬が据えてあつた。ずんぐりしており、今日から見れば名馬の姿とはいえないが、当時の馬があれ程大きかつたのかと驚くばかりで、所謂、天馬であろうか。

博物館は「歴史文物陳列」「石刻芸術」「西安碑林」の三部門に分かれている。

歴史文物陳列のところには、周・秦・漢・隋・唐、各時代の宝があり、青銅器・貝幣・唐三彩陶磁器など、古代のものが展示してある。

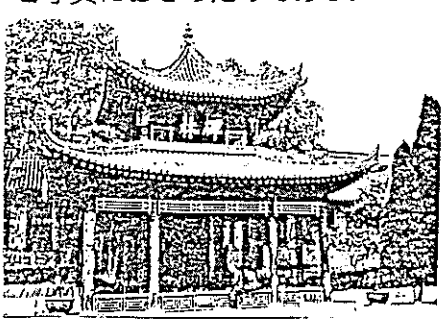
石刻芸術のところでは、漢・唐の墓石や其の他の石刻を展示し、碑林は北宗の哲宗皇帝が１０９０年に、唐の石経を保存する目的で建てたもので、中国の著名な書家の原刻碑が一千九十五基にもおよび、文字通り林立している。ここは書の芸術発展の歴史をしる上での宝庫だ

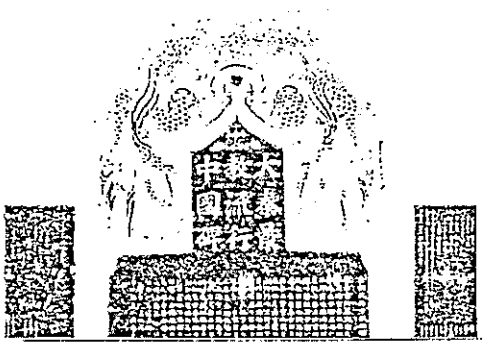
入口には玄宗皇帝直筆の大きな碑が建ち、正面玄関に「石台孝経」の大額が掲げられていた。親孝行を根本思想とする孔子様の教えから、おのように書かれているのであろう。

古代ローマからキリスト教の伝来を伝える「大秦景教流行中国碑」は世界的に有名な碑で、唐代の７８１年に大秦寺という寺に建立され、出来上がったものである。大秦とはローマのことで、景教とはキリスト教のことである。

景教は唐の初期に始めて西域から伝わり、此の碑はローマ・キリスト教が中国で流行したことを示す、重要な歴史の証拠で、中国語と古代シリア文字で伝来の経緯が書かれている。

此の奥のところに空海の書いた碑があり、日本人として此の碑だけは印象に残したいと写真におさめたのである。





碑林の見学が終つて東側の建物を覗くと、隋・唐時代の展示室があり、空海や鑑真（６８７－７６３。唐の高僧。日本律宗の開祖。唐招提寺に住）の絵、入唐する際に必要な入唐許可症（パスポート）、海図、玄奘の絵（２２頁参照）などが展示されていた。一応は博学になつたと喜んだ次第である。

清　真　寺

市の中心部にある鼓楼を通過して車は停車し、徒歩で清真寺にむかつた。道路は狭くて自動車の通行は出来ない。しかしながら古都の風情が漂い情緒まことに良しである。

清真寺という名称の寺は中国各地にあり、戦時中の経験から回教寺院であることは承知していた。学校や食堂の名前にも使われていた記憶も思い出す。清真寺は通称であつて別称を礼拝寺（モスク）といい、中国回教徒社会の中心である。外観的に中国風の建築様式が使用されている点は、他の回教徒の国と異なつている。

中国ではイスラム教のことを、なぜ「回教」とか「回回教」（ふいふいきょう）と呼ぶのであろうか。古代中国ではウイグル人のことを回鶻（かいこつ）とか回紇（かいこつ）と書き表していたからである。

ウイグル人はトルコ系の遊牧民族であつたが、八・九世紀のころからトルキスタン（中国領では新彊省の大部分で東トルキスタンという。西トルキスタンはこれに続くソ連領中央アジアのこと）のオアシスに定着し、イスラム教に改宗して回教となつたからである。

このようにして西域から渡つてきた回教と共に、胡（西の方の民族）という文字のつく胡瓜（きゆうり）胡桃（くるみ）胡麻（ごま）胡豆（そらまめ）などの名がつたわり、シルクロードの影響である。

西安の清真寺は唐代の７４２年に建立され、宋・元・明・清と引き続いて改・増築されたもので、西安市の回教徒の数は現在六万人、中国全土では二千万人と云われている。誠に驚きの至りである。

四つの門があつて西方のメツカの方に向かって建てられ、正面の門には「派衍天方」という清の西太后の書いた額が特に眼についた。

光緒二十六年（１９００）に義和団事件が起こり、同年七月二十日に八か国連合軍が天津を制圧して北京に入城し、翌二十一日早朝に西太后らは北京脱出を決意した。光緒帝を連れた西太后は大同・大原・潼関を経て、九月四日に西安に着いたが、彼女は仏教ばかりでなく回教寺院にまでも、助けを求めてすがつたのであろうか。

中国の回教の経文は、漢字でなく総てコーランのアラビヤ文字で書かれ、豚や酒は勿論禁止されているが、僧の立場になると結婚も許されず、世界の中で中国は最も厳しい戒律であると云われている。

礼拝は５時２５分、午後１時３分、４時４５分、７時、７時４５分と日に五回メッカに向かって祈りを捧げ、断食の習慣もアラブ諸国と同じである。そして金曜日の１２時の礼拝のときには、西安の此の清真寺に一千人以上の信者が集まると云うことであつた。

現在大礼拝堂は修理中で、その骨組を見ても日本の仏教各宗派の大本山に劣らない規模であり、修理その他の寺の経費は、政府が全額を負担しているとの事であつた。共産中央政府の少数民族にたいする懐柔策ではないかと推察される。仏教や儒教に対しては文化大革命で破壊し、その後も是れほどまでに力を入れていないからだ。

青春時代を過ごした前宋の都「開封」にも、回教寺院があつたと此の寺の僧に述べると、其の通りだと答え、更に日本の神戸にもあると付け加えた。神戸におる息子の官舎の直ぐ前にある寺院だと思うと、自ずから親しみが湧いてきたのである。

清真寺を去って鼓楼の写真を撮りながら「開封」を思いだしたが、憧れであつた西安の観光も悉く終了してしまつた。名残は尽きないが、これほど詳しく西安を見学したツアーも多くはないと、心の中で満足したのであつた。

街　頭　風　景

市の中央にある鐘楼に移動して、その南側の友誼商店に案内された。しかし購入するような品物もなく、旅慣れした人には其の意志すらない。通訳達は多少でも外貨を落させようと、必死になつて友誼商店に連行することは、何処の国も同じであつて、理解できることである。

広い大通りに店をひらく露天商を見て廻りながら、参考までにと、下手な中国語で調査してみることも、旅の楽しみの一つである。

パン一個１毛銭、うどん一杯２毛銭、お茶一杯１毛銭、キャンデー１本１毛銭と表示した露天は、混雑する中で繁盛していた。一毛銭は日本円にして８０銭位だが、庶民の懐工合から判断しても、高いのか安いのか判然としない。兎に角、経済は昔から細かい事は確かである。

私服の警官の巡察が来ると。一斉に素早く店をたたんで逃げ出したが、矢張り露天は許可されていないのであろう。ほこりだらけの汚い街頭で、おおい一つ掛けていない食べものは、不衛生この上なしである。先進国では当然に許可もされないが、買う人もいないだろう。それが中国庶民は平気なのだから、四十五年も前と変わらず誠に不思議だ。先進国に仲間入りするのには、先ず第一に衛生面から近代化すべきである。

街を一巡して時間を持て余していると中国青年が、日本人ですか、私は日本語の勉強をしているので、教えて欲しいと、上手でない日本語で話しかけてきた。

中国人に似ているのか、それとも親しみやすい顔をしているのか、各地で私一人が話し相手の対象になつたが、不思議な縁である。彼は西安市野菜局勤務の青年で、大学では日本語を学ばず、独学で一年ほど学習しているとの事だ。学習一年にしては上出来だと、下手な中国語で褒めたたえ、不明な点は筆談を交えて三十分ほど会話を続けた。西安の大学では一割程度の学生しか日本語を学ばず、西北地方になると日本との縁が薄いのだろうか。隋・唐以来の友好の絆を大切にしたいものである。

手を握って別れる際に彼の青年から、年をとつても中国語が上手だと褒められては、片腹痛い思いであつた。それにしても積極的に話をする青年は、民族を問わず頼母しいもので、彼の顔は何時までも忘れないだろう。西安のわかれを惜しむのに、花を添えた感じを抱いてホテルへと向つた。

西　安　事　件

唐王朝栄華の跡である華清池（５頁参照）は、楊貴妃が初めて玄宗に召されたところである。これとは反対に何の因縁か、一国の元首であつた蒋介石が捕らえられた地も華清池であつて、幽閉された捉蒋亭は余りにもお粗末であつた事は前記の通りである。

ここで、中国の抗日の歴史に一転機を与えた西安事件に就いて、少し記述しておく。この事件は端的に云って張学良の率いる東北軍（満州）が、中共の宣伝作戦に乗ぜられたというのが、普通の見解である。

事　件　の　背　景

１９３４年（昭９）１１月、中共軍は瑞金（江西省）に於て壊滅的打撃を受け、史上有名な大西遷に移る。一万四千キロを一年余をかけて逃げ延び、１９３５年末に陝西省北部に辿り着き、気息えんえんの状態であつた。これに対して国府側（蒋介石）は西安に西北剿匪（そうひ）総部を置き、張学良を副司令に任じ中共軍の殲滅をはかつた。陝西省にある国府側の軍隊は、張学良の東北軍と楊虎城の西北軍であり、両者は中共軍より兵力も装備も遥かに優勢であつた。

中共側は、それより少し前から和解工作を行うと共に、東北軍にたいし徹底した宣伝工作を行つた。東北軍とは満州事変に敗れて関内に逃げ込んだ軍隊で、望郷の念から発する抗日意識が強かつた。中共はそこに乗じたのである。

周恩来は、当時東北軍が守備していた延安で張学良と会談し、「内線停止、共同抗日」を説いた。楊虎城に対しては、ヨーロツパ帰りの共産党員王炳南を個人秘書として送り込んで工作した。

トツプに対してだけでなく、中共側は東北軍と西北軍の各級指揮官にたいし、盛んに宣伝工作を行つたが、特に東北軍の将校に重点を指向した。張学良の武将で王以哲という男がいるが、彼は黒竜江省出身で大正の初めに日本の士官学校を出て、満州事変発端の北大営を急襲された時は、そこに駐屯していた第七旅の旅長だつた。日本の満州平定後も抗日に奔走し、徹底抗日の急先鋒であつた。

蒋　介　石　の　督　戦

これらの情勢を察知した蒋介石は、１９３６年１０月２２日、南京から西安に飛び、みずから掃共戦の督戦にあたると共に、張学良と膝を交えて語つた。弱音を吐く学良

に対し、蔣介石の回顧録によれば「掃共の全権を任せた彼が降伏するという言葉を口にするとは何事であるか、一体何処でそのような言葉を学んだのか、と厳しく叱責すると、張学良は顔を赤らめて引き退つた」と書いてある。

蔣介石は其の後、汽車で洛陽に行き、さらに大原に飛んで閻錫山とも会って、掃共の督励をした。中共軍は物資徴発のため黄河を渡って山西省に入り、閻錫山軍とも戦っていたのである。

閻錫山軍と張学良軍は中共軍を挟撃するような態勢にあるのに、張学良軍は中共軍に対し殆ど休戦状態になつていることを知った蔣介石は、再び洛陽に戻り、１２月２日、張学良を洛陽に呼び付け実情を問い質した。

その時学良は、西安は明日にでも異変が起きるかも知れないほど、切迫した状況にあるので、「ぜひ西安に来て欲しい」と要請した。

蔣介石の西安半月記によると「私（蔣介石）は二度目の陝西省入りを前に、東北軍の剿匪部隊の思想が乱れ、言動にも異常な点があることを察知していた。そのうえ中共軍と結託して勝手に退却していると云う報告も受けていた。ひそかに反乱を企んでいると、知らせてくれる者さえいたのである。

東北軍が困難に心を痛め、特種な境遇にあつて悲憤のあまり、常軌を逸する言論に走る事もやむを得ないであろう。しかし、よく教えれば必ず衆心を統一し、国家の利害の所在を分からせる事ができると、私は考えた」と述べている。

蔣介石は其のような信念を持って、１２月４日、洛陽から西安に飛んだ。飛行場に着くや、数百人の将校が待ち構え、口々に「掃共戦について意見がある」と要求したが、蔣介石は意見があれば上官である張学良を通じて云えと、これを退けた。そのあと、高級幹部だけを集め、掃共はあと五分間のところに来ており、抗日作戦は時期尚早であると諭し、掃共作戦の強化を命じた。

しかし、蔣介石の説諭くらいで東北軍内の空気を一変させる事は出来ずに、１０日にはデモ隊が西安市にある西北剿匪総部や陝西省政府に押しかけ、更に蔣委員長に請願するということで、華清池に向かって行進を始めた。

このデモ隊は、一応張学良によつてなだめられ、灞橋（西安と臨潼の概ね中間）まで来て、その日は引き返した。

反　乱

蔣介石は「西安は今や赤い町になつてしまつた」と憤慨し、１２日に南京に帰ることにした。その１２日の朝５時半に反乱部隊に襲われた。反乱を直接指揮したのは、張学良の衛兵隊第二営長の孫銘九で、蔣介石の護衛兵は２０名に過ぎず、忽ち宿舎地区に踏み込まれた。蔣介石は裏山に逃れたが、山狩りに遭い捕らえられて監禁されたのである。

蔣介石監禁の報が南京に伝わると、中央では何応欽が討逆軍総司令になり、西安討伐に動きだし、先ず西安付近を爆撃して張学良に圧力を加えた。

一方、中共の本拠保安（延安西北約８０キロ）では、毛沢東の方針は「殺蔣抗日」であり、中共軍、東北軍、西北軍の三者一体となり、政府軍に当ろうというものであつた。しかし、取敢えずモスコーの指示を仰ぐことになり、電報が打たれた。スターリンは中共軍が政府軍とまともに戦える実力なしとみて、「連蔣抗日政策をとり、十日以内に蔣介石を釈放せよ」と指示した。

これより先、周恩来は大雪の中を馬で保安から西安に向かっていた。出発するときは蔣介石の身柄を保安に移す積りでいたが、その後スターリンからの電報を受け、西安に到着後は自ら主導権を握り、張学良をして蔣介石と接渉し、八項目の要求を認めさせようとした。

八項目の要求とは、１、南京政府を改組して各派の参加を許し、ともに救国の責任を負う。２、一切の内戦を停止する。３、上海で逮捕された愛国指導者を即時釈放する。４、全国のすべての政治犯を釈放する。５、民衆の愛国運動を束縛しない。６、人民の集会、結社などすべての政治の自由を保証する。７、総理（孫文）の遺嘱を確実に順守実行する。８、ただちに救国会議をひらく。

この要求は、はじめ南京に電報で届けられ、蔣介石がこれを知ったのは監禁三日目の１４日である。

張学良は大事件を引き起こしたものの、これを収拾するだけの器量はない。主導権を周恩来に握られ、連日蔣介石と接渉するが、蔣介石は、御当人の回顧録によると、無条件で南京に帰すか、然らずんば殺せと突ぱねる。

監禁１１日目にあたる１２月２２日、宋美齢が西安に来た。実はそれ以前にオーストリヤ人ドナルド（かつて張学良の顧問だつた人）と宋子文（宋美齢の実兄）が南京から来て、調停したが、政府軍の攻撃を一時延期したのに留まった。宋子文は２１日に南京に帰ったが、そのとき蔣介石は宋美齢に来るなと伝言したという。

宋美齢は西安に来て周恩来とも会い、最終的には監禁１４日目の２５日になつて、蔣介石の西安出発が実現した。

蔣介石の手記には、出発に際し張学良と楊虎城を呼び付け、懇々と諭したように書かれているので、彼等の要求は一つも受け入れなかつたにとになる。中共側は署名こそしなかつたが、四項目は受け入れたと発表している。

張学良は蔣介石と同行して南京に飛び、軍事裁判にかけられ、終身監禁された。

新　事　態

西安事件によつて国府軍の掃共は打ちきられ、中共軍を国府軍に編入する交渉が行はれたが、所詮は水と油で、翌１９３７年日本との全面戦争に入るや、それぞれ別個に抗日戦を行うことになつた。

西安事件で一番得をしたのは中共である。張学良と楊虎城が蔣介石の意図通りに、全力を尽くして掃共を行つておれば、中共軍は止めを刺されていたであろう。陝西省北部の田舎町保安を根拠としていたが、延安は張学良の部隊が守備しているために、中共軍は物資が欠乏し、延安の北を迂回して黄河を渡り、山西省へ侵入して徴発しなければならなかつた。

蔣介石は最後の５分間と呼号していたが、もう一押すれば行く先は寧夏か甘粛省の奥地に間違いなかつたであろう。東北軍の兵士が満州出身で望郷の念に駆られていたというが、中共軍の兵士の多くは江西省出身で、異郷にある苦痛は同じである。

張学良は反乱を起こしたものの、蔣介石を殺す気はなかつた。しかし、血気にはやる部下が殺す可能性は十分にあつた。また、中共側も初めは殺蔣を称えたが、スターリンの指示で変更した。蔣介石が殺されていたならば、中共はその後もつと苦しい立場に追い込まれたであろう。

そんな事を考えると、西安事件は中共にとつては、実に幸運な事件であつた。

それに引きかえ事件首謀者の張学良は道化役であつた。親譲りの東北軍に対する統率力を失つた彼は、蔣介石が南京に帰るにあたつて同行を求めた。「お前が行つてしまつたら東北軍の統率者を失う。それに今中央に行くのは、お前のためにも良くない」と蔣介石に云われたが、無理に同行した。

そして、南京で監禁され、重慶、台湾と監禁されたまま転々とし、１９７５年蔣介石が死んだとき、葬儀に先立ちおまえりしたという。その後のことは不明である。

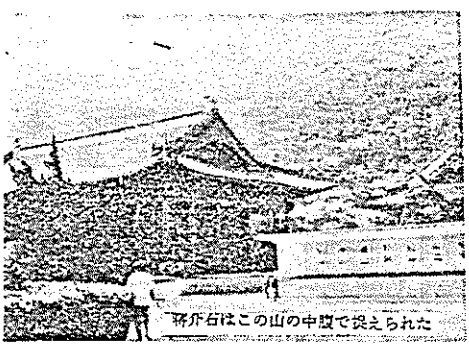
反乱の直接指揮に当たった孫銘九らは、張学良が去った後、翌年二月にクーデターを起こし、張学良に代わるべき死指導者王以哲らを殺害したので、東北軍は瓦解してしまつた。

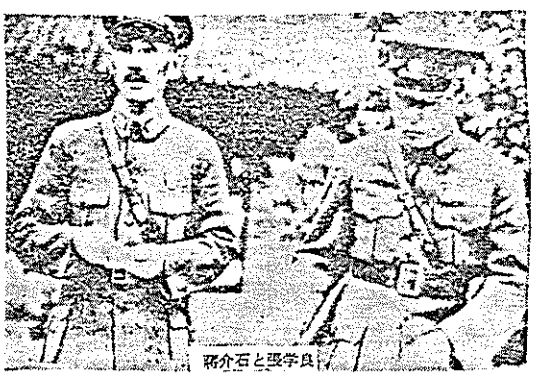
張学良と並ぶ首謀者の楊虎城は、翌翌年国府側に逮捕され、１９４９年重慶で生き埋めにされたという。

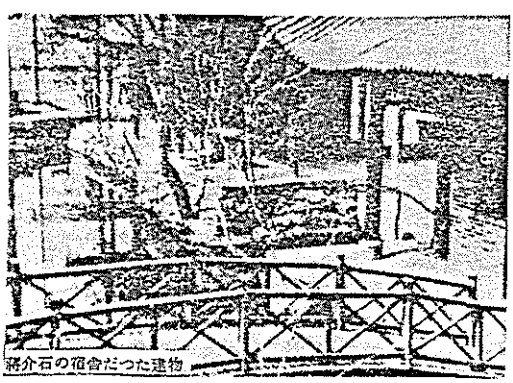
歴史の流れ

日中戦争に突入してからは、国府軍と日本軍、中共軍と日本軍、国府軍と中共軍が、三つ巴の戦闘を繰り広げたのである。我々もそれに参加した一員だが、日本軍の占領地を、中共軍と戦う国府軍に、無条件で通過を許した珍現象もあつたのである。しかし、これらの抗争は４０数年前の事であり、西安に代表される秦・隋・唐のような歴史とは、日を同うして語ることは出来ない。やがては三国志のように、或いは項羽と劉邦の葛藤のように、西安事件も後世の人達から語られるかも知れない。

下の写真は華清池の捉蔣亭に掲げられているしゃしんである


蔣介石はこの山の中腹で捉えられた


蔣介石と張学良


蔣介石の宿舎だつた建物

周恩来

西　安　離　別

日中戦争時の西安は兵牙を被つたことはなく、ただ戦略爆撃が行われた位の記憶しかない。しかし、中学時代の漢文や東洋史で学び、唐詩で名高い中国筆頭の古都を、磁石が引き合わされたように願望が実のり、三日間にわたつて見学できた事は望外のことであつた。

西方はこれから旅をする甘粛省から新疆省へと通じ、東は函谷関から若い血潮を発散した河南省に続いている。南は秦嶺山脈が横たわり、その先は漢水を越えて四川省（蜀の国）だ。漢文で習った、伯夷叔斉が周の粟を食わずと、薇をとつて餓死した首陽山は此の山の中にある。諸葛孔明の五丈原も此の山の続きだ。三国志の時代の此の辺りは魏の勢力圏で、野戦軍の本営は西安にあつて、仲達は五丈原に出ていた。死せる孔明生ける仲達を走らす、で有名である。前記した玄宗は楊貴妃を馬嵬で殺して成都に落ち延びた時も、此の険しい山道を通ったのだ。

数々の歴史が彷彿として脳裏に浮ぶ西安と離別するにあたり、唐の詩人「王維」の詩が最も離別に相応しく、これから飛耳長目する西の彼方を思いつつ、口ずさんだのである。

元二の安西に使ひするを送る　　（元二は人の名）

渭城の朝雨軽塵をうるおし　　客舎青々柳色新たなり

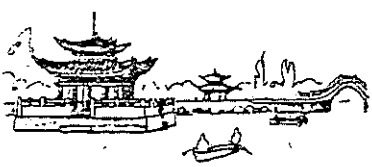
君に勧む更に尽せ一杯の酒　　西のかた陽関を出でなば故人無からん

「元二が安西都護府へ使者として旅立つのを送つて」

渭城の朝の雨は街道の土ぼこりをしつとりと落とし、この旅館のあたりの柳は、ああおあおと鮮やかな色をとりもどした。さあ君よ、もう一杯ぐつと乾したまえ、西に進んで陽関を出てしまうと、もう杯をかわす友はいないのだから。

この詩は「陽関の曲」または「渭城の曲」と呼ばれ、別離の曲として広く歌われていたものである。安西都護府は西域経営の拠点として、唐初に交河城（トルファン）に置かれ、次ぎに亀慈（きじ・現在のクッチヤ）に移された。天山南路の要衝である。長安から西域に旅立つ人を送る時には、渭城（咸陽の東）で送別の宴を催す事が多かつたという。陽関（後日訪れた地）は敦煌の西の関所で、ここを出ると、もはや文化の果てる異境の地であつた。

王維の詩を味わい、唐の長安を想像しつつ、我々も亦、西安をあとにしたのである。



十月八日　　晴

西安から蘭州へ

旅行日程の変更により西安滞在が三日となつた影響から、西安出発は未だ暗黒の早朝七時、ウルムチ行きのプロペラ機ＣＡ３２１１便に搭乗することになつた。

昨夜は親交の深い友人十数人に第一報をしたためた為に就寝が遅れ、四時のモーニングコールは辛い思いだつたが、これからがシルクロードの本番だと、胸を踊らせたのである。

西安での通訳をしてくれた黎愛寧さんは、私と文通を続けている北京総社の劉桂香さんと、無二の親友ということで親しみを増し、離別の挨拶がわりに菓子を贈つて、５歳になる坊やの御土産とした。

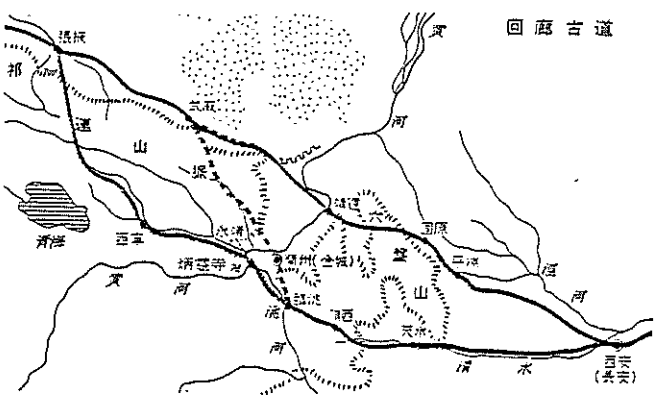
混雑する西安空港の待合所で捜し当てた空席に座ると、３５才前後の中国人が話しかけてきた。余程中国式の顔付だろうか。大陸的な性格であることは確かだが、無言の人気があるのは不思議でならない。

彼の第一声は英語が話せるかであつた。旅行する日本人は有知識の者だという先入観があるのか、年老いた我々でも英語が堪能だと判断したのであろう。そして又自分の英語が通用するか試したかつたのかも知れない。少々話せると英語で応答して、今度は逆襲だ。年をとった日本人でも中国語を話せるのだと云わんばかりに、中国語で話しかけた。彼は技術指導のために蘭州に出張らしく、笑顔で会話を続けていると、付近の中国人も二人の会話に仲間入りをして集まって来た。

日本から持参した「アマチャズル飴」を一個づつ彼らに配り、これが秦の始皇帝が探し求めた不老長寿の薬だと、大法螺をふいて一同を笑わせた。

出発時間のアナウンスで握手を交わして搭乗となつたが、機内でも手を上げて合図を送ってくれた事は、楽しい旅の思いでの一つである。

西安一蘭州間の距離は５４０キロ、約一時間半の飛行である。黎明が過ぎて眼下に展開する黄土層地帯には、肥沃な農耕地が山並みの間に広がつている。有史以来、周・秦・漢・唐と前後十一代の王朝が、栄枯盛衰の歴史を繰り広げた舞台だ。人類が紀元前数百年の前から、豊かな物資と文化を求めて西への道を切り開いた、シルクロードの沿道である。



天馬を求めた張騫が駒を進め、仏教の教典の探求に玄奘が旅し絹を積んだ駱駝の隊商が行き交つたシルクロードは、磁石も羅針盤もなかつた其の当時、西安を出発して河西回廊から西域へと、どういつた道筋を辿つたのであろうか。

其の道の権威者たちの言によると、渭水の支流の涇河をたどつて武威に至る北の道か、渭水に

沿って炳霊寺附近を通って武威に入った南の道であろうという。何れにしても基準は河に沿って行った事になるようだ。

飛行機は八時半に蘭州に着陸した。空港待合室には劉家峡ダムの超大な油絵が掲げられ、豊富な電力を誇示している。空港周辺は砂漠ではないが、山や平野部には樹木は全く見当らず、殺風景な不毛の地だ。秋の収穫が終わり緑が消えたのかも知れないが、日本の青々とした山なみを見ると、どれほど驚く事だろう。此の瞬間から砂と灰色の世界に約十日間、閉じ込められる事になつたのである。

次ぎに驚いた事は、西安から一時間半の飛行時間で、これ程までに温度差のある気候に急変したことだ。寒暖計は１０度を割り、シャクナゲの繁茂していることから判断しても、寒いことは当然のことである。早速持参してきたセーターを着用してバスに乗り込んだ。

蘭　州

空港から蘭州市の中心部までは七十五キロ、バスで約一時間半の距離である。此の間の地形も前記のように荒涼とした禿山の風景が続き、通訳の説明では年間総雨量が３００ミリというから、甚だしい乾燥地帯だ。樹木の生えないことも当然である。

甘粛省の省都である蘭州は、山あいを流れる黄河に沿った細長い町だ。全長４５キロにも及ぶというから、日本では考えられない町で、矢張大陸である。河西回廊の東になり、黄河を渡れば回廊に入ることになる。人口２００万は西北地方における第二の大都市で、寧夏回教自治区、青海、新疆、チベットに通じる陸運、空輸の要衝でもある。

漢代では金城と呼ばれたが隋・唐時代に蘭州と改称し、シルクロードは此の地を通り宿場として発展していた。玄奘も蘭州で一泊し、唐の太宗の王女・文成公主は、ここから発つてチベット王に輿入れしており、歴史的な町の一つである。近代では開放前の蘭州は、立ち遅れた消費都市に過ぎなかつたが、現在は科学・文化・教育・衛生事業などに、目覚ましい発展を遂げているという。

黄河の上流の眺めは、中流地域の河南省を流れる水の色と同じく濁流だ。広大な黄土層地帯を流れるからである。バスは濁流逆巻く黄河に沿って蘭州市に向かった。大化学工場や煉瓦工場の煙突が林立しているのが見えている。一本の高い煙突から真っ赤な炎が煌煌と燃え、蘭州化学コンビナートが正面一杯に展開した。ソ連の援助を受けて拡張したもので、石油化学、合成繊維、化学機械などの十七工場があり、九十種類の製品を生産し、従業員も二万五千人に及ぶという。此の関係から一般家庭もプロパンガスを使用し、西北地区としては珍しい発展ぶりだ。今後も益々隆盛に向かうだろう。

黄河には九個の橋梁があり、白塔山に向かう橋が最古のものと云われている。黄河にかかる最長の橋は、我が部隊の古戦場であつた河南省・鄭州北方にある鉄橋だ。それにも増して、常に混濁の洪水に悩まされ、我々の守備した中牟城での黄河との戦いが、蘭州の黄河を眺めて、独り無量に懐かしく思いだしたのである。白塔山のある黄河西岸地区は回族が主として住み、モスクも沢山存在するとの説明を受けたが、残念ながら其の光景は望遠することは出来なかつた。

蘭州を通過して炳霊寺へと西進を続けた。前１３９年に長安を出発した張騫の一行は、隴西即ち現在の蘭州の辺りから西に向い、匈奴の勢力圏に入ったことが脳裏に浮かんできた。霍去病（かくきょへい）もまた北方作戦から西方の匈奴討伐に転戦して、一万騎を率いて隴西から西へと出撃し、祁連山まで長駆して匈奴に壊滅的打撃を与えた、前１２１年の戦史が脳細胞を掠めて行つた。

深く味わつてみたかつた歴史の町・蘭州は、旅程の変更によつて二泊が一泊となり、炳霊寺（へいれいじ）の見学だけに留まつてしまつた事は、返す返す口惜しいことだ。

「蘭州の黄河を詠じた詩」

河水（黄河）洋洋として　　北に流れて活活（かつかつ）たり
罔（こ・網の意）を施すこと濊濊たり　　鱣鮪（てんい）発発（はつはつ）たり
濊・・・（かつかつ）水の深いこと。　　鱣・・・ふかに似た大魚。
鮪・・・しび（まぐろの巨大なもの）

中国最古の詩集「詩経」に歌われている黄河流域は、中国文化の発祥の地であり、旧石器時代や新石器時代の出土品の多くは、此の流域に集まつている。その中心が蘭州である。

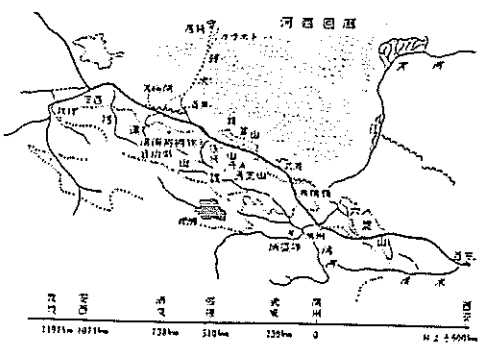
「黄河の水は勢いよく北に向つて流れ、網を投げると水深は深く、大魚が元気よく跳ねている」という此の詩で想い出すことは、黄河に爆薬を投げて大漁に満腹した中牟城の若者の姿であつた

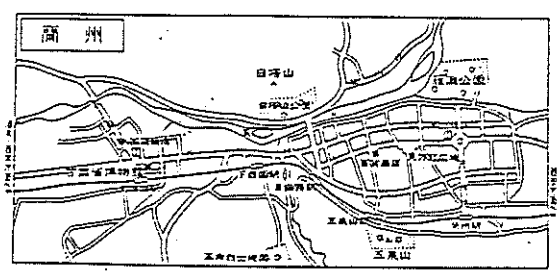
炳　霊　寺

蘭州から概ね１００キロ、山間道の悪路を走るバスの激しい震動に耐えながら、三時間という長時間をかけて、劉家峡ダムへと進んだ。

黄河と別れてからは殆ど山道である。水無し川で苦力たちがツルハシで砂利を堀り出し、一つかみずつ手でトラックに積み込む姿は、実に哀れというか気の毒だ。市街地を離れると辺境に一変し、少数民族の悲劇が眼に映って来た。気温十度以下の為に道路両側に植えたポプラは早や紅葉して、黄土の山の色と調和している。

途中の河口という所から道路が分かれている。右に進むと橋を渡って河西回廊に行き、左にゆくと劉家峡ダムだ。黄河は数本の支流を合流し、上流はそれぞれ祁連山脈や、青海省を通ってチベットに遡っている。黄河も此の当たりの上流となると濁流も薄くなり、次第に青河に変化して行くようだ。





劉家峡ダムに着いてみると、我々のツアーだけを待っていた連絡船は堰堤に繋留されていて、乗船するや否や炳霊寺に向かって出航した。
ダムの堰堤の高さは１４７メートル、長さ２１３メートルの巨大なもので、地下に五基の発電機が稼働しており、蘭州はもとより遠くは西安にまでも送電している。洪水・流氷防止・灌漑・水産養殖等の多目的ダムであり、中国第二のダムである。

連絡船は二十人乗り程度の小さな船で速度も非常に遅く、炳霊寺までの約５０キロを、これまた三時間程の航行時間だと聞かされて、うんざりだ。持参してきた弁当も亦、程度が悪く、河西回廊の前途が思い遣られた。

乗船当初はダムを囲む禿山の景観を物珍しそうに眺め、写真を撮るなどして元気だつたツァーの人達も、時間を持て余して、やり場がない状態に移っていつた。もう少し船足の速い船を運航しないと、観光資源活用上からも問題だ。

湖面は増水期と渇水期とでは水位の差が２０メートルもあり、春から夏にかけては、炳霊寺までの運航は不可能で、前回のツァーも訪れることが出来ず、其の点は幸運であつた。長時間の振動の疲れと退屈からの不平も、我慢しなければならないようであつた。

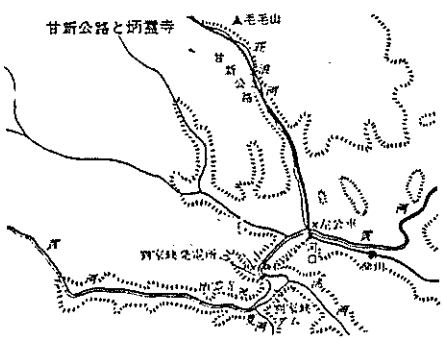
ダムになつている黄河本流の水は益々青河の湖水となり、永い静寂の時間が過ぎて、湖の奥まつたところに小屋らしい建物が見えた。漸く炳霊寺に到着したのである。

我々が先ず眼にしたものは、船上から見える微笑を浮かべた巨大な座仏像であつた。岩肌を削つて浮き彫りにした高さ２７メートルの石仏は、奈良の大仏よりも大きく、絢爛たる東西文化の交流の花が開いた初唐の作である。

大仏は上半身が石彫で、下半身は泥塑で造られているが、千数百年の歳月を経た姿は、風化による破損が著しい。そして此の炳霊寺の石窟群は、大仏様の両側の断崖に造られている。

西秦（３８５－４３２）、北魏（３９７－４３９）の五胡十六国時代（黄河流域から西北地区にかけて、匈奴などの五つの民族が小国を建てては興亡を繰り返した、混乱と分裂の時代）から、唐代（６２４－９０７）にかけての仏教芸術を知る上で、重要な意味をもつ炳霊寺石窟が１９５１年、黄河上流北岸の渓谷で発見された。まだ陽の目をみてから日が浅いのである。其の後の調査では、第一六九窟から銘を伴う中国石窟最古の造像が発見され、さらに名僧「法顕」の供養像の壁画も発見されたという。

炳霊とはチベット語で千仏という意味である。炳霊寺造営の活発になつた時期は、北魏が洛陽に遷都してからと考えられているが、最も盛んだつたのは唐代である。



唐代までは竜興寺、宋代は霊巌寺といつたが、チベット族が侵入してからは密教となり、その名称も炳霊寺となつたのである。

シルクロード沿いに位置した炳霊寺は、西秦から清代（１６１６－１９１２）に至る一五〇〇年の間に、各代の石窟が作られた。しかし、遠い僻地の為か案内するガイドもおらず、それに加えて最も有名な第一六九窟は、修理中のことで参観が許されず、何のために六時間もかけて遠隔地に来たのか、心外の至りであつた。

拝見できた唯一の大仏を下から仰ぐと大岩石が覆いかぶさり、その上に大洞窟がある。其の洞窟の左の方が一六九窟で、右側が一七二窟だと、前もつて注入してきた知識を思い浮かべながら、天を見上げて立ち去った。

一六九窟は四世紀から五世紀にかけて、此の地に国を建てた西秦時代の造営で、一七二窟は北魏時代の造営と云われ、共に最古のものとして有名である。

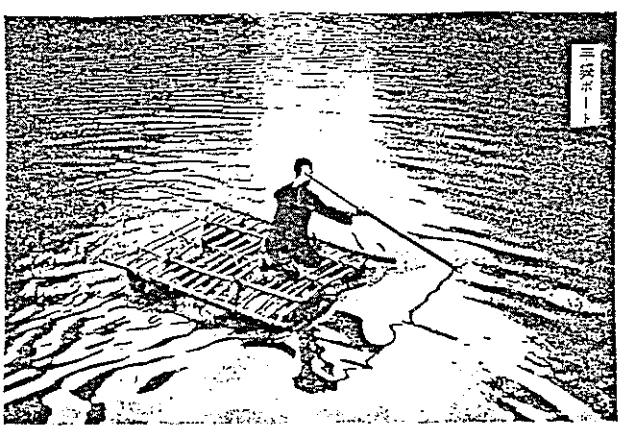
第二次大戦後に発見された炳霊寺は単なる遺跡ではなく、発見当時にはラマ僧（チベット仏教）が一人住んでいたと云われており、現在も此の石窟の仏像は信仰の対象である。何処に村落があるのか不明だが、十数名の子供が緑色の石を売りに来た事を思うと、部落があり信仰を続けているようだ。

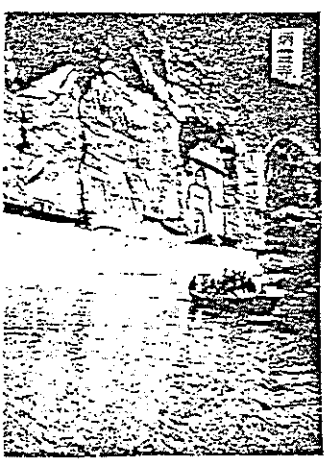
劉家峡ダム建設のために炳霊寺が水没する事になつたが、故周恩来首相は国家的事業として護岸し、湖水に沈むのを防いだという古いニュースを想起して、約三十分の参観で炳霊寺と別れたのであつた。

連絡船の出航間際に、「羊袋」の筏が舳先の方から後方に向けて漕いで来た。実にタイミングよく現われ、磁石が引き付けるようにシャツターを押した。中国語では「羊皮筏子」（やんぴーふぁず）と呼び、ＮＨＫの放映で拝見したが、炳霊寺で本物を直接見られたことは、仏様の御利益だつたのかも知れない。

羊袋のボートは、細い丸太で２メートルぐらいの枠が組まれ、その下に頭と四本の足を切り落とし、毛を剥いで中身をくり抜き、皮だけを乾燥させた羊の袋が、六個ほど縛り付けられたものだ。

この羊の袋は、首と足のところを紐で縛り、尻から空気を吹き込むと、浮き袋のようになる。乗り手は此の筏にまたがり、櫓を漕いで渡るという原始的な生活の知恵である。河西回廊から西域にかけてのシルクロードでは、古代から多くの人や絹を運んだことだろう。





帰路の船中で聞いた添乗員の説明によると、インドの寺院には石窟寺院と平坦寺院とがあり、天山北路を通って伝わったものが石窟寺院、天山南路を通って伝わったものが平坦寺院であり、日本の寺院は南路に属しているとの事であつた。一つ新知識を得たのである。

河西回廊の英雄「霍去病」（かくきよへい）

蘭州市の南方に標高１６００メートルの五泉山公園がある。五泉山の名称は漢の武帝に才能を認められた青年将軍「霍去病」が、匈奴討伐の際に渇に苦しむ人馬の為に、五ヵ所に剣を突き刺したところ、泉が湧きだしたと云う故事に由来するものである。

前記したように蘭州の滞在は一泊に短縮され、五泉山公園や白塔山の見学がご破算になつた。しかし、回廊に名を轟かした霍去病の功績を称え、簡単に彼の業績を記述する事にした。

シルクロードの開拓者として初めて歴史に登場する人物と云えば、やはり張騫（ちょうけん）である。漢の武帝の使者として二回にわたつて西域に赴き、自ら見聞した大宛・月氏・大夏・康居・烏孫など（１３頁地図参照）、当時中央アジアに栄えた諸国の事情を初めて漢にもたらすと共に、漢と西域との交易の道を開いたからである。（西安の張騫の項参照）

しかしながら、回廊に残るものは張騫ではなく、霍去病の物語りや伝説ばかりである。霍去病は漢の武帝の妻の衛皇后の姉の子として生まれ、天子に寵愛されて僅か十八歳で侯中となり、伯父の衛青将軍に従つて度々出陣し、匈奴討伐に大きな武功をたてたのである。

紀元前１２１年、二十歳を過ぎたばかりの霍去病は大軍を率い、二度にわたって河西回廊に打って出た。先ず広大な牧草地のある焉支山（甘粛省山丹県）に、次ぎに祁連山を越えて匈奴を追い、合わせて四万以上の匈奴を捕らえた。

霍去病に率いられた軍は選び抜かれた精鋭で組織され、大将軍の衛青の大軍の先陣を務めたり、或る時は別動隊として、果敢に敵中深く進撃して戦つた。霍去病自身もまた、常に軍の先頭になつて進み、天佑にも助けられて、窮地に陥つた事は一度もなかつたという。

この年の秋、漢王朝にとって国を上げて狂喜させる事件が起きた。匈奴の王の単于は、西部地方を統括していた渾邪（こんや）王らが、屢々霍去病の軍に敗北するのを怒り、渾邪王らを召しよせて殺そうとしたので、渾邪王は漢に降伏を申し込んできたのである。そこで武帝は此の交渉の大任を、常勝の霍去病に命じたのである。

霍去病は大軍を率いて河西に赴き、渾邪王の衆兵と対峙した。匈奴軍の中には降伏を望まないが、しかし漢軍を見ると、どしどし逃げ出すものがいた。そこで霍去病は相手の陣中に馳せ入り、渾邪王と交渉を進める一方、これに従わない者八千人を其の場で斬り捨てた。そして王を馬車に乗せ、武帝のもとに送り届けた。続いて投降してきた匈奴の兵を引き連れて、長安に凱旋したが、その数は十万にのぼつたという。

それ以来、東は金城（蘭州）から西は塩沢（敦煌西方の新疆省の地）にかけて、匈奴の姿は絶えてしまつた。漢の武帝は黄河の西に初めて河西四郡という直割郡を置くことになつた。それが武威―涼州、張掖―甘州、酒泉―粛州、敦煌―沙州である。

前記した五泉山の湧水のような伝説は各所に残り、民間の信仰の対象としても深く崇められている。病を取り去るという彼の名が道教と結びついたのであろうか。五泉山には明代に寺院が建てられている。此のようにして彼の名は回廊の英雄として伝承され、回廊の歴史は霍去病によつて開かれたのである。

霍去病については歴史的な物語りが沢山伝えられている中で、私も旧軍人の一人として彼を敬服することの一つは、「戦いとは理屈でない」と云った言葉である。

悲惨な死闘を体験した者にしか、味わうことが理解出来ない言葉かも知れないが、理屈で戦いが出来れば、これほど簡単なことはないはずだ。

漢の武帝が彼に、孫子や呉子の兵法を学んではどうかとすすめると、彼は「戦いの方略いかんを良く考えればよいのであつて、わざわざ昔の兵法を学ぶことはないと存じます」と答えたという。この言葉には異論はあるが、彼の自信のほどが窺われ、天才的な軍事才能が備わっていたのだろう。彼は戦争体験から戦法を生かした将軍であり、其の教訓は学ぶべき事である。

十月九日　　晴

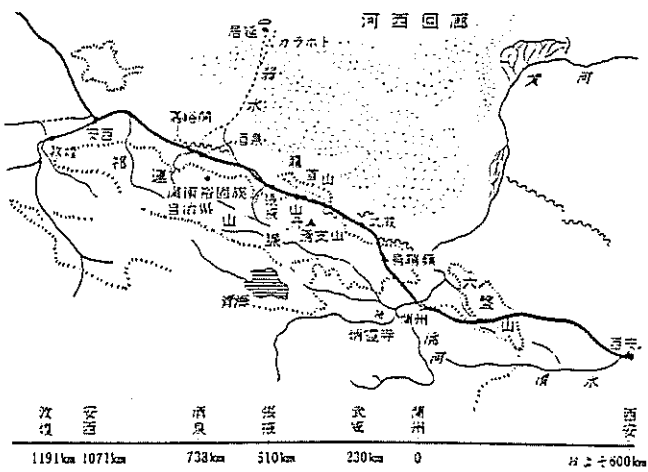
蘭州から酒泉へ

約三十分程度の炳霊寺詣でのために、車に船を乗り継いだ往復十二時間の強行軍は骨身にこたえ、金城賓館での一泊だけでは休息は不十分であつた。

食の文化は中国に在り、とまで云われているが、円卓の大皿へ銘々手を伸ばして食事する楽しみも、毎日同じような物ばかりで美味しいものもなく、体力は消耗するばかりである。

前夜の夜行寝台列車で酒泉へ行く予定が、本早朝七時発の飛行機に変更されたことは、せめてもの思い遣りというか、中国側の同情心の発露だろうと思われる。

滞空時間は二時間半。瞰下する景観は、総て広大なゴビの砂漠が視界一杯に婉蜒と続き、灰色一色の世界が展開している。所謂、ゴビ灘（たん）である。よく観察すると鮮やかな風紋が描かれ、種々の形を成している波紋は我々の眼を楽しませてくれた。



全くの不毛の砂漠の中に、一条の直線が走っていた。甘新鉄道線路である。羊の群れも見る事ができないゴビタンに、白い池が見えてきた。多分万年雪を頂く祁連山からの水を利用して、採集する砂漠の中の塩田であろう。

飛行機は此の辺から高度を下げ始め、無事に嘉峪関空港に着陸した。広漠としたゴビタンの中に、お粗末なターミナルが一棟、ぽつんと建つているだけで、戦時中の前進基地の飛行場のようなものだ。

最果ての地に降り立つた感じが自然に湧いて来た。

瓦礫の海と形容したい砂漠の空港から酒泉の町まで、バスで３０分の行程だつたが、その間の地形は砂利原ばかりで荒涼としている。国策で植えられた道路両側のポプラ並木は、地が痩せていて太りが悪く、哀れなほど小さいものばかりであつた。

太陽に輝く祁連の白雪と対照的に、数本の煙突から黒煙を吹き上げている製鉄工場が砂漠の中に見えた。酒泉附近には鉄鉱石が採出されると説明を受けたが、ゴビタンは天然資源が豊富なようで、公害問題で悩む日本では羨ましい事である。天は遍く平等に恵を与えているのであろう。

我々が今走っている道が、嘗てのシルクロードであつたのだろうか。出版されている画報や歴史書を思い浮かべながら、バスに揺られて直線道を南進して行つた。シルクロードは時代によつて若干違っていたが、人馬の集まる所は街であり、酒泉の町はゴビの向うの遠い所であつたのである。

酒　泉　の　概　要

酒泉市は人口二十五万の小さな町で、中心街も五万という田舎町に過ぎないが、敦煌を訪れるためには、必ず酒泉を通過しなければならない。しかし、流石に此処まで足を延ばすと、観光客は急激に少なくなり、日本人のツァーは我々だけであつた。

河西回廊に入ると漢民族は少なくなり、酒泉も回教徒が主体で、チベット族、蒙古族、裕回族などの少数民族の町である。標高は海抜１４００－１８００メートルというから非常に寒く、今朝の気温は七度であつた。少々風邪気味らしく、これからの旅に備えて早速薬を飲む。年間降雨量は蘭州よりも更に少なく１００ミリ、雨が降らないのと同然の乾燥地帯だ。年平均温度は６・９度であるとの概要の説明があつたが、このような自然環境からすると、大きな発展は期待出来ないのではなかろうか。

バスは酒泉のシンボルマークである鐘楼を通過して、十時半に酒泉賓館に到着した。案内された部屋は広々としているものの、床には穴が開いていて荒屋のようだ。観光客は限られた期間しか宿泊せず、致し方もなく不満はさらさらないが、いよいよ西の果ての町に来たという実感を肌に感じた。

中食は午後一時と告げられ、時間を有効にとホテルをでて中心街の鐘楼に向かった。友達に依頼された哈密（はみ）瓜の種子を捜すために、暫く自由市場を散策してみたが、普通の瓜の種子しかない。時期的にないのか、それとも地理的に駄目なのか、農民の中国語は私の語学力では通用しない。

朝の遅い太陽が次第に上昇するにつれて、温度の上昇も急激のようだ。此の分んでは日中の温度は二十度位になるのではないか。砂漠を照らす陽の光の為に温度が上がる反面、夜になると大陸的気候の特徴で零下になる事もうなずけたのである。

漢の張騫が二回にわたって河西回廊を通り、西域を踏破して其の事情を明らかにし、更に武帝は匈奴作戦を展開して匈奴勢力を追放した後、直轄地として河西四郡をおいた其の一つが酒泉であり、粛州と呼んだのである。五胡十六国時代に入った時の酒泉は西涼の都

となり、古代の酒泉は大いに発展していたのである。ベニスのマルコ・ポーロ（１２５４－１３２３）は十三世紀に酒泉を通り、粛州については「住民は偶像教徒とキリスト教徒からなり云々」と書いたことから、仏教徒とキリスト教徒が多かったのである。しかし、現在は回教徒の町となつて歴史の変化を物語つている。勿論、古い酒泉の町は何処にあったか不明だが、すっかり地下に埋っていると云われている。

また世界史上で屈指の英雄と称される元の太祖の「チンギスカン」（１１６２－１２２７）は、１２１９年から西征に出陣して１２２５年に帰還し、その年の１０月に再び西夏に遠征して、これを滅亡させた後、１２２７年７月に甘粛省の清水県で死亡した。此の清水県は酒泉の直ぐ東である。

渺渺とした砂漠の中のオワシスの町「酒泉」は、今もなお古代からの歴史を受け継いでるのであつた。

夜　光　杯　工　場

二時半から酒泉観光に出発し、鼓楼を右折して直ぐのところにある夜光杯工場の見学となつた。

「唐詩選」の中の王翰作「涼州詞」にうたわれた有名な夜光杯は（後記）、西域から献上された白玉で作られた酒杯で、月光に照らすと透明に見えた事から付けられたものである。今日の酒泉の名産として宣伝している夜光杯は、清朝末期に祁連山で発見された玉で作り始めたものだ。だから酒を入れて月光に当てても、透明にならない黒緑色のものが多い。

汚い二階建の工場は町工場に過ぎず、女性を主体として五十名位が働いていた。電気ドリルのようなもので削る人、研磨機で加工した石を磨く人、ペーパーで更に磨く人など、至って簡単な機械で作っていた。原石や製品を見ても、数年前に訪れた雲南省の玉とは比較にならない。しかし砂漠の中では珍しい貴重品であろう。

祁連山での採石はダイナマイトで崩し、遊牧民のような生活をしながら、五月から十月にかけての夏季に行われ、山中はヤクの背に、麓は馬の背に乗せて運びだされて来るという。

工場の上は展示場兼販売所となつていた。製品は脚の付いた杯や、ぐい飲みの杯、或いは装飾品など、淡い半透明の光沢のある品である。値段は雲南に比較して高いようだつたが、記念のために適当な品を選んで数点買い求めた。何れにしても宣伝の効果が人の心を引き付けているようだ。

昔の酒泉は二つの地区に分かれ、一つは中国人の住む地域、他の一つは回教徒の住む地域であり、回教徒は西からやってきた商人たちであつた。西域の商人が酒泉に運んできたものに、夜行杯と葡萄があつた。玉杯においしい葡萄酒を注ぎ、月の光に当てると透明になつたという事から夜行杯と名付けたのである。

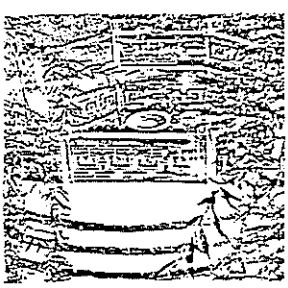
「涼州詞」　葡萄の美酒　　夜行の杯
　　飲まんと欲すれば　　琵琶馬上に催す
　　酔ひて沙場に臥す君　　笑うこと莫（な）かれ
　　古来　　征戦　　幾人か回（かえ）る

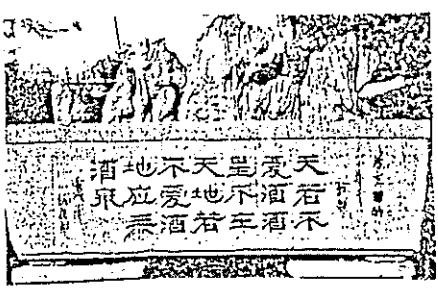
ぶどうの美酒をなみなみとたたえた夜光の杯、飲もうとすると「さあ早く酔いなさい」とうながすような馬上の琵琶の音が聞こえてくる。
酔って私がこの荒涼の沙漠に倒れこんでも、君よ、笑いたもうな。
この沙の広野の戦場で、昔から幾人が生きて帰つたことか。
明日の命も知れない出征兵士の悲しみを、異国情緒につつんで歌つた此の詩は、人々に愛唱されていた事だろうと思う。

酒 泉 公 園

夜光杯工場の見学が終わって、バスは直ぐ東側にある酒泉公園へと我々を案内した。園内には此の町の名称の起源となつた酒の泉がある。
匈奴征伐に功績のあつた霍去病が、漢の武帝から有功の臣に、分け与えるようにと贈られた一瓶の酒を泉に注ぎ、「功は全将兵のもの、酒は少なく人は多い」といつて、共に泉の水を飲んだという故事に由来する説がある。一方では、六世紀初めにできた「水経注」巻二に、酒泉とは「その水が酒の味のようであるから」、「泉の味が酒のようだから」と書かれている事から、名付けられたと云う説もある。いずれの説が真実かは知らないが、酒泉の水が砂漠の中で格段に良いことを示している。
公園入口には朱塗りの立派な門があり、その奥に葡萄棚のトンネルが設けられている。それを潜ると霍去病が兵士たちと共に飲んだと伝えられる井戸がある。直径四メートルぐらいで、柵で囲った井戸の水の深さは約二メートル、透明な水は底まで見えていた（写真）。其の泉の正面に「西漢酒泉勝跡」という碑が建っている。
井戸の後ろに大きな池があつて橋がかかり、或は楼閣が建ち、中国各地の都市に見られる公園の景色であつても、砂漠地帯の此処の住民にとつては、別天地のような感じがするのではなかろうか。公園の一角に、
「天若不愛酒酒星不在天、地若不愛酒地位無酒泉」と書いた碑がある。（写真）
天　若し酒を愛せずんば酒星　天に在らず、地　若し酒を愛せずんば地位　酒泉無し、とは酒泉らしい文句である。
酒星とは、星の名前であり、酒にちなんで酒星としたのである。
地位とは、位置の意味で、ここでは地上のことである。
唐の杜甫の飲中八仙歌の中の一節に、酒泉のことを次ぎのように歌っている。

汝陽（じよう）は三斗にして　始めて天に朝す
道に麴車（きくしゃ）に逢いて　口に涎（よだれ）を流し
酒泉に移封せられざるを恨む





玄宗皇帝の兄の子である汝陽は、三斗の酒を飲んで始めて朝廷に出仕する。
道中で「こうじ」を積んだ車にあっては「よだれ」を流し、
酒泉郡に領地替えにならなかつたのを残念に思つていた。
酒泉に領地替えにならないことを嘆くほど、酒泉には酒が湧き出る泉があると、都に伝えられていたのである。（中国では県の上に郡がある。郡は一つの国であつた。）

酒泉博物館－鐘楼

酒泉公園に隣接した酒泉博物館を訪れたが、小さな建物の中に、酒泉県に関係した新石器時代から各時代の出土品が展示されていた。

専門家でないから詳細は理解できなかつたが、東晋十六国壁画の模型や、壁画の模写が展示してあり、神話の世界が描かれてあつた。そのほかに有名と思われるものは、北魏の石塔で三層からなり、各層に仏伝が描かれているものである。また唐時代のチベット文写本も数点陳列されていたが、我々の貧弱な知識ではついて行けない状態であつた。

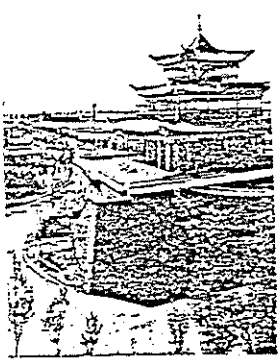
五胡十六国時代の南涼（武威）、北涼（張掖）、西涼（酒泉）、沙州（敦煌）については、日本の出版物には詳細な記事が少なく、此の点にに関しては興味を持って見学ができ、収穫の一つであろう。

博物館から再びバスに乗り鐘楼の所で下車。概略の説明を聞いて解散となつた。ホテルの酒泉賓館までは徒歩で三分ぐらいの距離に過ぎない。それほど酒泉の町は小さいのである。

酒泉の鐘楼はＮＨＫで報道されて記憶に新しいが、現物を見る感じは別である。紀元前二世紀、漢の武帝によつて設置された酒泉時代に、この鐘楼が存在したかは不明のようだが、四世紀の五胡十六国時代には建立されていたと云われ、今の姿に改築されたのは明時代である。しかし、現在は修理中で登楼できなかつた事は悔やまれる。

市の中央の十字路に建つ三層の鐘楼は、古くから高層建築物の少ない酒泉のシンボルである（写真）。土台は高い煉瓦造りで、東西南北の四つの門があり、人馬の往来も可能である。四方の門の上に下記の石額があり、酒泉の地理的重要性を示し、シルクロードの宿場の道しるべとして有名である。

東迎華嶽　　東に華岳（長安の山の名）を迎え
西達伊吾　　西は伊吾（現在の哈密）に達す
南望祁連　　南に祁連（酒泉の南の山）を望み
北通沙漠　　北は沙漠（ゴビの砂漠）に通ず
（中国では細かい砂のことを「沙」と書く）



小さな酒泉の町の観光は二時間で終了し、つれづれのままに市営の百貨点をのぞき、孫たちに刺繍のハンカチを求めた。今では此の辺境の地でさえも、背広の首吊りが並べられ、子供や女性の衣服がカラフルになつて、四、五年前からみると長足の進歩である。

鐘楼を中心にした商店の続く界隈を、回教徒の帽子をかぶった人達が往来し、清真食堂と表示した回教徒の食堂も散見され、

五胡十六国興亡表

国名	姓	祖	種族	都	滅した国	興亡年
前趙	劉	淵	匈奴	平陽	後趙	三〇四—三二八
成漢	李	雄	氐	成都	東晋	三〇四—三四七
後趙	石	勒	羯	襄国	前燕	三二八—三五一
前燕	慕容	皝	鮮卑	龍城	前秦	三三七—三五〇
前涼	張	茂	漢人	姑臧	前秦	三二四—三七六
前秦	苻	健	氐	長安	西秦	三五一—三九四
後燕	慕容	垂	鮮卑	中山	北燕	三八四—四〇七
後秦	姚	長	羌	長安	東晋	三八四—四一七
西秦	乞伏国仁		鮮卑	金城	夏	三八五—四三一
後涼	呂	光	氐	姑臧	後秦	三八六—四〇三
南涼	禿髮烏孤		鮮卑	樂都	西秦	三九七—四一八
北涼	沮渠蒙逊		匈奴	張掖	北魏	四〇一—四三九
南燕	慕容	德	鮮卑	広固	東晋	四〇〇—四一〇
西涼	李	暠	漢人	酒泉	北涼	四〇〇—四一一
夏	赫連勃勃		匈奴	統万	北魏	四〇七—四三一
北燕	馮	跋	漢人	昌黎	北魏	四〇八—四三六

自行車修理の看板を掲げた自転車屋さんは大繁盛であつた。それだけ自転車が多い証拠である。

再び自由市場に入つて行くと瓜が氾濫しており、時期的に珍しいものだつたが、買う気にはなれない。しかし、誰かが購入して夕食時にサービスを受けたが、実に味がよく日本では食べられない珍味がした。早速、種子を貰つて部屋で乾かしたところ、鼠に食べられた事も、酒泉の話題の一つである。

嘉　峪　関

鹿島立してから一週間を経過して、回廊の気候風土にも馴れたが、中国の時差が全国一律の為に時差呆けを感じてきた。午前九時に嘉峪関見学へと、昨日空港から来た道を逆戻りだ。

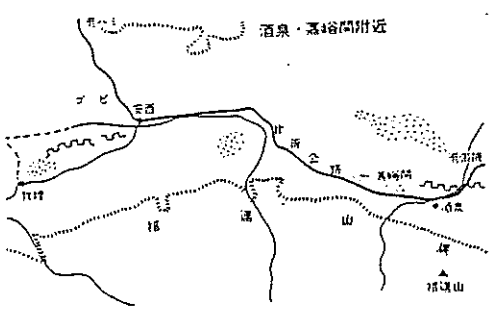
遥か南に雪を頂く祁連山を眺め、砂利のゴビタンを一直線に走る甘新公路を、大きく揺れながら西北に向かった。約三十分のバス旅行である。

祁連山脈から流れる水はゴビタンの地下にもぐるために、河床は石の原となって水はなく、広々とした砂漠の中に一本の用水だけが滔滔と水を運んでいた。多分工業用水ではないだろうか。祁連山脈は鉄鉱石のほかに石炭も産出し、前記した製鉄工場も荒涼の中に建っていた。そこを通過すると一望千里のゴビの彼方に、嘉峪関の望楼と城郭が雄姿を現してきた。遠望する城は日本の城郭のようで楼閣は天守閣に似ている。

嘉峪関の城門の前で下車し、約１００メートルの砂利道を行くと城の入口に管理所があり、城の歴史が書かれた看板が建っていた。

この地は、天下第一の雄関と呼ばれる万里の長城の西端を固める関所で、長城最東端にある山海関の天下第一関と対している。楼は三層、内城と外城の二重の城壁を巡らした厳重な構えだ。西域からの旅人たちは、ここから駱駝を馬に乗り換えたと云われている。

長城は漢代には、ここから西にある安西・敦煌（地図）まで伸び、玉門関・陽関の砦があつたが、西夏王国や元朝の支配を経た後、明代には嘉峪関までしか支配権が及ばず、最西端の関所となつていた。その後トルファンの勢力が強まり、明末の１５２４年に嘉峪関を閉鎖して西域との交通を断ち、異民族の侵入を防いだという。そして河西回廊が再開されたのは１７１５年、清代に入つてからである。



明代の１３７２年に建った嘉峪関は、当時常勝将軍と呼ばれた馮勝将軍が此の地を定めて設計し、一個大隊、およそ二、三百人の兵士が常駐していた。城壁の高さは２０メート

ルを超え、外城の周囲は千メートル、内城の周囲は六百メートル、内城の城壁に沿って城の上に登れる坂道が造られてある。乗馬のまま登れるように階段になっていない。良く考えて造られているのには驚いた。当時の建築技術の粋を集めた十三もある楼閣は、さぞかし敵を威嚇した事だろう。

沙漠に孤立する城壁上に立つと、当時の指揮官の心境を察することができた。若い時代に河南省・中牟城守備隊長として、一個師団の衆敵を迎えて戦った心境に、相い通ずるものがある。

孫子の兵法に「死地にはすなはち戦う」と書かれている。死地とは力を出し切って戦わなければ、殺されてしまう処である。死ぬことはあっても、敗走することが出来ない場所だ。吾が経験した中牟城にせよ、この嘉峪関にせよ、死地であつた。大敵を向うに廻して極限状態になると、死にもの狂いになつて、思わぬ大きな力をだすのであつた。死と同居した時代は、死は考えなくとも必ずやつてくると、悟つていたように思えてならない。

城壁に続く万里の長城は、ゴビの彼方に微かに見える祁連山に向ひ延びている。それに直交して鉄道線路が東西に走り、二本の線だけが不毛の平坦地に存在価値を示していた。

嘉峪関の長城は、山海関や八達嶺の長城ように、焼いた煉瓦ずくりの長城ではなく、土塀の長城である。高さ２メートル、幅１メートルぐらいだ。漢時代の長城は「版築」という方法で造られた。これは両側に板を並べ、其の間に黄土を入るれて水分を加え、突き固めたものである。それが明代になると、黄土を固めて日干煉瓦をつくり、これを積み重ねて土塀を造ったが、嘉峪関の長城は後者の方である。

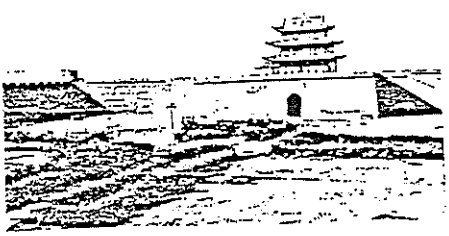
現物を眺めて見ると、簡単な警戒設備に過ぎないが、当時としては馬も羊の群れも阻止され、匈奴の騎馬隊にとつては大障害物となり、国家の安全が維持できたのであろう。

風の強く当たる城壁を一巡してくると、添乗員から次ぎのような説明があつた。当時の兵士たちが城門を出る時には、必ず石を足の裏に打ちつけたと云う風習があり、雀の鳴き声のような木霊（こだま）が、周囲の城壁から伝わってくると、無事に城に帰れるといつて、縁起をかずいたという。戦場心理というものは何時の時代でも同じだ。誰か一人がそうであつた事を、唯一の頼みとして受け継いで行くものである。

嘉峪関訪問の記念として管理所の売店で、五点セットの夜光杯を求めて帰路についたが、西の果てという実感を味わつたのである。

従	秦時名月漢時関	秦時の名月	漢時の関
軍	万里長征人未還	万里長征	人未だ還らず
行	但使竜城飛将在	但だ　竜城の飛将をして在（あ）らしめば	
	不教胡馬度陰山	胡馬をして陰山を度（わた）らしめず	

これは唐の王昌齢の詩である。



月は古の秦漢の月と変わらず、長城の関門もまた、秦漢の時代そのままである。名月のもと、関門を出て万里の彼方に従軍した兵士は、まだ帰ってこない。（匈奴のふところ深く）竜城の地まで攻め込んだ、漢の飛将軍がもし生きていれば、胡

の軍団に陰山を越えて来襲させることなど、なかったものを。
嘉峪関は我々に戦場を想起させるばかりか、天地に万古があっても、この身は再び得られずの感を、一層深くさせたのであつた。

少数民族部落と万元戸

本日の午後は少数民族部落の見学であった。酒泉の中心街からバスで約三十分の所に、俗（ゆいっく）族部落があり、約千人に過ぎない少数民族という事である。（正式な住所は甘粛省酒泉県泉湖郷）
この部落附近まで走ると石の砂漠は姿を消し、広々とした農耕地が続く田園であつた。清らかな水は流れ、樹木も生い茂るオワシスである。部落の中の農家は煉瓦の土塀で周りを囲い、家の構造も中国内地と変わるところはない。
部落の東端にある万元戸といわれる「巴維菜」（ぱーすーれん）さんの家を訪れると、家族全員が温かい笑顔で出迎えてくれた。これが真の友好親善の姿である。このような企画を念願していた私にとっては、久し振りに心から快哉を叫びたい心境であつた。
中国式の例によつてタバコの進上に始まり、田舎では珍しく菓子までも用意し、二十名の我々を相手にサービスする湯茶の接待は、家族総動員であつた。
部屋の中にはテレビ・冷蔵庫・電気洗濯機・ミシン・カセットなど、中国で神器と名の付くものは総て備えてあるばかりか、真新しいベッドから寝具、その他の各種調度品は、中国の一級品ばかりである。よく農村を廻った私でさえも初めての拝見だ。
早速私から質問した。それは万元戸のことである。近年中国を旅行すると必ず通訳たちは、中国の農業政策の成功例として、鳴物入りで万元戸を宣伝していた。（年収一万元、日本円にして八十万円、以上の農家を万元戸と云う）しかし、万元戸は農業収入ではなく、他の事業の成功による収入が主体であることを、知っていたから質問したのである。中国政府は恰も農業政策の成功だとして吹聴しているが、純農業収入ではない。日本人むけの人民中国（日本語で書いてある）という本にも、農村企業を盛んに宣伝している。農村企業とは、農民が経営する企業で、都市に集中する商工業とは異なり、その基盤は農民が集中する村ということである。
当家の主人は三十五歳で年間収入は十五万元（一千二百万円）だと答えた。農業収入が万元になることは到底考えられず、何の事業をしているかと質問を続けた。彼は１９７８年からバス（日野ヂーゼル）二台を購入して、酒泉一敦煌の間を運航し（往復運賃１１、１０元）、其の収入が１５万元だと返答した。続いて耕地面積と農業収入を尋ねると、四ヘクタール（四町歩）で二千元（十六万円）だという。
経費は、家族がバスの切符の販売をしているから、従業員として運転手二人の給料と、燃料及びバスの諸経費だけである。税金は七万元（五百六十万円）だと詳しく教えてくれたが、大変な事業家だ。
中国全土の農家の収入をみると、年収は二百元（一万六千円）以下の貧農が２０パーセントもあり、普通の農家が年収六百元（四万八千円）前後に過ぎず、工場労働者も一千元（八万円）程度と考えると、若い巴さんは億万長者だ。
中国政府は旧地主階級の復活を或程度認めたから、彼の家も旧地主階級だつたのか

も知れないが、其の事は失礼に当たり質問することを中止した。

引き続いて只今の希望を聞くと、日本製の乗用車（約四万元・三百二十万円）が欲しいと述べていた。この僻地のお百姓さんが大変な意気込みで、金の力が顔一杯に現われていた。

日本を訪れるように進言すると、彼は蘭州（甘粛省の省都）を一度訪れただけで、専ら仕事に励んでおり、出来れば中国各地を見物する方が先決だと申していた。全く其の通りで、九歳を頭に二人の子供の教育を夢見ている、親の責任の方が大切である。

日中戦争当時には彼は未だ生まれておらず、此の辺境の地は戦禍にも遭遇したこともない性か、非常に友好的で、年間二百人の日本人観光客が彼の家を訪問するということである。日本人からの手紙や写真を見せて、請求されるように彼と肩を組んで写真を撮った。帰国次第、写真と共に御礼状を差し出さなければならない。

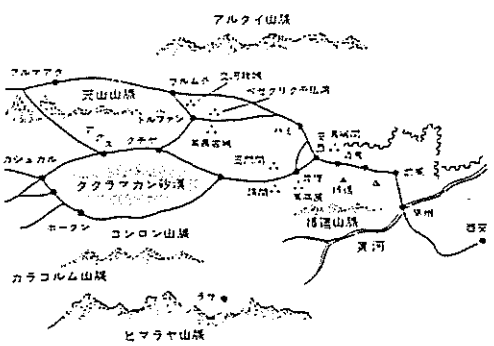
中国人民日報によると、万元戸は宣伝ほど多くなく、上部機関の「おぼえ」を意識した農業政策担当の幹部が、農業収入を水増ししたり、実質的に収入とはいえないものを所得に入れた為で、幽霊万元戸が相当数にのぼり、中国流の官僚主義が元凶だと報道している。八億の農民中、万元戸は千人程度の極めて特殊の農家であるという。最近では「金がすべてではない」という面を強調し、万元戸をもてはやす風潮は下火になつたことを付記する。しかしながら、巴さんは歴とした万元戸であつて、彼の英姿を掲げて敬意を表したい。

少数民族部落の見学を終わり今日も鐘楼で解散となつた。時間つぶしに再び百貨店を訪れ、瓢箪に附ける房を購入したが、二個で五角（四十円）とは驚くべき安値であり、趣味の瓢箪ずくりの意欲を、更に駆り立てたのであつた。

街頭で売っている西瓜の種子に就いて尋ねたところ、それは食べる西瓜の種子ではなく、種子を食べる為につくる西瓜の種子であつた。青春時代に良く食べた西瓜の種子は、普通の西瓜の種子とは違っていたのである。

小さな酒泉の町では散策する場所も少なく、足の向くままに青空市場を覗くと、汚い小さな魚や、痩せこけた鶏を並べている農民、日本では見向きもしない衣類を広げた商人、どれもこれも終戦直後の日本の姿の再現のようであつた。

観光資源の少ない酒泉の片田舎に二日間も滞在して、愚痴をこぼした一行の人たちも、さぞかし十分な休養がとれたことだろう。愈々明日は敦煌である。



十月十一日　　早朝雨　　のち曇り　　十時より快晴

酒泉ー敦煌

酒泉賓館を八時半に出発して、敦煌まで４５０キロの行程を移動することになった。敦煌までの間は飛行機は勿論のこと鉄道もなく、乾きに乾いた内陸の砂漠を、バスで走るより輸送手段がない。其れ程不便極まる回廊の西端である。

嘉峪関を通過すると、馬の立て髪の形をした馬鬃（しゅう）山と祁連山脈との間に拡がるゴビタンを、猛スピードで突っ走った。簡易舗装の凸凹道を時速７０キロは出していただろうか、本を読むことも、字を書くことも出来ないバスの振動では、うつらうつら呆然としているより仕方がない。

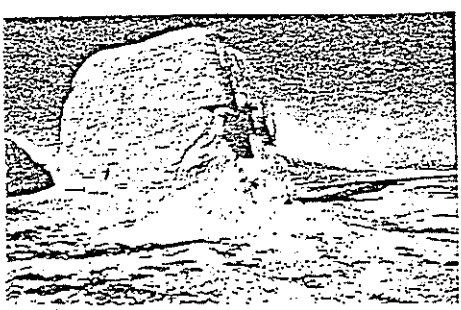
一口にゴビといっても、その種類には、いろいろとあるようだ。小石を敷きつめた平坦なゴビ、凸凹とした黄土のゴビ、瓦礫のゴビ、沙と礫の中間のゴビ、そして白い石のゴビ、黒い石のゴビ、沙ばかりの沙ゴビ等、幾種類もの名称が付けられている。我々一行の走行している甘新公路は白ゴビに類し、極く短い草が砂利の隙間に少々生えているだけで、満州の荒野の比ではなく殺伐としている。対行する自動車も十分間に二、三台と少なく、一条の鉄道線路を走つた貨物列車が唯一の相手だつた。

漢民族と匈奴が激突を繰り返した僻地に、蜿蜒と砂礫の海の中に造られた、現代版のソルクロードを驀進すること５０キロ、此の頃より空は晴れ上がり、祁連山麓にある科学工場の黒煙は、晴天に向かって吹き上げていた。

珍しく此の公路には街路樹が植えられていない。不毛の地質は植樹も受け付けないのだろう。ただ道路と平行して架設された電燈・電話線だけが、死の砂漠の文化施設だ。それも至って簡素なもので、戦場の架線の域を出ないものである。其れに加えて修理する人たちは自動車があるわけもなく、てくてく歩いて修理する光景は慢慢的だ。

中国人通訳嬢三人にピーナツをサービスすると、非常に喜び更に欲しいと要望して来た。彼女等も随分と変わったものだ。四、五年前は絶対に観光客から物品を受けとってはならないと、強く指示されていて、我々の好意を無にしたものだつた。この点も自由化されたのであろうか。日本では別名を南京豆だと言うと、真否のほどは知らないが、南京附近は大産地だと教えてくれた。

１００キロほど進行した所の砂漠の中に、ぽつんと小さな駅舎が建っていた。附近一帯には部落らしい影は見当らない。列車を利用する人たちは１０キロ以上も歩かねばならないと考えると、気の毒な思いが湧いてきた。車窓からの眺めは何の変哲もない為に、一寸した変化でも想像を逞うするのであつた。



低い丘の上に建っている狼煙台の下でバスは停車した。画報で見た写真と変わらない。煉瓦造りの高さ１０メートル、幅４、５メートルほどの正方形の塔である。

狼の糞を燃やした煙りは真っ直に立ち上るから、狼煙と言われたと説明されたが、雨や風の日はどうなるのだろうか。夜間は煙りでなく炎でなければ見えず、信号にならない筈だ。

古代の中国の伝説に反発する積りはないが、燃やす物がないから狼の糞のような小さな物までも、燃料として混ぜたのではなかろうか。

漢代の狼煙台は、長城に「五里一小燉、十里一大燉」といわれる方形の燉台が設けられていた。燉（とん）とは平地にある小高い丘という意味で、敵の来襲の兆候を発見すると、直ちに狼煙を上げた所であつた。

五百年後の唐の時代に入ると、長城の役割は一変した。全盛期の唐代では、毎日夕方になると砦の烽火台に火がたかれ、それが西の彼方から栄華を誇る長安まで、一晩中燃え連なったといわれている。恐らく国威の誇示であろう。

玉門鎮に近ずくと砂漠の中に耕地が現われ、羊の群れが草をはみ、驢馬は野菜を運び、こんもりと樹木が茂っている。即ちオワシスである。祁連の氷河から流れる水が、此の低い地に湧出してシルクロードの宿場となり、森羅万象の生命を助け、死の世界が生き返ったようになるのである。

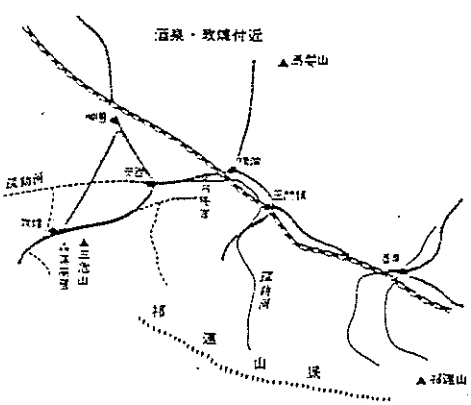
敦煌西方の唐代の関所であつた玉門関（唐の玄奘が出国のときは敦煌の北方である）の住民が、此の地に移住した関係から、玉門鎮と命名したという。バスは留まらずに前進を続けて、再び砂漠の世界に戻ってしまつた。

単調な直線道路の各所に「精神集心」と、ドライバーの居眠り運転防止の立看板が建っていた。ローリングをしている車は一寸したことで横転し、強烈な太陽光線は眠気を催し、事故の多い街道かもしれない。

次ぎは橋湾城で停車した。砂漠の海の中に橋湾城と書いた石碑が建ち、遥か遠くに城跡らしいものが見えていたが、双眼鏡でもないと瞭然としない。公路から１０００メートル以上も入ったところに、誰も住んだ事もない幻の城があるのだ。

清の乾隆帝は或るとき夢に名城を見たという。其の夢をもとに、部下に建てさせたのが此の橋湾城である。しかし、命令を受けた大臣は決められた大きさを誤魔化し、私腹を肥やしていたことが発覚して処刑されてしまつた。それで城壁だけが造られて放置されたのだという。それに彼の皮膚を剥いで太鼓をつくらせ、城楼に吊るして朝晩打つたということだ。

前記した砂漠の分類の外に、岩石砂漠、石ころ砂漠、砂砂漠というふうにも分類されるが、此の辺の街道は石ころ砂漠に類している。橋湾城を過ぎて「布隆吉」附近に来ると、起伏が一段と激しさを増してきた。世界最大の強風地帯と言われている所で、公路際に看板が立っている。延々と２０キロにわたり、強風が造った巨大な土の塊が無数に散らばっている。風の最も強い時期は春ということである。石ころまでが吹き飛ばされるばかりか、人間はおろか、車でさえも前に進めないらしい。日本の春に来襲する黄砂現象の一つの原因かも知れないが、西の果ての荒辺を詩にした李白の「白髪三千丈」式に表現したのかも分からない。



街道筋に一軒の風車小屋が建てられており、風車発電をしていた事を思えば、世界最大の強風地帯であることは確かなようである。

布隆吉と安西との中間に「踏ダム」というダ

ムがあり、その水面が太陽の光を反射して、鏡のように輝いていた。灌漑用か、それとも塩湖か知らないが、日本のような山の多い国のダム構造ではなく、平坦地に湖水を造ったダムである。勿論貯水という意味がダムであるから、それでよい訳である。果てしのない石ころ砂漠を緑化するとしたら、幾十年否幾百年の歳月を費やすことだろうかと湖水を眺め、イスラエルの砂漠の緑化運動を思い浮かべていたのであつた。

安西市に接近して行くと、今まで続いていた白い石ころ砂漠が、突然、黒い石ころ砂漠に急変した。地質の関係から此のように変化したのだが、珍しい現象を直接眺める事が出来たのである。

安西は古の瓜州（かしゅう）で人口は約七万、布隆吉と同じく世界一風の強い場所であり、開放前の市街地は砂に埋まってしまったという。

玄奘は此の地を通過している。玄奘が不退転の決意で６２９年に長安を出発し、瓜州の安西までくると、その北方２０キロの所にコロ河が流れ、唯一の渡し場に当時の玉門関があつた。国法では此の関門の外に出ることを禁止していた。

安西の地に一ヵ月ほど出国の機会を窺っているうちに、涼州（現在の武威）の都督の命令書が瓜州の役所にとどき、僧玄奘が西国に行こうとしているから、取り押さえよという内容であつた。しかし、この命令書を受け取った役人は玄奘に同情し、本人の面前で其の命令書を破り、早く出発せよと奨めたという。そして瓜州で知りあった胡人（匈奴）の案内で、玉門関よりも更に上流から、深夜を利用して関所破りをしたのである。

酒泉から３２０キロの安西まで来れば、敦煌は余すところ１２０キロに過ぎず、もう一息である。天山北路と天山南路は安西で分岐され、重要な宿場として栄えたオワシスの町だ。一日の行程は大体３０キロだから、その間隔で宿場が設けられていたようで、天地創造の神はうまく造られたものだ

安西では初めて、砂漠の舟といわれる駱駝の列を拝見できた。往時の隊商の再現であつた。一番優秀なラクダを先頭に歩かせ、先頭が歩けば、どんな険しいところでも従いて来るといわれるが、動物の習性は皆同じである。

車は甘新公路を左折して安敦公路を南に進んだ。東方には祁連山脈の流れである小高い禿山が横たわり、其の続きに敦煌がある。これらの景色を眺望する安西招待所で昼食をとったが、食堂は我々一行だけで、がらんとしていた。旅行者はホテルが建設されるまでは、このような招待所という簡易宿泊所に宿泊したのである。安西招待所で記憶に残るものは、建物から遠く離れた便所だ。仕切りもない原始的なもので実に不衛生であり、ご婦人方は大変のようであつた。

約一時間の大休止を終わって敦煌へ向かった。途中の道路上では瓜を売る農夫が手を上げ、掛け声を掛けて合図する光景が見られた。安西は瓜州と呼ばれる名前のように、古来からおいしい瓜の産地として有名だが、バスはスピードを上げて通り過ぎてしまつた。

河西回廊の征服を狙う民族の戦いの場となつたゴビタンを突っ走り、敦煌まで八時間の予定が六時間で到着した。余程運ちゃんはスピードをだしたものだ。日本のように「鼠取り」が網を張らないから気楽なものである。

敦煌に到着したと伝えられたが、敦煌は何処だと尋ねたいほど、砂の中の小さな部落だ。余りにも宣伝が大きく過ぎて、期待に反した想像外のオワシスであつた。

砂漠の強い太陽の光に負けたような、灰色の山並みが眼前に展開していた。あれが祁連支脈の三危山であろうかと地図をひろげて確認し、愈々明日は莫高窟の見学だと、胸に伝わる鼓動が高まる中を、敦煌入りをしたのであつた。

敦 煌 の 概 要

酒泉の町は人口二十五万（中心街は五万）の小さい町だと思ったが、敦煌は何と人口九万（中心街は一万二千）である。敦煌県の面積は九州に匹敵するというから、沙の海の世界に僅かの人が住んでいるに過ぎない。

シルクロードのハイライトとして世界に名を轟かせる此の街は、河西回廊の西端に位置し、敦は大、煌は盛んという意味である。

紀元前１１１年に漢の武帝が匈奴を打ち破り、河西四郡の一つとして敦煌郡を置き、中央から漢人を移住させて、西域支配の拠点としたのに歴史が始まっている。

沙州と称した敦煌の沙州故城跡は、現在の街の西方３キロの所だが、残念ながら見学する機会がなく、往時の町も沙の下に埋まっている。

古代のシルクロードは大要すると三つのルートがあつた。一つは天山山脈をはさんだ天山北路と天山南路（西域北路）である。他の一つはタクラマカン砂漠の南を通る西域南路で、いずれも敦煌を経由してシルクロードの要衝となつていた。西域とは敦煌から西の地域を指している。（４７頁地図参照）

シルクロードを通って後漢（２７－２２０）時代に仏教が中国本土に伝わり、東晋（３１７－４２０）時代に莫高窟が開かれた。

当時の敦煌は東西貿易のキャラバンが行き交う宿場として栄え、黄河中流（中原）の戦乱（五胡十六国・南北朝）を免れた別天地であった。

唐代６４４年、僧玄奘がインドからの帰途に此の地に立ち寄り、以後八世紀半ばにかけて往来が盛んになり、黄金時代を迎えた。

唐朝衰退後は吐蕃（とばん・チベット族）の支配下に入り、８４８年、張議潮が吐蕃を追いだして河西全域を支配した。しかし、まもなくウイグルに滅ぼされてしまった。十世紀後半、中原（河南省）に宋が立ち、オルドス一帯（現内蒙古）は西夏の支配下に入り、敦煌は貿易の中継地として繁栄を続けた。

西夏（１０３８－１２２７）は元（１２６０－１３７０）に滅ぼされ、続いて明代を迎えたが、明（１３６８－１６４４）の支配は嘉峪関までで、敦煌は強大なトルファンの侵入にまかされた。敦煌が再び漢族の手に戻ったのは清（１６１６－１９１２）代に入ってからであり、現在の敦煌の町は清代に築かれたものである。

重複するが、敦煌に関係のある歴史的人物を、簡単に復習してみたい。回廊は民族興亡の道だと言われ、漢の武帝以降、漢民族によつて開かれたといつても、其の時の権力が点と線を支配したに過ぎない。此のことは日中戦争時の日本軍の占領地域内と同じである。

張騫

張騫が漢の武帝の命を受け、月氏と軍事同盟のために使者として前１３９年に長安を出発したが、匈奴に捕らえられること十年に及んだ。目標にしていた月氏（後日敦煌は小月氏となる）の首都が敦煌であつた。

張騫が脱出に成功した時には、月氏は現在のソ連領となつているサマルカンド地方に移動していた。（１３頁地図参照）結果的には軍事同盟工作は失敗におわり、帰路の時には、敦煌は匈奴の支配下だつたために通過していない。しかし、張騫は自らの大旅行によつて世界が存在する事を教え、黄河中流の文明国が西とドッキングしたのである。

霍去病

紀元前１２９年から武帝による匈奴遠征が始まり、前１２１年の霍去病の遠征によつて匈奴の渾邪王が投降した。この勝利は漢始まって以来の大勝利となり、現在の甘粛省ばかりでなく、更に西の新疆省からも匈奴の勢力を駆逐して、漢の支配下になつたが、敦煌がどのような戦場になつたかは明らかでない。（３８頁参照）

前記のとおり前１１１年に敦煌は漢の直轄領となり、本格的に東西の交易が盛んになつて行く。しかし、それ以前から交易は行われていたのではなかろうか。企業秘密に属したと思われる西域事情を、交易する人達は公表しないことは当然であるからだ。

班超

前漢が滅亡して西域は再び匈奴の天下となり、後漢の第二皇帝は紀元７３年に、西域平定のため遠征軍を派遣した。その軍を統率したのが名将軍と云われた班超であり、彼の軍も敦煌から西域に長征したのである。詳細は西域中心だから省略する。

法顕

玄奘よりも先の事、年齢六十歳を越えた法顕は３９９年に長安を発ち、インドへ求法の旅に出た。蘭州辺りから今の青海省の省都である西寧を通つて張掖（甘州）に到り、翌年、敦煌に足跡を残している。此処から沙河を越えて楼蘭に、さらにコータンへと旅を続けたが、敦煌には一ヵ月滞在したと云われている。

玄奘三蔵（２０頁参照）

唐の時代に移り、世界文化史を飾る巨星と云うべき玄奘三蔵は、貞観三年（６２９）八月、長安を出発し、国法を冒して大砂漠を突破して渡天の旅に出たが、前記した通り往路は安西から出国したから、多分敦煌にも立ち寄つたと思うが、詳細は不明だ。帰路は玉門関を通り、沙州の敦煌に帰着したのは貞観十八年（６４４）十一月頃で、出発の時に二十六歳であつた青年僧も四十三歳になつていたという。そして翌年長安に到着している。

敦煌の英雄　張議潮

張議潮は唐の末、沙州の敦煌で生まれた。長安から派遣された敦煌統治の為の官吏が、地元の豪族となつた者の子孫だという。前記したように同地が中国の版図に入ったのは、紀元前二世紀の漢の武帝の時だが、唐の末ごろには吐蕃の支配下に置かれていた。

もっとも同地一帯の吐蕃は支配権を奪いあい、血で血を洗う闘争を繰り返していた。張議潮はこの間隙に乗じて、沙州を漢族の手に奪回しようと考え、同志と語りあって計画を練った。或日、一同は武装して沙州の役所の門前に押しかけた。不意を突かれた吐蕃の役人は慌てて逃げ出し、簡単に役所を占領することが出来た。（８４８年）このように沙州の支配権を漢民族の手に奪回し、此の旨を都に報告したのである。

唐の朝廷は彼を沙州防御使に任命し、彼はこの沙州を根拠として河西回廊諸州へ出兵し、同年のうちに十州を吐蕃から奪還した。同年十一月、朝廷は回廊の十一州に、

新たに帰義軍を置き、沙州にその役所を置くことにして、彼を帰義軍節度使・十一州観察使に任命した。彼は更に涼州をも収復し、８６年に上京して右神武統軍に任ぜられ、河西回廊に君臨したのである。しかしながら、ウイグル族に滅ぼされる運命が待ち受けていたのであつた。

マルコポーロ

世界の探検家であったマルコポーロ（１２５４－１３２３）は陸路を東進して、１２７５年に都に到着している。其の東方見聞録には、「パミール高原を越えた東トルキスタン（新彊省）はフビライの領土であつた。カシュガルからヤルカンドを東進し、玉を産出するコータンを過ぎると、（ともに新彊省）タクラマカン沙漠の南に出る。（西域南道）更に東進して沙州を経て、粛州（酒泉）・甘州（張掖）を通り、三年間の大旅行の末に都入りを果たした」と書いてある。彼も亦、敦煌を通過したのである。（４７頁参照）

十月十二日　快晴

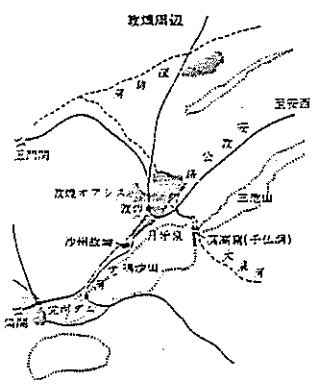
莫高窟

敦煌賓館を八時半に出発し、今次旅行の圧巻ともいうべき莫高窟の見学の日を迎えた。旅も九日目になり、疲労が蓄積して体力の消耗の甚だしさを感じるものの、莫高窟に対する期待は体力を上回つていた。

市街地から南東２５キロ、バスで三十分の距離に過ぎない。道程上には人や家畜も見えない渺渺とした砂漠は、文字通りの沙州である。朝の遅い太陽は砂漠の彼方から昇り、砂漠の彼方に沈んで行くことを毎日繰り返している。

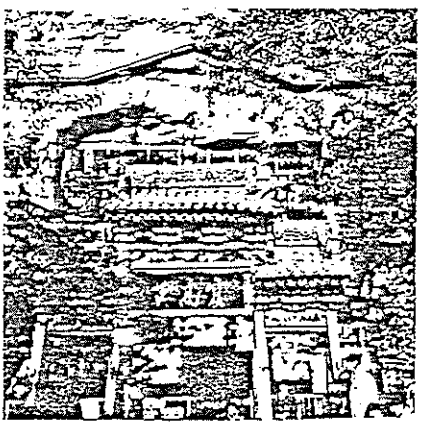
安敦公路を右折すると、綺麗な風紋を描いた沙の上に、数人の人影が見えて来た。その人たちは左右を白と黒とに色分けした服を着用し、周りに花輪が並んでいた。お葬式である。初めて拝見する回教の野辺送りは、漢民族の様式と随分と違っていた。進行して行く左手に三危山、右手に鳴沙山があかあかと陽を浴び、車は其の山裾へと走った。

こんもりと茂っているポプラの林の手前でバスは止まり、我々を下した。莫高窟の全景を眺望するために絶好の地点であるからだ。無味乾燥の砂漠の正面に拡がる沙山の裾に、無数の洞窟が１０００年の歴史をとどめ、画本で見た憧憬の景観は、表現の辞も知らない偉容である。



（次頁写真）鳴沙山の断崖（高さ約５０メートル）に掘られた洞窟は、中間が崩壊して南北に分かれているのが明瞭に網膜に写った。注入してきた知識から直ぐ南区と北区だと判り、各々の写真を撮った。

再びバスに乗車して、洞窟群の前に流れる大泉河（水はなかった）の橋を渡ると、第一の楼門がある。その正面上に「莫高窟」と「石室宝蔵」の二枚の額が掲げてあつた。その裏側に「三危攬勝」と書いた額があり、次ぎの門の右側に文物研究所や事務所が建っている。



すべての窟は、東方に聳えている三危山の方に面している。其の意味で三危攬勝（勝景を網羅すること）と書いてあるのだろう。これは郭沫若氏の筆であるという。沢山の窟は南北に連なり、１・６キロほど続いている。窟は二層にも三層にも掘られ、その数は１０００以上もあるが、発掘されているものは４２９窟だという。別名を千仏洞とも云われる。其の中で見学の許されるものは、月によつて異なり、時間的にみて多くの窟は見学出来るものではない。

下車した我々一行は柵の外から９６番の北大仏殿と、１３０番の南大仏殿の撮影をした後、懐中電燈を持った中国人女性の案内で、正面入口から見学に入った。何処の地でも盗窟は免れないが、ここは盗窟されても遺出品は４万点も有るというから、規模の大きさを窺う事ができた。

第１６窟

先ず北端に近い第１６窟に案内された。大きな窟で木造の庇がついている。窟の奥は真っ暗で、一つや二つの懐中電燈では、窟内全般の様子を把握する事は出来ない。四面の壁には千仏が、天井の壁には花文様が見られたが、詳しい事は記憶できない。晩唐の８６１年のもので、窟の中央の壇上に釈迦像を主尊とする数尊が安置してあつた。外国に訪れる観光客の一人となると、仏に向かって礼拝する心理にならないことは、どのような心理であろうか。不思議である。

第１７窟

第１６窟の入口の中の右側に小さな第１７窟がある。これが有名な「蔵経洞」と云う古文書の倉庫であつた窟である。

第３３５窟

初唐（６１８－７１２）のもの。天井の四面一杯に千仏が描かれ、本尊は釈迦坐像で光背の上の方に二仏が安置されていた。仏教の知識のない我々には、詳しい説明もなかなか理解は難しい。

第３２９窟

初唐（６１７－７０４）のもの。天井中央の四角になった部分に「乗象入胎」の像が描かれ、その周囲に蓮華、その外側に飛天、余った天井一杯に千仏が絵がれていた。

飛天は神の一種で「香音神」と呼ばれるそうだ。本尊は首が破壊されて清代に修理したと説明していた。（写真は絵葉書）

第３２８窟

初唐（６１８－７１４）のもの。奥に釈迦仏の坐像の他に三菩薩が安置され、左右の壁にも多数の菩薩の立像が描かれている。天井は蓮華の壁画である。

第３２３窟

清朝のもの。彼の有名な張騫が西域に赴くところを描いた壁画である。シルクロードの開拓者であり、目標としていた月氏の都であつた敦煌の地であるから、当然のことである。馬に乗った武帝と、その前に跪いている張騫の姿を描いていると云われている。（写真は絵葉書）

第３２０窟

盛唐のもの。天井に千仏、奥に仏龕（ぶつかん、龕は神仏を安置するところ）。壁画は阿弥陀仏を主尊とする浄土の様相が描かれてある。悪をなし善をなさない人も、臨終のときに南無阿弥陀仏ととなえれば、極楽に往生できるのだと、壁画から説教されているようであつた。

第４５窟

初唐（７０５－７８０）のもの。本尊の左右に十大弟子の迦葉と阿難尊者が立ち、更に二体の菩薩が安置してある。非常に立派なものであつた。

第４６窟

この窟には涅槃像が描かれてある。

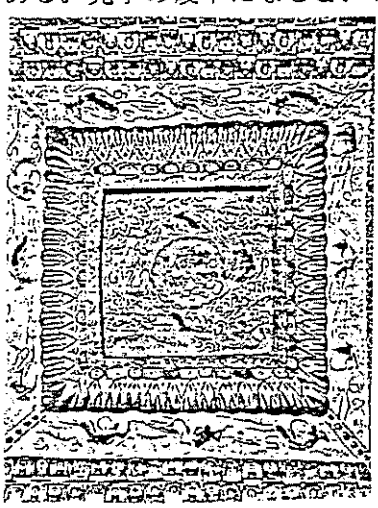
第５５窟

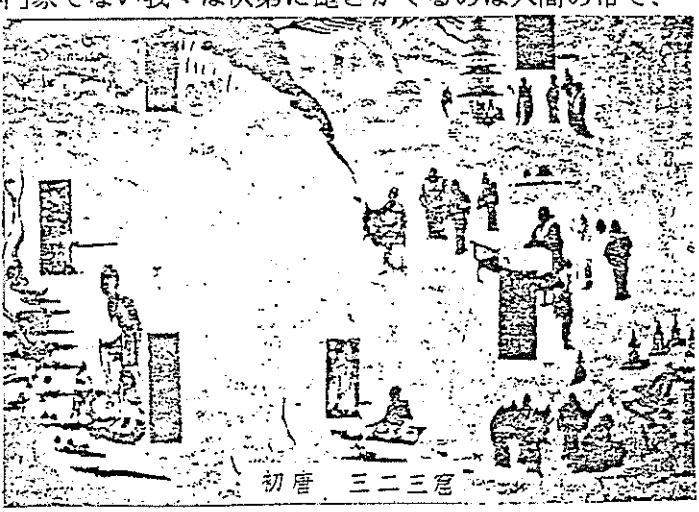
宋代のもの。時代が進んで９６０年を過ぎた関係からか、窟は一段と大きくなり、仏像や壁画の技術も非常に進歩していた。

第８５窟

宋代のもの。入口に千仏が描かれ周囲の壁画は記憶にないが、本尊は柔和な感じを表していたようだ。

以上が午前中に案内嬢の説明を聞きながら参観した、１１個の諸窟の記憶の一端である。見学の後半になると、専門家でない我々は次第に飽きがくるのは人間の常で、





メモをすることも面倒なりがちであつた。

しかしながら指呼の間に、模写でなく本物の敦煌の莫高窟を参観できたことは、何よりも優る何かを、会得したような感に打たれたのは、私だけではないだろう。

五年前に洛陽の竜門石窟（４９４－９０７の間のもの。１３５２窟）を拝見し、本年一月に杭州の霊隠寺にある摩崖の石刻像（五代から元までの３３０余体）を拝観した。今ここに莫高窟に足跡をのこして、益々中国に魅せられてしまつた。我々を旅立たせるものは歴史である。

昼食をとるためにバスに乗車し、鳴沙山を後にして敦煌賓館に帰還したのである。

★注　初唐・・（６１８－７１２）　　盛唐・・（７１３－７６５の玄宗時代）
　　中唐・・（７６６－８３５）　　晩唐・・（８３６－９０６）

午後の出発は二時だと告げられて時間の余裕もあり、敦煌の資料を読み返してみることにした。

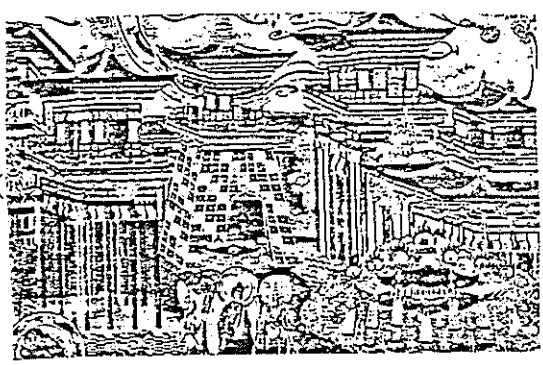
最初に造営されたのは四世紀東晋時代。３６６年、僧楽僔（らくそん）が夕陽を浴びて金色に輝く向いの三危山を拝し、「忽ち金光と千仏を見た」。千仏の威厳を感じて、此処に一窟を開いたというのが始まりだと伝えられている。

以後、１４世紀の元代までの約１０００年にわたり彫り継がれた。発掘された４９２窟を時代別に見ると、隋以前１２０、隋代１４０、唐代１１１、五代７、宋・元代三五窟である。

壁画の内容は初期には民間神話が多い。後漢時代に伝えられた仏教が、中国古来の神仏思想と結合したものと見ることが出来る。インドから西域に伝わつた仏教芸術の影響が強く、釈迦が前世で己を捨てて人を救い、善を勧めるものが特に多いようだ。唐代は壁画の黄金時代で、内容も西方浄土に極楽世界を求める多彩なものに変った。

仏像は石の質が脆いために石像はなく、すべて採色された泥塑で、中でも五世紀前半北魏の第２７５窟にある、交脚弥勒菩薩は有名である。（下図は絵葉書の壁画）

午前中に見学した第１７窟は、もともと蔵経洞と呼ばれ、宋代までの貴重な経文や文書を蔵していたが、西夏の侵入に際して封じ込めたもので、１９００年に道士「王円籙」（えんろく）が発見したものであつた。敦煌が世界的に有名になつたのは、何と云っても、この第１７窟にあつた古文書、古写経、絹画が、世界に知られたからだ。これらをイギリスのスタイン（１９０７年及び１９１４年）、フランスのペリオ（１９０８年）等が、当時管理していた王円籙から買って、自国に持ち帰ったのである。それらは多くの学者によつて研究され、仏教史を含めた歴史の空白を埋める資料など、貴重な資料があることが知られてきたからである。



日本では大谷光瑞の命を受けた京都の吉川小一郎氏は、１９１１年（明治４４年）１０月５日に敦煌に着き、１０月１０日より莫高窟にも滞在して、経文を収集（購入）し、敦煌に約三か月間滞在していた。其の間に第４４３窟の壁面に「大日本京都吉川小一郎、明治４４年１０月２０日」と控え目な署名をしている。残念

ながら此の窟の見学は許されなかつたのである。

午後再び莫高窟の見学となり、午前と同じ案内嬢が我々を引率した。窟の各入口には「窟内拍照（撮影）禁止」の札があり、全員懐中電燈を携行しなければ、内部は盲人と同じだ。

第４２７窟

隋朝時代のもの。窟に入った左右には三対の力士像と天王像が立ち、正面には大きな三尊仏像が立っている。唐代のものと比較して、頭が非常に大きいのが特徴である。天井と四方の壁に千仏が描かれているが、光を照射すると千仏の頭部が輝いて見える。金が混入されているそうで珍しい。隋時代では、信者は此の仏像の囲りを廻つて祈願したと、説明があつた。

第４２８窟

北周（５５７－５８１）のもの。北周時代では最大の窟で、仏像はインド様式に造られている。

第４５４窟

北宋（９６０－１１２７）のもの。清時代に復元したというもので、三層の上にあり、中はほぼ正方形で一辺１０メートルほどの大きさの窟である。全体に黒く煤けており、香煙の匂いがしみついていて、本尊はなくなつていた。しかし、子宝に御利益があるとかで、４月８日の釈迦生誕日には非常に賑わうという。

第２５３窟

北魏（３８６－５３４）特別の説明なし。

第２５７窟

北魏（３８６－５３４）特別の説明なし。

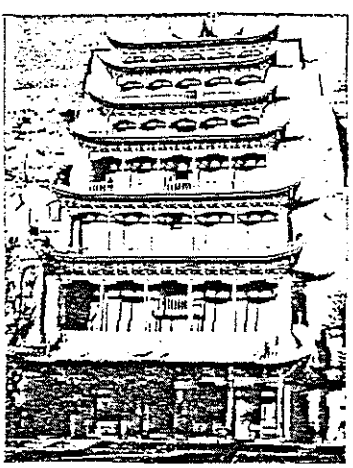
第９６窟

初唐６９５年のもの。北大仏殿という。七層（屋根は九層）に聳える伽藍があり、その内部に、世界で第四番目という高さ３３メートルの大仏が安置されている。遥かに上を仰ぐと仏の顔が拝まれ、大仏様は弥勒菩薩であるといわれている。足の部分は唐代のもので、上部の身体は清朝時代に復元したものだ。また大仏様の着ている着物も同じく清朝時代のである。

日本の仏像と異なる点は、日本の仏様の「左の手の平」は上を向いているが、中国のものは下を向いている事だ。下を向いている理由は安心立命を意味するからだというが、しかし、唐時代は下を向いていたから安心立命には関係なさそうである。

則天武后の命によつて６９５年に造られ、顔は則天武后に似せて造らせたとか。彼女の罪滅ぼしの目的ではないだろうか。

この大仏の周りを男性は右から、女性は左から三回廻ると、願い事が叶えられると云うことで、中国人も我々も殆どの人は其の通りに廻っていた。さぞかし御利益があることだろう。（右の写真は９６窟の外観）



大仏を取り巻くこの窟は、煙突状に岩の天井をぶち抜いた上に屋根を懸け、各層の屋根の下に窓を造って採光し

たものである。世界一の大仏は四川省にあるといわれるが、敦煌莫高窟のシンボルは第９６窟である。

第１４８窟

中唐７７６年のもの。長さ１６メートルの大涅槃像で珍しく石仏である。顔は金色で衣は赤く、南を枕にして横臥し、その後方に涅槃を悲しむ仏弟子の塑像が並び、外国人の姿をした像も混じっている。（中国の涅槃像で最大のものは張掖にある）

午後は以上の七窟で見学を終了した。我々が実際に案内されて説明を受けた事を、簡単に記述したものの、午前と合わせて全体の４パーセントにすぎない。このペースで全窟を参観するには、半月以上の日時を費やさなければならないだろう。大変な規模である。

数年前に大分県の臼杵の石仏を訪れ、本年三月に同じく国東半島の摩崖仏を見学したが、歴史の古さからも又規模においても、中国の石窟とは日を同じくして語るべからずである。

敦煌と云えば壁画、壁画と云えば敦煌であり（未だ見る機会がないが雲崗も同じと聞く）、数年前に見学した洛陽・竜門石窟は彫刻の宝庫であつた。何れにしても中国の仏教遺跡は我が国の比ではなく、其の魅力は我々を引き付けたのである。

沙漠の町、敦煌が交易の主要な中継地となり、最盛期の仏教都市として繁栄したのは唐代であつた。唐代といえば則天武后と楊貴妃を想像するするが、権力を把握したのは則天武后だ。竜門の大仏の美しい顔立ちも、則天武后をモデルにしたといわれ、彼女の時代が石窟造営の最盛期であつたのである。

莫高窟も亦、同じだ。第９６窟の北大仏殿の発起人は則天武后である。何れも仏教を背景にした巨像によつて、政権と結び付けたのであろう。彼女の名は石窟史上においても永久不滅だと感じながら、神仙の住むような霊場を後にしたのであつた。

鳴　沙　山　と　月　牙　泉

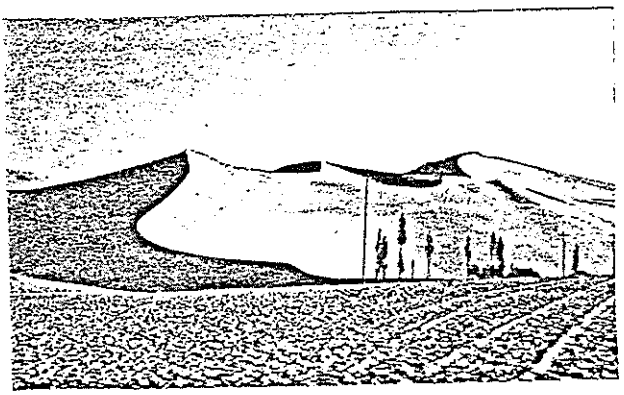
莫高とは「砂漠より高い」という意味である。莫高窟が穿たれた鳴沙山は、西の方へ２０キロも続く大きな沙山だ。莫高窟の反対側、即ち西方２０キロの位置にある湖が月牙泉であり、鳴沙山を半周して西方へ行かなければならない。（５３頁参照）

「西方」とは仏教でよく唱えられている言葉で、西方浄土を想い出す。

「浄土」とは仏の居所というか、煩悩の束縛から離脱した清浄な国土の意味であり、極楽も其の一つだ。その浄土が西の方にあるから、西方浄土という言葉が生まれたのであろう。

後漢の歴史家であった「班固」は、中国より西の世界を「西域」と名付けた。昼間地上を温めた光は、夕方になると、さらさらと抜けて行き、山や川や平原の向うに落ちて行く。人間も町も後に残して、光が去って行く方向を西と呼んだ。光が去って行く彼方は、誰も未だ見ない世界である。古代の中国人は、未だ見たこともない西方にロマンを抱き、「西方浄土」と云つたのではないだろうか。勿論、真実の事は知らない。

沙莫の清澄な空気に包まれ、金色に光る鳴沙の山裾を迂回すること約３０分、月牙泉の案内所に到着した。



砂嵐の影響によつて出来たのか、稜線には鋭い角が立ち、風紋を描く奇景は形容する言葉も知らず、右の写真で説明するより方法がないほどの景観であつた。

小石のゴビとは違い、細かい粉のような沙で覆われた鳴沙山は、晴れた日には管弦の音が聞こえたり、数万の兵馬が黄沙に埋まつたあと、太鼓や銅羅の音が聞こえるようになったことから、鳴沙山と命名されたと云うことである。

鳴沙山の麓にある月牙泉は、砂の中から湧き出た三日月形の湖で、底まで透き通る美しい水をたたえていると、案内された。

この美観を最大限に楽しむ為には、比高５０メートルほどの沙山を登らなければならない。鳥取の砂丘の比ではない大きな沙山だ。しかし、先日からの微熱がとれず、一時間も費やして登る意気込みは完全に挫折してしまつた。

前方から駱駝の列が近ずいて来た。登頂断念者を運ぶ砂漠の舟（らくだ）の代金は十元（８００円）だと聞くと、殆どの人は急いでラクダの背に跨った。ラクダは何回乗っても乗りにくい動物だが仕方がない。親方を先頭にして綱につながれた十数頭の隊列は、シルクロードの旅をした昔の姿と変わりなく、其の魅力の一端を味わったことは、沙漠の想い出の一つであつた。

月牙泉は朝の光に茜色に染まり、日中は空の色を反射してエメラルド色を呈し、日の傾きにつれて灰色に変化して行く、仙人の棲む所だと云われている。長さ約２００メートル、幅３０メートルぐらいの小さな泉は、沙漠の中にありながら、古代から涸れた事がないと云うことであつた。

湖畔の沙は塩分が含まれているのか、白く光つていた。泉の水を手ですくって嘗めてみると、素晴らしく透明だが塩辛い水である。「鉄脊魚」という名前の魚が棲息し、不老不死の魚らしいが見当らない。この珍しい魚を取るためか、手前の岸辺に古ぼけた一隻の小舟が繋がれていて、長閑な風景は画になりそうである。（下の写真）

月牙泉の入場券に印刷されていた寺院の跡が、対岸に煉瓦の基礎を残していたが、道教の寺院の跡らしい。莫高窟の発見者も道士（道教の僧）であつたことを考えると、さもありなんだ。神仙説を唱え、五斗米道と叫ばれた病気治療の光景が、脳裏を掠め

ていつた。
鳴沙山に登った健脚の元気者の姿は、米粒のように小さく、赤焼けした沙の斜面に影をおとし、登る人も降りる人も、沙に足を取られて苦労していた。沙山登りも厄除けの行事だというから、以て瞑すべきことである。
ラクダの背に乗ることも厭きた。帰路は沙上に足跡を残しながら、てくてくと歩いていると、白人さんの一行がラクダの上から手を振り、互いに愛嬌を交換し、重い足をひきずつて案内所に辿り着いた。このときに接待を受けた湯茶は値い千金であり、オアシスの味を噛みしめたのであつた。

十月十三日　快晴　敦煌一柳園

陽　関

蜿蜒と続くゴビの彼方に敦煌があると、欣喜雀躍して訪れた此の地も、愈々、今日の午前で名残を惜しむ事になつてしまつた。
昨日の夕食時に希望者を募った陽関見学は、体の不調を考慮して不参加と決め、敦煌訪問記念にと、唐三彩の大きな花瓶を仕入れて、荷造りに追われた。
朝を迎えた。敦煌を訪れながら「陽関を見ず」では、悔いを千載に残すと、無理を承知で強行を決意し、朝食時に参加を申し込んだ。一夫関に当たれば万夫も開くことなしと青春の意気を取り戻したのである。
唐代のシルクロードの本道は、敦煌の東にあつた玉門関から砂漠を越え、伊吾（現在の哈密）・高昌（現在のトルファン）に至る「伊吾の道」の西域北道（天山南道）であつた。（４７頁地図）
それよりも古いシルクロードは、悪路、険路であつた南廻りの「楼蘭の道」を本道としていた。この道が陽関を出発していたのであり、法顕の通った道である。
バスは九時に出発したが、旭日は未だ低い。敦煌周辺の僅かな耕地には、痩せた棉花が一面に白い花を咲かせ、ロバやラクダに曳かせる運搬車は、溢れるばかりの棉花を積んで急いでいた。今朝も赤く輝く鳴沙山を眺めながら、青海・チベット公路を南下して、いよいよ本格的に西域へと入って行った。（５３頁地図参照）
昔の貿易路であり軍用道路でもあつた街道の各所に、窪みが掘られた跡が見えていた。井戸を掘ったのか、それとも降水時の貯水の為であろうか。路面の凸凹が激しくて体力の消耗、此の上なしだ。もう少し年老いていたら諦めたと思うと、参加の判断は正鵠を得たと云えるだろう。
熱風が吹きまくり、或は身を切るほどの寒気に堪えて、２０００年の歴史を秘める漢時代の狼煙台が、所々に残骸を止めていた。流石に由緒ある街道である。南進するにつれて路面は益々悪化して、タクラマカン砂漠に通じる道は、想像も出来ない酷いものだ。（右は陽関狼煙台）

このような不毛の大地域は、一体どうなるのであろうか。世界の果てと云われる砂漠の海は

永久に此の姿を受け継いで行く運命にあるようだ。

アスファルトの道路が砂利道に変わると、砂漠の一点にある小さな湖水に向かって、天の恵のように水が流れていた。人家もまばらに散在し、樹木に覆われたオアシスに入って行った。今も砂漠は生きていたのだ。古い時代に華やかな歴史の舞台となつた土地かも知れず、数え切れない人達の生命を繋いだことだろう。此処が陽関遺跡西方１０００メートル附近の小部落である。（中国国際書店発行地図にある敦煌県南湖村）

敦煌から西南へ７５キロ、１時間半の辛い道を突破して漸く関所跡に到着し、バスは烽火台の下で止まった。西域との国境だ。２０００年に遡る漢時代の西端に立つ心境は、生ある者の最高の感激だと表現したい。夢のようである。

関所の跡は、烽火台の赤い丘を中心にして、南北に小さな丘陵が低く連なっている。柵で囲まれた烽火台は巨大な土の塊のようで、煉瓦と粘土で固めた古びた威容は芸術である。砂漠を睥睨していた烽火台も長い歳月の間、風と沙に侵食されて、上部は崩れ落ちてしまったが、今なお壁の高さは４メートル、基部は５メートル以上はあるだろう。

眼を西の方に向けると、渺渺としたタクラマカンの沙漠が無限の彼方に広がり、唐の詩人「王維」が詠んだ「西のかた陽関を出ずれば、故人無からん」の、詩そのままの実感が込み上げて来た。嗚呼、何という素晴らしい地の果ての景観であろうか。

（下の写真は烽火台よりタクラマカン砂漠を眺望）

死者の白骨をもつて道標としたと云う、クラマカン沙漠に心を引かれながら、関所跡の周辺を遊歩して休憩所を覗くと、下記のように書かれてあつた。

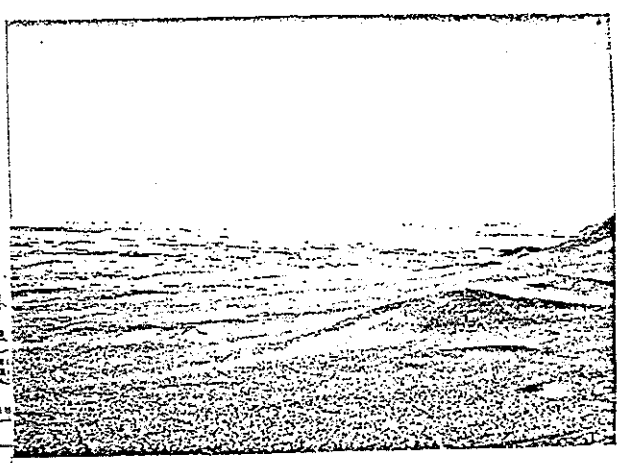
「此の地より東北７８公里（キロ）に敦煌県城があり、故名として漢の武帝が西域と定め、四郡に列した。漢時代には都尉治所があり、魏晋時代には陽県を置き、唐時代も同じく陽県であり、唐以降は衰微の一途をたどる」と。

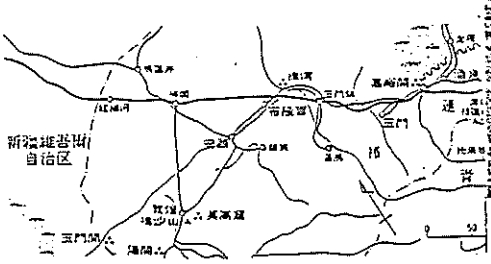
即ち、漢時代には万里の長城が敦煌まで延びていて、陽関は砦であつた。歳は移り変り、明代には国威は嘉峪関まで後退してしまつた、という意味である。

関頭に立って死闘を体験した者の一人として、唐の詩人である「王昌齢」の従軍行は、よく其の心理を表現していることを銘感し、最後に其の一節を掲げて昔を偲び、陽関記の終わりとしたい。

黄河百戦穿金甲　不破楼蘭終不還

黄河に覆われたような西北の砂漠で、おびただしい戦闘を繰り返し、金の鎧に穴が開いたとしても、敵の都の楼蘭を打ち破るまでは、決して故国には帰るまい。





敦煌 ― 柳園 ― 夜行列車

シルクロードと云うと敦煌の名声が他を圧倒し、我々の万里の夢も敦煌であつたが、人生は別れの連続であるように、離愁の時を迎えた。

午後二時半、住み馴れたような愛着を覚える敦煌賓館を発ち、柳園駅へと北進した。２３０キロ、三時間行程の柳園街道は一段と寂しく、黒砂漠の中で、おんぼろトラックと時々すれちがうだけだ。寥落とした世界は睡む気を誘い、眼を覚ますと一時間半を経過していた。久しぶりに見た道標は４３キロの地点を示し、あと一時間足らずで柳園であつた。

其の間に、トルファン行きの寝台列車の予約が取れないとの噂が流れた。我々のツアーだけが、何の怨念があつて虐待されるのか、憤慨に堪えない。早速、寝台が取れなければ、軟車でも取れと抗議したものの、寝台列車には軟車の連結はないと、すげない返事であつた。

一ヵ月も前から旅費を支払はさせて、不誠実極まる不始末である。怒りを押さえて柳園駅に着いたところ、今度は軟車の待合所に入ることを許さない。怒髪天を衝くような罵声を、張りあげたい気持で一杯だつたが、漸く薄暗い待合所での休憩を許され、溜息をついだのであつた。

柳園は駅舎があるだけの小さな町で、天山山脈の流れであろうか、灰色の山が迫って来ている。酒泉と同じく敦煌の玄関口にあたり、敦煌の壁画に描かれていた飛天の額が、待合所に掲げられていた。

添乗員は、硬車（主として中国人が乗る車）も非常に込み合つているらしく、各人は空席を捜して座つてほしいと告げた。憤懣やる方なしである。帰国後は、旅行社社長にたいして徹底的に責任を追求し、寝台でさえも確保できない業者は、業者の資格なしと強硬に迫る決意で、満員列車に乗り込んだ。

二人の白人が悠々と寝台車に乗る姿を眺めて、更に心底より激憤を感じ、空席を求めながら、重い脚を先頭車までも運んだ。空席をさがす心境は「急来抱仏脚」（苦しい時の神だのみ）である。

好意的な中国の一青年が、ここに坐れと空席を指差した。地獄に仏を迎えた有難さを身にしみながら、彼の横に腰掛けて、漸く安堵したのであつた。彼は遼寧省撫順市在住の「尚利」という青年である。炭鉱で有名な彼の町には、多くの日本人が居住していた関係からか、仁愛を施して我々の苦情を見逃さなかつた。

暫く沈黙の後に、青年は哈密で下車するからと告げてくれた。我々が吐魯番（トルファン）へ行くことを察知したのだろう。約五時間の辛抱だと諦め、吾が子と語るように下手な中国語で会話を続けた。

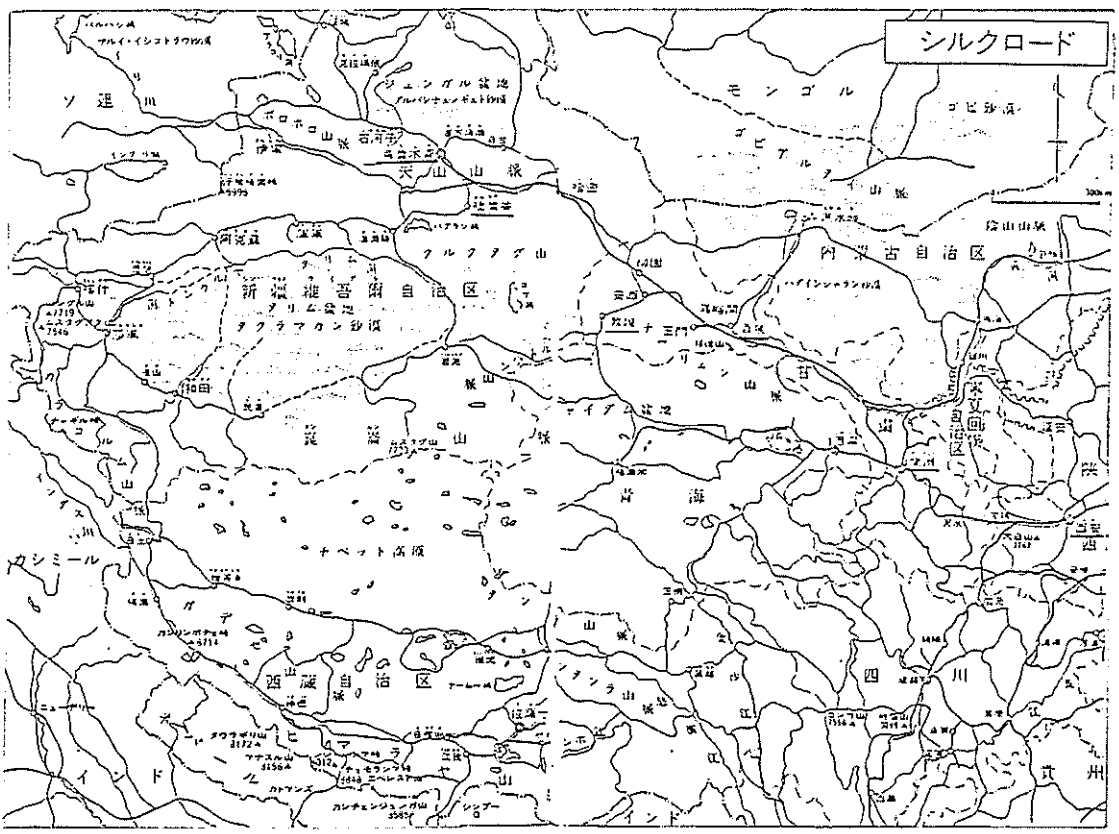
早速、好意に対する心ばかりの返礼と思い、持参していた紅茶と羊羹のサービスをしたが、悉く遠慮するのであつた。当然のことをしたという態度も和らげて、漸く日本のタバコだけは吸つてくれ、肩の荷を下ろしたのである。

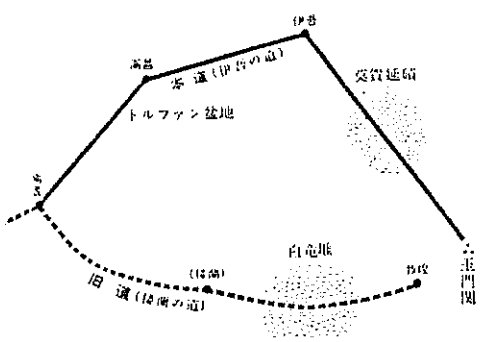
小一時間の雑談の最中に、添乗員は寝台が取れましたと、安堵した表情で廻って来た。十五時間の辛苦の旅から開放された一瞬の響動は、喝采を絶叫したい心境であつた。

青年もまた満顔に笑みを浮かべて喜び、悦びの中での挨拶の手には、友好の熱い血

が流れたのである。荷物をまとめて席を立とうとする私を差止めた彼は、記念だと人民帽を荷物の中に押し込め、辞退する手を払って更に押し込んでしまつた。袖ふりあうも他生の縁とは言え、このような出合と別れは、生涯を通じて忘れられるものではない。

隙間風の入る寝台車に移動した直後、ツァーの誰かが差し入れてくれた哈密瓜の味も亦、忘れられず、紀行文の中でも両者に御礼を述べておきたい。





十月十四日　薄曇

トルファン（吐魯番）到着

苛立ちから一転して慈愛を受けた、昨夜の興奮した心も既に静まり、メモの整理が終わったのは十一時すぎであつた。玄奘が玉門関から関所破りをして最初に着いた伊吾（現在の哈密）は、もう直ぐだと思いながら、振動の激しい床に就いた。

朝の遅い日の出は八時を過ぎ、八時五十分にトルファン駅に下車した。現地の中国人は綿入れの分厚い服を着用し、敦煌の人たちとは全く違った姿であつた。

出迎えに来た通訳の女性は、トルコ系か、それともイラン系か、鼻の高い白色の美人である。数え切れない古代の角逐が、彼女の顔に表現されているようで、さすがにウイグルだと、強い印象を与えてくれた。

駅前は砂漠というよりも、乾燥した灰を撒き散らしたような感じがして、約十五度に昇った太陽の光線は何かに遮られて、夕暮の月のようであつた。黄砂現象、否、黄灰現象であろうか。

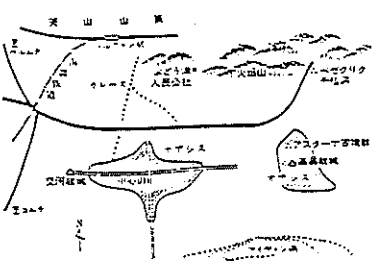
市街地までの所要時間は一時間。昨夕、柳園から乗車した白人夫婦はタクシがなくて困り、我々のバスに便乗を懇願してきた。当然我々全員は乗車に同意した。彼等夫婦は「どうも有難う」と日本語で御礼を述べ、私の横に坐った。スイス人の中国文学研究者と妻の地質学研究者である。

広漠とした荒野の中に通じる砂利街道を南下する途中、灰塵の空の切れ間から、一瞬ながら雪を頂く天山を遠望することができた。最果てとまで云われた、遠い天山の麓に来た実感が込み上げ、万年雪は我々の注視となつたのである。

市街地に接近して行くにつれて、小学生の登校する可愛いい影が散見し始め、おそらく始業時間は十時ではないだろうか。日本との時差は三時間はあるようだ。

郊外の農耕地は白や茶や黒色をした羊の群れを遊ばせ、市街の到る所に小さいモスクが建ち、碁盤の目のように整理された広い街路が延びていた。新疆ウイグル自治区、創立三十周年記念式典が十月一日に挙行された為に、それを祝賀した横断幕や旗が街に氾濫し、恰も我々を歓迎しているようであつた。

町外れにあるトルファン第二賓館に十一時、到着して部屋割りも終わり、一時の昼食までの時間を有効に利用して、早速、散策に出掛けた。友人に依頼された哈密瓜の種子を求めに、市場に脚を急がせたが、衣類雑貨や野菜ばかりで目指す瓜は見つからない。哈密瓜をハミクワと中国語で発音しても通用しないのだろうか。そうこうしている中に通じたのか、一人の老人が一軒しかない売場を教えてくれた。実に大きなもので黒部西瓜に匹敵するものである。まくわ瓜の一種だが其の珍味は最高で、四分の一に切ってもらって帰館した。一個そのまま持ち帰る自信はないからだ。　後刻、哈密瓜はウイグル語でコーゴンと発音することが分かり、中国語が余り市場で通用しなかつた理由が判明した。また此の哈密瓜をカリフォルニヤでも栽培したが、此処のような味にはならないらしく、日本の旭川メロンも哈密瓜の種子から作つたものだと云う。（右はトルファン近郊図）



吐 魯 番 の 概 要

天山山脈の東端、博格達峰（ぼこだ・５４４５メートル）の南に広がるトルファン盆地に開けたオアシスの町である。

吐魯番とはウイルグ語で低地を意味し、トルファン盆地の最も低いところは海抜下１５４メートルで、世界第二の低地である。年間降雨量は１６ミリ、気温は夏は平均四十度というから、古代に「火州」と呼ばれた事もうなずける。最高四十七度にも達しても夜は急冷して、一日の温度差は二十度にもなり、冬は零下三十度を越えると云われている。

新彊ウイグル自治区の人口は千二百万人、面積は中国領土の六分の一、日本の四倍半である。ここにはウイグル族、ハザック族、キルギス族、タジク族等、十三の少数民族が住み、ウイグル族が五百四十万人と最も多く、漢民族もまた少数民族である。そして漢民族の住む中央中国を「内地」と呼んでいたが、日本の内地の語源も、これから来ているのかも知れない

トルファン県の人口は約十七万人、住民の九十五パーセントはウイグル族であり、回教徒の帽子をかぶつた男の人が多く見られ、若い女性の奇麗なネッカチーフ姿は、回教の町トルファンを象徴している。

中国は年代的に古いばかりか、広大な土地のうえに多民族国家であり、興亡の歴史は頻繁に変化した。その意味からも歴史の概要を復習しなければ、西域全般やトルファンを理解しがたいと思い、記述しておく。（６３頁地図参照）

前漢の武帝（在位前１４１－８７）は前１３９年、月氏（敦煌）と軍事同盟を結ぶ目的で「張騫」を派遣した。匈奴での十三年に及ぶ捕虜生活から脱出した彼は、匈奴におされ烏孫（うそん）にも圧迫された月氏が、移動した先までも足を伸ばした。（ソ連のサマルカンド近辺）其の時にトルファン地方は車師国（しゃし）と呼ばれ、張騫は此処を通過している。車師国とは、天山をまたいでウルムチ地方に及ぶ広い地域の名称で、トルファンは其の中の車師前国（都はトルファンの交河城）として史書に登場している。住民の大部分はイラン系であつた。（１３頁地図参照）

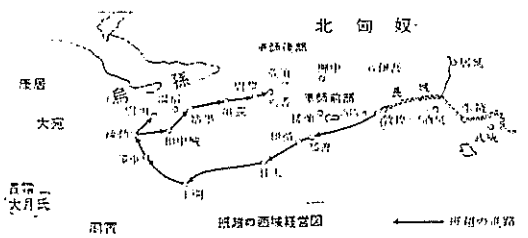
其の後、漢、匈奴（胡）、亀茲、烏孫などの葛藤に巻き込まれて行つた。漢の武帝の頃のシルクロードの西域には、初めに三十六か国あつたのが、分裂を繰り返して五十五か国となり、天山北路が旅人にとつて安全な道となつたのは、唐時代以降である。また天山南路は紀元前一世紀の中ごろから、殆ど漢の支配下に入っていた。シルクロードの華やかだつた時代の一つである。

前漢が滅ぶと、匈奴は再び西域に勢力を挽回し、後漢（２５－２２０）が成立すると、匈奴に苦しんでいた西域の国々は、後漢に援助を求めた。７３年、後漢第二代皇帝の明帝（５７－７５）は、西域平定のため「班超」を西域都護（軍司令官）として遠征軍を派遣した。各地を席巻した班超は、亀茲国（現在のクチヤ）を西域の基地として十一年間にわたって号令し、西域を治めていた。（次頁地図）

トルファン盆地の最大の遺跡である高昌城は、９１年、第四代の和帝時代に基地として造ったもので、漢族王朝の高昌国が誕生したのである。

１０２年に班超は西域を去り、１０７年に西域都護府（都とは総ての意）を廃止した。理由は遠く離れた西域経営が、後漢の大きな負担となつたからである。西域都護

府廃止後、西域は再び匈奴の勢力圏内となつた。



五胡十六国時代の分裂時代を迎えると、トルファンは河西の前涼（３１４－３７６）の勢力下にあつて高昌郡となる。

北魏時代に入り、北魏（３９７－４３９）と手を結んだ高昌国は、シルクロードの押しも押されぬ勢力となつた。

隋代（６０４－６１８）の高昌国は、東の隋と北の突厥という二大勢力にはさまれて臣従し、短い黄金時代は終わつたようである。

唐時代（７０５－６１８）になつて、唐は高昌国を直轄領として「西州」と名付けた。第二代の太宗は西域経営上、高昌を自国の一州とする必要があつたからである。太宗は軍事基地である安西都護府を高昌の交河城に置いた。こうしたシルクロード征服をかけた太宗の野望実現の前には、灼熱の地、高昌で激しい戦いが繰り返されたのである。

唐代のシルクロードの本道は、敦煌の東の玉門関から伊吾（現在の哈密）高昌に至る通称「伊吾の道」であつた。それより古いシルクロードは、悪路、険路の南廻りの通称「楼蘭の道」（楼蘭は４世紀に滅亡）を本道としていた。（６３頁地図）

若し旧シルクロードが復活したら、旅人は楼蘭の道を選び、高昌国の治めるトルファン盆地を通過しなくなる。シルクロードの幹線から外れれば、高昌国の国益は一気に落ちる。高昌国の悩みは此の事にあつた。

ところが、伊吾の道と楼蘭の道とが出会う所にある「焉耆」（えんぎ）は、楼蘭の道の復活を望んでいた。其の理由は、その道は険路であつても、楼蘭王国の消え去った旧道には、もはや中継地がないからである。中継地のないシルクロードの商品は、コストを上げずに唐まで運ぶことが出来るからだ。

反対に高昌と伊吾を中継して敦煌に入る商品は、コストが高くなつて当然値段が跳ね上がる。

そこで「焉耆」は旧道復活のために、唐に援助を求めたのであつた。高昌と焉耆の関係は次第に冷えて行き、遂に高昌国（麹氏）は唐との国交断絶を決心した。

ところで高昌国は、たかをくくっていた。草一本も生えず、熱風は吹きまくり、或は身を切るほどの寒い砂漠を越えて、唐は大軍を高昌までも送られないだろう、と。

だが、太宗は遠征に踏み切った。焉耆も唐の高昌攻略に兵を送った。高昌は城の周りに壕をめぐらしたが、唐軍は難なく其の壕を埋め、遂に高昌城を陥落させてしまつた。太宗は念願通りに高昌を唐の一州とし、「西州」と名付けて安西都護府を置き、シルクロードを治めたのである。

唐の全盛も安禄山の謀反で終わり（７６３）、西域では吐蕃（チベット）の勢力が天山南路にまで及び、安西都護府は自然消滅した。モンゴル草原を追われたウイグルは、吐蕃を蹴散らしてトルファン盆地になだれ込み、火焔山の辺に王朝を樹立し、シルクロードを制したのであつた。清代には其の支配下にあつて藩王の自治が認められ、トルファン盆地には吐魯番郡王がいた。吐魯番王であつた額敏（えみん）が建てた回教寺院を、額敏塔と呼んでいる。以上が簡単な此の地方の歴史である。

交　河　故　城

午後三時半より観光に出発した。昼食の休憩が二時からと云うことだから、それで適当な出発時間のようだ。一向に灰色の空は晴れず、街路は空中に飛び散る細かい灰で薄汚い感じがしていた。

年間の総雨量は３０００ミリもあるけれど、地上に降下するまでに蒸発するらしく、前記したように１６ミリと発表されている。それほど乾燥しているから、灰沙現象が起きるのではないだろうか。風も１５メートル以上吹く日が年間３０日以上もあり、今日は白夜のようである。

先ず最初に案内された所は交河故城であつた。一千年前、或は二千年前の交河城と今とでは、どのように違うのか興味深いところであつた。市街から西へ１０キロ、東西を河にはさまれた丘陵の上にあり、遠くから眺めると軍艦の形をしている。

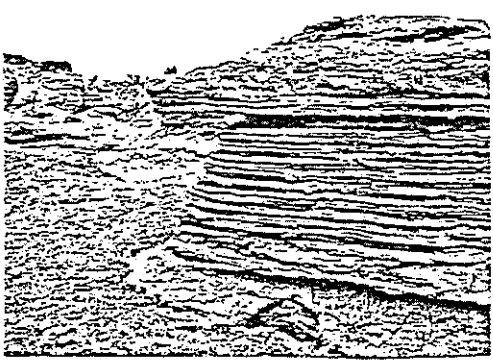
前記した前漢時代の車師前国の王城であり、七世紀に唐が高昌国を滅ぼした後、安西都護府を置いた所だ。二つの河が交叉した場所にあるから交河城と名付けたのである。現在の遺跡は唐代のもので、東西３００メートル、南北１６００メートルの台地となつている。

故城の入口には全国重点文物（重要文化財）の看板が建っていた。バスは急斜面を登つて城趾の中の直線路を走り、展望台の下で下車して階段を上り、台上に立った。西域の小国である国王が、綱渡りするように、戦乱の世を生き抜いた心境を想像しながら全貌を眺めたのである。背水の陣を敷いた指揮官の苦悩は、経験者の一人として強く胸に衝動を受けたのであつた。

中国では古来、都市を城市と称し、交河城もまた城市である。この城の最大の特徴は、地上に建物を建てたのではなく、地面の下を掘り下げて、そこに造ったものものだ。即ち地表面はそのままである。下の写真のように、地下の土を彫刻しながら、住居、商店、寺院、役所等を造り、道路も掘り下げて造ったものだ。暗い地下要塞式のものではなく、掘った上は青空で、掘らない土の中を細工して掘り下げたものだ。

此の不思議な構造は、全く降雨のないことと、建築用材や燃料の乏しい事から考案（私見）されたと思うが、世界に類がないのではないか。

深く掘り下げた道路を通って行くと、壁面に鮮やかな地層が見られ（下写真）、住居だった穴も点々と続き、次ぎにトンネルが掘られてあつた。暑さや寒さを防ぐ手段であろう。トンネルを出ると、１０メートルほどの高さの風化した塔が見えてきた。



これは日干し煉瓦積みのもので、仏塔であるとの説明があつた。その隣に寺院の跡があり、高さ５メートルほどの土塀で囲まれている。

城趾の一端から水無川を瞰下すると、高さ３０メートル以上の断崖となつていて、城が軍艦のように見えるのは当然だ。川を隔てた向う側も断崖が続き、其の崖には沢山の洞窟が望見できた。台地の上は矢張り不毛の地である。唐の大軍が此の城塞を攻撃する際に、どの地点を埋めて突撃路を造ったか、興味の持たれるところだ。古代の攻城戦術として積土する方法は、イスラエルのマッサダ城塞にも見られたが、敵よりも高所を造ることが先決であつたようである。

城の中は所謂、市街となつていたのである。一体水の確保はどうしたであろうか。彼方此方に井戸の穴が見えていたが、水源は井戸しかないようだ。しかし、３０メートル以上の深さの井戸は、掘ることが可能であるのか。可能にしても水があるのだろうか。城市の生活が継続されていたことが、事実であることを考えれば、何かの知恵があったことは間違いない。

交河城にあつた高昌国は約１００年間存続し、玄奘三蔵も此の地を訪れたという縁から、ウイグルの子供たちと記念写真を撮り、有名な故城を発つたのである。

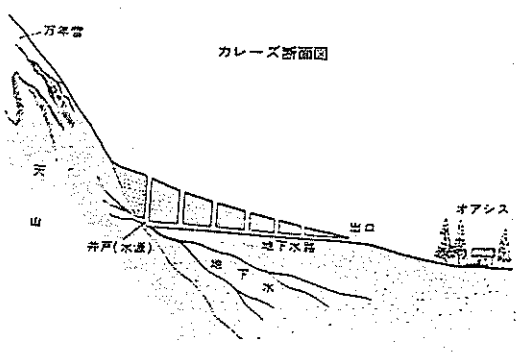
カ　レ　ー　ズ

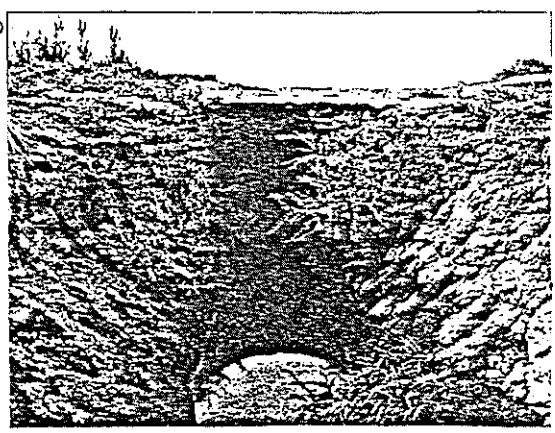
北に聳える天山は本日は見えない。天山の雪解け水によつて拓かれてきたオアシスの此の街は、天山とタクラマカンとゴビの間にあり、天山南路の入口を占める要衝だ。西域に進出しようとする漢民族と、いろいろな遊牧民族とが興亡を繰り返し、或は交流を重ねてきたが、交河の城市に対する説明不足は満足できない。ただ引率するだけでは小学生と同じだ。中国側の通訳と添乗員には、勉強せよと忠告して置きたい。

カレーズ見学の為にバスは北上し、綿花や高粱畑のある貧しい部落に到着した。しかし、水利があるからこそ作物を栽培し、羊も飼う事が出来るのである。

厳しい自然の中で生きるトルファンの人々は、極暑と酷寒の中で、聖なる山・天山の雪解け水を頼りに生きている。紀元前の昔から時代が変わり、民族が変わっても命の綱であり、水を制た者がトルファン盆地を征服したのであつた。

先ずカレーズの出口の所に案内された。清く透き通った水が地下に流れ、乾燥した地表では考えられない事だ。甘い味がすると云うから、手ですくって飲んでみたところ、柔らかみのある味がして良い水である





出口の上流に眼をやると、竪井戸の上部をコンクリートで固め、崩壊を防いだ穴が連続して見えていた。前頁の図に示すように、天山の麓から無数の竪井戸を横に繋ぎ、地下水をオアシスまで引いてくる地下水道である。地下道は夏は蒸発を防止し、冬は凍結を防ぐ最高の手段だが、莫大な労力がいるだろう。

トルファン郊外の道路を通過するとき、丁度お椀を伏せたような盛土が見えていたのは、井戸を掘ったときに放りだした土の山である。３０メートルくらいの間隔があるだろうか。人間の知恵の素晴らしさに驚嘆すると共に、我々に想像も出来ない貴重な水である事を教えていた。カレーズの水路は、トルファンだけでも３００余本も有ると云われているが、交河故城の水源も理解出来たのであつた。

古代シルクロードを行き来した旅人達ちが此の恩恵を被り、これからの長い将来にかけて、此の地に住まいする人の命の源泉は、聖なる山・天山なのである。（前頁の写真はカレーズの出口）

葡　萄　郷

見学を終わったカレーズの東の丘にある葡萄村は、旧人民公社のものであつたが、現在は民営のようである。高台一帯に葡萄畑が広大に伸びているばかりか、各農家の玄関は葡萄棚で覆われ、トルファン最大の灌漑用水が滔滔として水を流している。実に立派な大葡萄郷である。

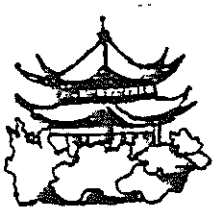
我々が案内されたところは乾葡萄用の農園で、テーブルの上に沢山の葡萄が盛られていた。時期が過ぎていたから、延々と続く葡萄棚には、僅かの葡萄しか下がっていない。最盛期を想像すると再びトルファンに来たくなるような光景が網膜に浮かんだ。日本に輸出して我々の口に入る葡萄も、此の界隈から出荷されているとの事である。また赤葡萄、種無し白葡萄など、品種は十三種類あるらしく、自慢の宣伝通り美味しいものであつた。

トルファンの葡萄の歴史は古く、高昌国時代の遺跡から発掘された絹にも、葡萄が鮮やかに描かれているという。先日訪れた酒泉の「葡萄の酒、夜光の杯、飲まんと欲して琵琶馬上に催す」と歌った詩の中の酒は、此の地で作った葡萄の酒であろう。又長安の人達の宴を飾った酒も然りである。

葡萄棚のトンネルを潜って行くと、煉瓦造りの建物が並んでいた。葡萄を陰干しにする乾燥小屋だ。小屋の横壁の煉瓦は一枚おきに外し、四角い穴が開いたようになつていて、寄せ木細工のような格好である。雨が降らない超乾燥地帯であるから、簡単な煉瓦の小屋でも立派な乾燥室になるのであろう。

沙漠の中の大葡萄郷は想像を遥かに越え、葡萄が「砂漠の真珠」と云われる田園風景を、十分に堪能したのであつた。

ポプラ並木のならぶオワシスとも別れ、街道を走る驢馬の姿を眺めながら市街に近ずき、白壁造りの多い町の中をトルファン賓館に帰館したのであつた。



トルファンの夜

自由諸国のような娯楽施設のない中国旅行の夜は退屈である。普通の内地ではサーカスとか曲芸とかのサービスが行われていたが、今回の過ぎた十日間は、その恩恵に浴した事はない。回廊の特殊事情もあることと諦めていたところ、夕食後、ホテルの二階で少数民族の踊りが催されると、案内があつた。

夕食時に冷たいビールを飲んで疲労気味であつたが、珍しそうに思われるウイグルの歌や踊りは、観光客の期待を引き寄せていた。観客は我々の日本人と白人数人の外は、中国政府高官が大多数である。其の高官連中の為に開催したのであろうか。

ウイグルの女性が美人であることは、書物か何かで読んだことがあつたが、実際に踊り子を拝見して、なる程だと感じたものの、薄暗くて残念であつた。街の中や農村では見られない美人さんは、選抜された少女達である。彼女たちは中国人とも違うようで、勿論西洋人とも異なり、腰のあたりまで黒髪を長く伸ばした姿は、日本人に親しみを感じさせる容姿であつた。

頭の上に男性の回教帽のようなものを被り、イヤリングやリボンを着け、裾をピンク色にぼかしたワンピースを着ている。その上に黒いチョッキをはおり、スラックスをはいていたが、どの少数民族かは説明がなく、勿論説明があつてもウイルグ語では判る筈はない。

踊り子の後方に十人ほどの楽隊が並んでいる。一人の女性を除いて、普通の服装をした男性ばかりだ。彼等は現地特製の弦楽器、管楽器、打楽器を抱え、近代楽器といえばアコーデオンしかない。

踊りの前には必ず女性の司会者は、中国語かウイグル語か分からないが、小さな声で紹介した。良く見ると昼間、我々の通訳を勤めた混血の女の子である。美人が化粧して一段と別嬪さんに見えた。彼女は昼夜を問わず多忙で、トルファンの国際旅行社の第一人者ではないだろうか。口上を述べおわり、裾を翻して帰って行く姿も仲々堂に入つたものであつた。

観光客の期待は大きく、盛んな拍手に迎えられた踊り子たちは、笑顔をつくって踊り、幾つかの踊りを見て気が付いたことは、彼女達の着ているワンピースの裾模様が、葡萄の実と葉の模様であつたことだ。トルファンのイメージは、天山南路の砂漠の町に過ぎないことだつたが、世界的な葡萄の産地である事を、踊り子までが宣伝していたのである。（上の写真）

踊りの最後を飾る踊り場は、観光客が入り混じり、日本人も白人も、それに政府高官たちを交えて輪をつくり、楽しく踊つていた。

シルクロードの要衝の地、トルファンを一日観光した印象は、中国という感じよりも、外国という感じが強く、哈密瓜を食べながら明日の観光を期待して、床に就いたのである。

十月十五日　　快晴　　吐魯番　泊

ベゼクリク千仏洞

朝食の隣の席は、中国科学院の高官連中で埋まっていた。自治区創立三十周年の祝賀を兼ねて、トルファン各地を視察に廻っているのである。後刻、何回となく各所で彼等と出会つて判明した。

日の出は八時。九時にホテルを出発してベゼクリク千仏洞に向つた。ウイグル語で千仏洞を「ミンゴイ」という。「ミン」とは千、「ウイ」とは室を意味し、千仏洞とは沢山の窟を指している。敦煌莫高窟も同じだ。

緑の並木を植えたトルファンの街を離れ、清々しい朝の太陽に向つて一路東方に走った。石ころの多い砂漠の中に、定規で引いたように直線道路が延びている。やがて左の方に、赤銅色に輝いた火焔山の山なみが、屏風を立てたように続き、道路の両側にはカレーズの竪穴が見えていた。

トルファンの市街から三十分、道は二つに分かれ、右に南下するとアスターナ古墓や高昌故城がある。我々は左折して進み、東西に連なる火焔山を横断し、一木一草も生えていない赤茶色の山路に入った。まもなくベゼクリク洞窟が、断崖の下に遠望されて来て、一番乗りの我々は崖の上の平坦な所で下車した。丁度、観光に絶好な火焔山の裏側に当たるところである。

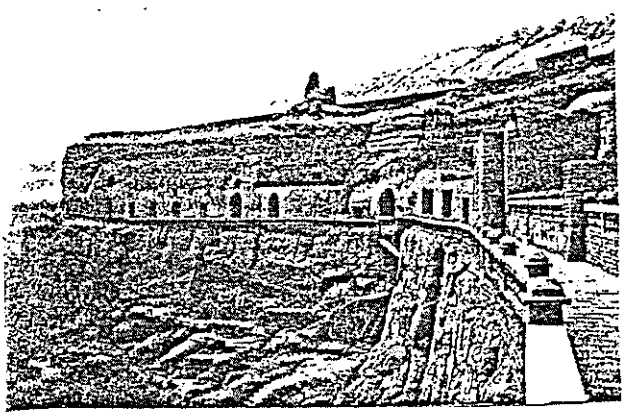
門を入って急な坂を下りて行くと、もう一つの門があり、そこからは平坦な道路となつていた。右手に見えているのが下の写真のベゼクリク千仏洞だ。

ベゼクリクは、天山山脈に源を発する小さな清流ムルトウク川の西岸、高さ５０メートルほどの断崖の中段にあり、南北３００メートル以上にわたつて掘られた石窟寺院である。窟の下に小さな家と少々の畑があり、その下にムルトウク川が流れていて、対岸も同じく断崖絶壁の山だ。

我々を見つけた管理人の少年は、崖下の家から駈足で登って来た。各洞窟には鍵がかかり、少年は鍵を外して一番奥から案内に誘導した。

この石窟寺院は、南北朝（４２０－５８１）から元代（１２６０－１３７０）にかけて造られたもので、大小五十七の石窟がある。ベゼクリクはウイグル語で「装飾された家」の意味で、壁画のある窟は二十窟ということであつた。

敦煌と同じく今世紀初め、スタインなどの外国探検隊によつて、大量の仏像が持ち去られて破壊が著しく、明代以降のイスラム教徒による被害も、大きいと云われている。



第３９号窟

仏像はなく両壁の壁画は非常に破損している。天井には千仏の壁画が残つていて、奥の壁の方には

割合によく保存されていた。この壁画は、仏の入滅を聞いて集つて来た人々を描いた図と云われている。

第３３号窟

幅３メートル、奥行１０メートルほどの細長いトンネル状の窟で、中には仏像はない。壁画も殆ど剥ぎ取られていた。

第２７号窟・・説明なし。

第１７号窟・・説明なし。

第１６号窟・・説明なし。

以上五つの石窟を順次に見学したが、何れも破壊が著しく、極く一部の壁画が見られる洞窟に過ぎない。生きた宗教の聖地或は道場であつた様子は、想像も出来ないようだ。最も古いものは隋代のもので、数としてはウイグル時代の物が多いといわれる。

これらは七十年ほど前に、ドイツ探検隊やイギリス探検隊によつて持ち去られ、廃虚同然の洞窟となつてしまつた。そのような外国探検隊の所業は許されないと云うのは、今になつて見れば当然だ。文化遺産や遺跡は、本来は其の土地において保存すべきだという意見も、現在では正当である。

しかしながら、文化遺産や芸術、美術品でも、それを大切に保存する人が存在して始めて、守られるものである。守る人が居なければ荒廃する一方だ。

トルファン地区は、古くからイラン系の住民の中に、漢人が移住して高昌国ができた。その後、唐が高昌国を滅ぼし、一世紀後にはウイグル人が移住して王国を造り、十三、四世紀には元の支配を受け、十八世紀に清（乾隆帝）の勢力下に入ったが、約１０００年の間は中国の直轄支配が及ばなかつた。即ちウイグル人の国であつた。

外国探検家がやつて来た今世紀初めには、此の地方が清の支配下にあつても、この地の仏教遺跡や遺品を、保護する力を持たなかつたのである。清の役人たちは此の仏教文化を守る意識もなかつた。仏教は中華思想の産物でないからであろう。

仏教文化を作りあげた住民はイスラム教徒に変わり、仏教は忘れられてしまつた。それ以上に仏教寺院の壁画や仏像は、偶像をきらう住民の破壊に任せられていた。忘れられていた古い仏教文化を発掘し、遺跡を調査して、運ぶことの出来る遺品を取り出したのが、西洋や日本の探検隊であつたのである。

これらの事を考察すると、何れが正当であったか、疑問の残る事である。我が日本においても、我が国の文化遺産が、どれほど海外に流出したか、其の数は莫大な数になるかも知れない。終戦時、私などの持っていた名刀がイギリスに没収されたことも、其の一例である。日本人としては不可抗力であつたが、安い代価で買われて行った物も多いだろう。買われて行ったことは即ち、国内に留めておく力が無かったからだ。明治初年の排仏の時や、終戦後の混乱の間に、仏像や美術工芸品が海外に流出した事は事実だ。ベゼクリクには誰も管理する人がいなかつたから、今日のような結果になったのではないだろうか。

廃窟に近い洞窟の見学を終つて急な坂道を登っていくと、幾日間も我々と同じコースを辿り、顔馴じみとなつた白人たちは、笑みを浮かべて挨拶を交わしていた。旅は友好的な雰囲気で交わる最高の成果である。しかしながら、中国科学院の高官たちは無愛想であり、外国人に対する日本の人々も、白人さんのような態度を学ばなければならない。

高　昌　故　城

ベゼクリク千仏洞から元きた道を戻り、高昌故城へと南下した。十一時の太陽は四十五度の高さまで昇り、故城の最高の丘の上に立つと、風速１０メートルほどの風が吹いていた。昨日と打つて変わった雲一つない快晴は、火焔山連峰を明瞭に望遠させてくれた。またムルトウク川の水を利用した下流の部落の、野菜を栽培した緑の帯も手に取るように見えていた。

遺跡は巨大な粘土か日干煉瓦の塊ばかりで、中央のところが宮殿の跡だと説明があつたが、宮殿と想像することも困難である。全くの廃虚で復元したものと思われる。円型の塔のような煉瓦造りが見えていたが、仏塔であろうか。城を取り囲む城壁の跡だけが高く残り、其の中の一部は畑となつていて、羊が放牧されていた。（下写真）

交河故城と異なり、地上に造った建物は煉瓦造りのために、風化による崩れが甚だしく、東西１、４キロ、南北１、５キロの正方形の王城は見るも無残な姿であつた。

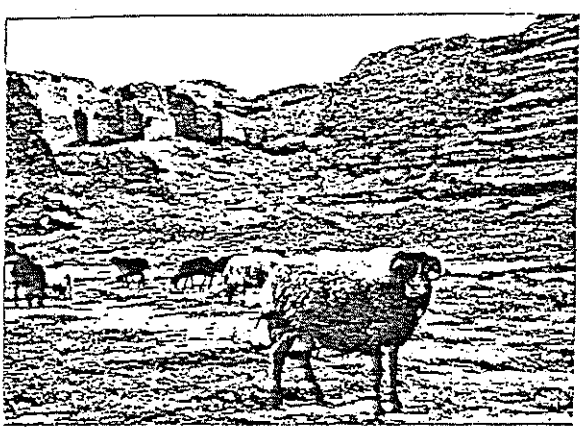
高昌の歴史を振り返ってみると、前記した通り紀元前１世紀、前漢は此の地に砦を築き、屯田兵を置いた。それ以前からイラン・インド系の住民が居たといわれ、以後漢人が移住して定着し、河西の前涼は３２９年に高昌郡を創設した。その後は漢人によつて保持されて、北涼が漢以来対峙していた車師国を併せて高昌国を建設した。（４５０）この高昌国には漢人の王が立てられ、麹氏高昌国は５００年頃から６４０年に唐に滅ぼされるまで続いた。以降、西州として唐の直轄地となつたが、八世紀の後半にチベット族とウイグル族との争奪の地となり、ウイグル族の支配下になつた。後にモンゴルの支配を受けたこともあつたが、イスラム勢力が支配し、十八世紀に入って清の勢力下となつた所である。

高昌故城といえば、玄奘三蔵を抜きにする事は出来ず、記述して置きたい。（２１頁地図参照）

６２９年、インドに求法の旅に出た玄奘は、蘭州・涼州（武威）・瓜州（安西）・伊吾（哈密）を通り、高昌国入りを果たした。（この間の事は前記済みで省略）

国法を侵して玉門関を出た玄奘は、上に飛鳥なく下に走獣なし、とまで云われたゴビの砂漠を、不撓不屈の気力で踏破し、二日後に伊吾に着いて漸く危険を脱した。

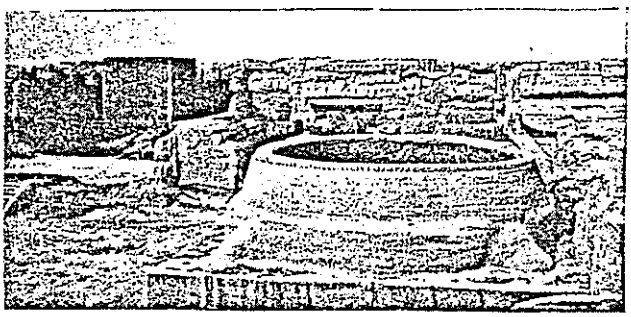
伊吾国王は高昌に臣属しており、玄奘は其の王宮で高昌国王「麹文泰」（きくぶんたい）の使者と会見した。この使者が帰国して法師の事を報告すると、麹王は直ぐに使者を伊吾へやり、辞を低くして玄奘を招いた。



玄奘は伊吾から先は、天山を越えて天山北路を西に向かう予定で、高昌を通る積りはなかつた。しかし、駿馬数十頭の行列を整え、礼を尽くして迎えられては拒む訳にも行かず、進路を変更したのである。

玄奘を見た麹文泰は永住を奨めた。数千人の僧が此処に居るが、これらを

貴僧に師事させたいと云うのである。しかし、玄奘はインドに赴いて仏法を極め、経典を入手する事が目的であるから、勿論固辞した。高昌国王は或は懇願し、或は威嚇し、或は情にからませて、その心を動かそうとした。毎日、自ら食事の給仕までもしたと云われている。



これに対して玄奘は絶食して対抗した。断食四日、玄奘の気力の漸く衰えたのを見た国王は、やっと引き留める事を断念したが、その代わりに二つの条件を出した。一ヵ月出発を遅らせて、般若教を講義することと、インドからの帰途に三年間、ここで供養を受けて貰いたいというのである。玄奘はそれまでも拒否することは出来なかつた。

一ヵ月がすぎると高昌国王は、特に四人の僧を玄奘の従者として与え、法服三十着を新調し、頭巾、手袋、靴など数多くを揃えて贈り、別に黄金一百両、銀貨三万枚（ペルシャ帝国のもの）、綾絹五百疋などを、インドへの往復二十年間の旅費として寄進し、さらに馬三十頭、人夫二十五人を添えた。

又これから先の最大勢力者である西突厥（とつけつ）の大王の本営までは、一人の高官を送らせ、別に沿道二十四か国の王たちには依頼状を書き、一通ごとに綾絹一疋を添えたが、西突厥の大王には綾絹五百疋、果物二車を贈ったと云う。

玄奘の出発の日は、国王は高僧を率いて城のはずれまで送り、玄奘を抱いて大声で泣いた。それでも別れることが出来ず、さらに数十里もついて来てから、漸く王宮に引き返した。しかし、これが麹文泰と玄奘の最後の別れとなつた。インド滞在を終わって帰国の途に就いた玄奘は、すでに麹文泰が６４０年に唐の攻撃を受けて、煩悶のうちに急死し、高昌国も滅亡した事を聞いたのであつた。（上の写真は故城の一部）

ア　ス　タ　ー　ナ　古　墳

高昌故城の直ぐ北側にあるアスターナ古墳に移動して、休憩所で下車した。古墳は学校の広い校庭のように、平坦な敷地となつていて、二、三十の土盛りが見えていた。墳墓である。

アスターナとはウイルグ語で「休息の場所」の意味で、三世紀から八世紀にかけて造られた約五百の墓は、乾燥度が高く保存状態が良好である。

これらの古墳は高昌国の貴族の古墳群で、今世紀の初頭には外国探検隊が、開放後は中国が発掘調査して、貴重な多くの出土品が得られ、また漢文やウイルグ語の沢山な文書も発掘されて、トルファン地区の歴史や社会を知る上で、重要な資料となつているという。

先ず最初に案内された墓墳は、幅１、５メートルほどの急斜面な墓道の坂を下り、地下５メートル以上の深さのある墳墓であつた。入口の木の扉の中に入ると、奥の墓室は八畳間ほどの広さで、その手前の左右に小さな室がある。奥の室の正面の壁には

壁画が描かれてあつた。画面は屏風のように六つに区切られ、中央に左から玉人、金人、石人、木人と名付けられた人物が描かれ、これらは儒教の教えを描いたものである。

次ぎに案内された墓墳には壁画はなく、夫婦のミイラが安置され（右写真）、頭を北にして上を向いている。奥が女で手前が男という事であつた。

唐代の漢人官吏の墓だといわれる二つの墓墳には、仏教を表す何物もなく、その点は不思議だと感じながら見学した。

休憩所で哈密瓜の御馳走が出たが、飽きる事のないほどの味は格別だ。建物の横手に未だ青い瓢箪が五本並べてあった。農夫の人に分譲を頼んだところ、実が熟していないから駄目だという返事である。押さえてみると、柔らかくて凹んでしまう若いものであつた。これでは問題にならずと諦めたが、私と同好の人が存在した事は悦びに堪えない。瓢箪は別名を「ふくべ」と称し、幸福の象徴であるからである。

火　焔　山

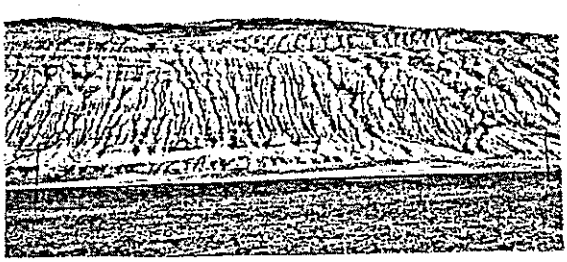
火焔山は炎熱の地、トルファンの代名詞と云われるほど有名である。トルファン盆地の北端に、長さ約１００キロにわたって連なる山なみで、現地の人は「赤い山」と呼び、最高峰８５１メートルの文字通りの赤い山肌である。

現在は年間雨量１６ミリという超乾燥地帯だが、太古の昔はよく雨が降った。その雨水の流れた跡が、山肌に荒々しく屈折した皺を刻んでいる。日中、気温が４０度をこえると、辺りの地表は６０度を越え、山肌の赤い皺は陽炎（かげろう）で、炎のように揺らめくのである。

何回か眺望した火焔山の中で、最も皺の凄い正面で停車した。すごく平坦な砂漠の端に、垂直に近い角度で山が切り立ち、其の皺は火焔の燃える姿にそっくりだ。本当に誇張ではなかった。

道路から山裾までは１０００メートルはあるだろうか。砂漠の石ころの上を早足で近ずいて行った。益々火焔の皺は大きく網膜に映り、造化の神が造った絶景は、恐怖心を感じさせて来た。数枚の写真を撮る。（下の写真）

広大な中国大陸では、風雨に侵食された皺の多い山肌は、各所で見ることは出来る。河南省一帯の山も黄土層の為に、これに類したものは見掛けたが、これほど凄味のある赤銅色の山肌は初対面であり、比類なき景勝、否、絶勝である。



漢の時代から「火州」と呼ばれた由来も、火焔山からであろう。

明代に書かれた架空の物語り「西遊記」に、玄奘と火焔山や、トルファンの暑さを示す格好の話が書かれている。其の一部を記載する。

西遊記「三蔵法師、火の海・火焔山に到着」

或る日、確かに季節は身も凍るような冬のはずなのに、辺りが焼けるように暑い所にやって来ました。此の暑さで一行の咽喉はからからです。それでも足をふらつかせながら歩いて行くと、或るところに、何から何まで赤色に塗つた一軒の農家が目につきました。其の家には一人の老人が住んでいました。

三蔵法師の命令で、悟空はその老人に話しかけようとしました。老人は、猿の顔をして人間の格好をした悟空を見るなり、ギャッと驚きの声をあげました。が、悟空は優しい声と丁寧な言葉で、「おじいさん、私達は西方へ経を求めに行く者です。この土地は、まるで焼き殺されるように暑いですが、一体どうした訳なのですか？」と尋ねましたので、老人は安心して話し始めました。

「ここは火焔山と言って、春も秋もない。年中暑いのですわい」

「すると西へ行くのも、仲々大変な事だろうね」と三蔵は聞きました。「はい、それはもう。周りは火の海で、西へはとても行けませんよ」と老人は気の毒そうな顔をして答えました。

丁度その時でした。表を一人の餅売りの男が通りかかりました。悟空は自分の頭の毛を一本抜き、それを銭貨に変えて餅を買いました。そして不思議そうに「こんなに暑くて草一本生えない土地に、なぜ餅になる粉があるのだ？」と餅売りに聞きました。餅売りは言いました。翠雲山というところに芭蕉扇を持つ人がいて、その扇で一あおぎすれば火は消え、二あえぎすれば風が起こり、三回あおげば雨が降ります。その時に種を蒔くのです」。悟空に一つの名案が浮かびました。

「羅刹女（らせつにょ）と悟空の対決」

火焔山の火を消す事の出来る芭蕉扇を持っている者が、住むという翠雲山には、一つの大きな洞穴がありました。悟空がその洞穴の前に立つと、中から一人の美しい娘が表れました。悟空はその娘に言いました。

「火焔山の火を消して西方へ行きたいのです。どうぞ芭蕉扇をお貸しください」。

ところが、この話を聞いた洞穴の主人は、娘を押し退けて悟空の前に立ち「悪猿め、とうとう来たか」と物凄い形相をして怒り出したのです。実は、この洞穴の主人というのが牛魔王の女房、羅刹女で、悟空にうらみを抱いている者だつたのです。羅刹女は、もう我慢ならないとばかりに悟空を扇であおぎ、五万里も離れた山の上まで飛ばしてしまいました。

このままでは、悟空には勝ち目はありません。悟空は考えた末、身を揺すつて一匹の「うんか」に化けました。そして、羅刹女の飲むお茶の葉の陰に隠れて、羅刹女の腹の中に入り込みました。

悟空は羅刹女の腹の中から「扇を貸して下さい」と叫んだり、腹を蹴飛ばしたりして暴れました。すると、さすがの羅刹女も、「痛い痛い」と地面をころがつて苦しみ、金切り声を上げだしました。

悟空は、苦しみもがいた末、すつかりおとなしくなつた羅刹女の口から飛び出て、扇を手に入れると、三蔵法師の所にまっしぐらに帰りました。もちろん法師様は大喜び。悟空は、早速手にした扇で、ふわりと一あおぎしてみました。すると、なんとした事でせう、山の火は消えるどころか、百倍にも燃え上がったのです。

「しまった。奴にはかられた。法師様、この扇はまっかな偽物です」と悟空は口惜

しがりましたが、時すでに遅く、本物の扇は大王力という者の所にあつたのです。

「火焔山の火を消す」

火焔山の火を消す扇の偽物を、羅刹女につかまされた悟空は、悔し涙を流しながらも、本物を持っている大力王の所を訪ねることになりました。実は大力王とは、羅刹女を捨てて、玉面公主という女姓と再婚し、積雲山の摩雲洞に住む牛魔王なのでした。悟空は、その妻の玉面公主に「牛魔王を呼びに来た。どこにいるのかな」と聞きました。すると、悟空のことを、夫の昔の女房の使いだろうと誤解して、耳の付け根まで真っ赤にして怒りだしました。それを見た牛魔王はカッと怒り、表に飛び出して「無礼者、出てこい」と悟空に向かって大声を出しました。

悟空は「火焔山の火を消すために扇を借りに来たんだ」と話しましたが、牛魔王は承知しません。二人は大格闘となりました。ところが、格闘の最中に王は、「ちょつと待て。わしは今から宴会に行かなくてはならん」と言い、姿を消してしまいました。この時、悟空に一計が浮かびました。悟空はまんまと牛魔王に化け、牛魔王の昔の妻の羅刹女の居る翠雲山に戻り、「奥よ、暫くだったなあ」と羅刹女の前に立ったのです。悟空が牛魔王に化けているとも知らぬ羅刹女は大喜び、「ほれ、扇もこの通りここにある」と言って、杏（あんず）の薬のような物を口から吐きだしてよこしました。

悟空は化けているのも忘れ、「これで火焔山の八百里の炎が消えるのか」と言ってしまいました。「あら、あんたったら、玉面公主みたいな小娘とうつつを抜かして、頭までイカレたのかい」と化けた悟空に気付くふうもなく言いながら、「スーシュイハーシーシーチュイホ」とおまじないをしました。小さな扇はたちまち一丈二尺にふくれました。悟空は其のおまじないを覚え、三蔵法師様の所に帰りました。そして、火焔山の火を消すことが出来たのである。

下の写真は火焔山を背景にした一行の記念写真である

1985. 10. 4発 「河西回廊と天山北路の旅」

額　敏　塔

火焔山で記念撮影を終わった一行は、トルファン賓館に帰って昼食をとり、午後三時半から再び観光に移つた。

バザールに三十分ばかり立ち寄つた後、トルファン博物館に案内された。極く小さな博物館である。自治区の出土品の主力は、区都のウルムチにある区立博物館に展示されているとの事である。此処の中で特に眼についたものは、漆を塗つたようなミイラであつた。超乾燥地帯のために、燻製にしたようになり、真っ黒になつた裸体だ。但し、衣類を纏ったものは普通のミイラの肌色をしていた。これらのものはアスターナ古墳から出土したものである。

続いて訪れた所が額敏塔（えみんたー）であつた。ポプラ並木が続く埃つぽい道路を走り、トルファンの街をはずれると、両側の畑には黍が良く育ち、果樹もつくられ、日干煉瓦の葡萄の乾燥小屋が散在していた。矢張り葡萄の里である。

そのうちに額敏塔の高く聳える塔が、綿花畑の向うに見えて来た。天に通じるという意味を持つ塔の高さは４４メートル、イスラム教徒のシンボルだ。

エミン・ミネート・モスクの玄関を入ると、奥はがらんとした土間で、天窓から陽の光が差し込み、広間にはアンペラが敷いてあつた。貧弱とはいえ、西の方、メッカに向かって祈りを捧げる神聖な場所である。

広間の南側の壁に石碑がはめ込んであった。恐らく此のモスクの由来が刻まれているのだろう。乾隆四十二年の文字は見ることができたから、多分１７７７年に額敏を記念して建立したものと推察する。

清代にも幾度かの動乱が起り、新彊も清の支配下にあった。清朝からは伊犂（いり）将軍が駐屯し、北方は軍政を敷いたが、天山南路は藩王の自治を認めていた。トルハン盆地には吐魯番郡王がいて、清朝からは監督として領隊大臣が派遣されていた。

清の乾隆帝が西域を手中にするに当たって、額敏は清に味方して、その業を助けた為に存続が認められたのである。

額敏は宗教上並びに政治上の支配者であり、吐魯番郡王であった。その彼が建立した回教寺院が、此のモスクである。モスクの南側に前記した塔が聳え、内部には螺旋階段が設備されている。各段の高さが非常に高い階段を、汗を流しながら頑張って登った。トルファンの最後の観光地だからである。４４メートルの頂上には四方に窓があり、トルファン・オワシスが一望のもとに瞰下する事が可能だ。見渡すかぎりに畑や木立が続き、東南方に遺跡らしい影も眺望することが出来た。塔から降りてくると又、哈密瓜のサービスが待ち受けていた。明日はウルムチだから、これが最後だと味を噛み締めて、一息入れたのであった。

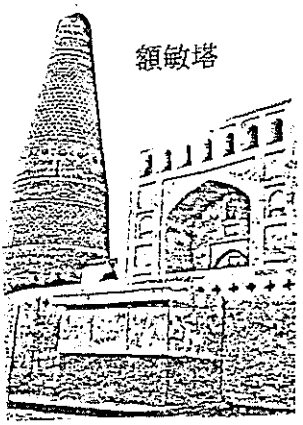
休憩の合間に添乗員は「新彊」の意味について説明をした。新彊は各人種の戦いの場となったことから、「新しい町」という意味であると。

実は、私も出発前から関心のあった字句で、「彊」という字は「強」の原字であるから、新彊は新しい強い民族、即ちウイグル人を指して其のように表現したのではないか、と考えていたところだつた。勿論、自信があっての私見ではない。後日良く調査したいと思いながら、トルファン賓館へと身を任せたのである。

多くの歴史を学んだ二日間の日程も、光陰のように過ぎ去り、トルファンの深い想い出として、瓢箪型の七宝焼をホテルの売店で求めて、名残を惜しんだのであつた。

十月十六日　快晴

トルファン－ウルムチ


額敏塔

琉球王が薩摩藩の支配下に置かれながら、支那（中国）にも朝貢していた事を考えると、常に累卵の危機に立たされていた小国・高昌国の心情には、同情に似た愛着心を感じた。其の歴史の流れを受け継いだトルファンは、去り難い想いがしたのである。

ホテルを九時に出発した時の旭日は、東の砂漠の地平線より僅かに昇り、今日もまた快晴に恵まれたようだ。雪を頂く天山の連峰は望遠できないまでも、天山を越える夢は玄奘に劣らず、霊峰の向こうの世界は、別世界のように憧憬を感じるのであつた。

北進する地形は相いも変わらず、飛沙走石といわれた白の石ころ砂漠である。道路の両側には、見馴れたカレーズの竪穴が蜒蜿と彼方まで延びていた。車窓からの眺めに注視して、本日も小型マイクロバスの激震に耐え、１８３キロ、三時間半の悪路を突破するかと思うと、些か気が塞ぐようでもあつた。

約三十分を過ぎたころ、東方の天空から、天山の峰が朝もやの中に、ぼやけるように映っていた。進行するにつれて、強い直射を受けた白雪は峻厳さを増し、神仙の棲む神秘な容姿を見せていた。

草木さえも皆無の手近な山は、砂と砂岩のような感じで、単調な砂漠と相俟つて極めて殺伐だ。緑に包まれた日本の素晴らしさに感謝しながら、北に急いだ。

一時間を経過して砂漠を通過すると、近ずく谷間に一本の道が屈曲して上っていた。山肌は火焔山に負けず劣らずの地隙をつくり、陰となつた黒い部分は山の険しさを物語り、赤茶げた峡谷風景は日本ではお目にかかれない。

地図をひろげて位置を確認した。東方は博格達（ボゴダ）山脈、西側はエレンハビルガ山脈で、いずれも天山の支脈である。我々は二つの山脈の渓谷を上っている。

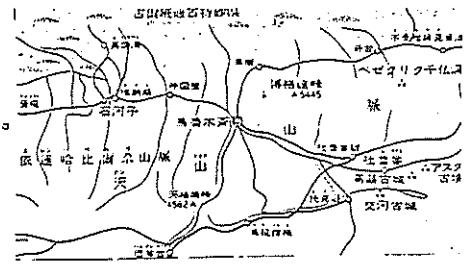
坂道と並行して南に流れる川は、有名な白楊河だ。トルファンの西を通ってアイディン湖に注いでいる。珍しく雑草の生えた中州に羊の群れが表れた。草は水を求め、羊は僅かの草を求め、無人と思われた天山峡谷にも、住民が居たのである。人間の無限な生きる力は驚嘆というべきか、想像を越えたものである。

標高が高くなるにつれて、川の瀬の草木は紅葉し、山肌は黒色に変貌して、重壮な感じがして来た。乗馬の少年が十数頭の驢馬を引き連れ、山を降りてきた眺めは、シルクロードの隊商を彷彿させてくれた。いよいよ秘境に入ったようだ。

しかし、それも束の間、峻険と思っていた隘路は暫くの間に過ぎ去り、平らな草原が眼前に展開した。想像していた険しい峠もなく、幅１０００メートルにも及ぶ盆地には、群れをなした羊が自由に遊び、蘭新鉄路も走っていた。今になつて思うと、渓谷の写真を撮る機会を逸した事は、誠に残念と言わねばならない。

トイレ休憩の為にバスは停車した。達坂城跡が遠望できる絶好の地だ。達坂城の由来は知る術もない。唐代以外は中央の支配外だつたウルムチ盆地は、匈奴や突厥、ウイグル族の争奪の地であつた。清朝に移って叛乱鎮圧のために屯田兵を配置したが、

其の時代の城であろうか。地図上から判断すると、トルファンーウルムチ街道とウルムチー哈密街道の交差点で、交通の要衝であることは疑いなく、軍政上の戦略からも拠点であつた筈だ。



タクラマカン砂漠の南北を通過するシルクロードは、苛酷な道であった。だから天山北路のシルクロードは重要性をおび、絹馬交易を華やかにした理由も、窺い知る事ができた。

達坂城跡の延長線上に、５４４５メートルの名峰「博洛達」が、下界を睥睨して聳えていた。１９８０年に外国人登山家に開放した八山の一つで、日本からは１９８１年６月９日、京都山岳会が初登頂した山だ。

万年雪を眺めながら十五分ほど進行して、達坂城の部落に到着した。行列をなしたトラックは疲れを休め、マーケットまで開かれた峠のオワシスである。小川は結氷して銀色に光っていた。しかし、澄み切った青空からは陽がさして、身にしみる寒さは感じない。このオワシスから眺める壮大な天山は、嬉しいことにつけ、悲しいことにつけ、古代から多くの人に詠まれた事だろう。今は日本の我々を楽しませてくれた。

（下の写真は達坂城部落のマーケット）

オワシスで小休止した後、再びウルムチへと急いだ。西側一杯に大塩湖が幾キロとなくつづき、大製塩工場が見えて来た。当自治区全体の塩は、あの工場で賄つているそうだ。１２００メートルの高地に塩の恵があるとは、天地創造の神に感謝しなければならない。

農民の住居もトルファンとは進歩して上等だ。煉瓦積みの煙突が各戸の屋上に林立し、酷寒の満州を想い出させてくれた。農地も亦、大耕地に開拓して、牛馬や羊の数は一段と多く、南に比較して裕福そうである。北からの湿気を天山で遮り、雨を降らせて水が豊富な証拠である。

哈密瓜を満載したトラックが横転し、道路一杯に散乱した瓜は、我々にとっては垂涎の的であつた。勿体ないと横目を使いながら通り過ぎると、羊の大群が路面を閉鎖して、一時停車を余儀なくされた事も、異国情緒の一つであつた。

長い間、正午の時報やニュースを耳にした事がなく、豊かな生活をする日本人にはニュースは欠かせないものだ。正午を過ぎて、やがて三十分もすればウルムチだと、腰の痛みを我慢すると、突然、西の方にも天山の峰が眼底に反映して、いよいよウルムチ近しの響動を胸に感じた。

山麓にある工場の煙突は、純白冷厳な山なみを背景にして、白煙や黒煙を吹き上げていた。ウルムチ地方は石炭の宝庫という事だつたが、発掘されない無尽の資源が埋蔵しているのではなかろうか。新彊ウイグル自治区は中国の核爆発実験場であり、遠隔地である事を考えると、天山は資源の宝庫に間違いなかろう。

達坂城から続いた大平原は、此の辺から極端に急変して急な下り坂となり、峡谷に沿った豊富な水の流れは北に向い、視界に映る樹木は繁茂し、

其の様相は天山南路と雲泥の差だ。森羅万象に及ぼす気象の影響は、計り知れないものがある。

予告の通り三時間半の山越えも終わり、大都市の高層建築物の建ち並ぶ中を、漸く烏魯木斉（ウルムチ）のメンストリートにある華僑賓館に到着したのであつた。

新彊ウイグル自治区に入つてトルファンに二泊し、大砂漠地帯から天山を越えて痛感した事は、中国政治の困難性である。どれほどの国家予算を投入しても、広大な大自然の改造は不可能に近く、日本列島改造論などは歯牙にかけるにも足りない。本春イスラエルを訪れた時、イスラエル政府が最優先課題とした、ヨルダン川西岸の砂漠の緑化政策を見学したが、猫の額の面積に過ぎず、日を同じくして語るべからずだ。

開放前の新彊省から新彊ウイグル自治区と改称した事を、現地を踏破して具に考えると、中央政府としては処置なしの構えで、自治区という美名のもとに、適当にやってくれ式の、投げ槍の構えのように思えてならない。同化力を誇る漢民族であつても、遠い辺境の少数民族を、同化してまで支援する事は至難の業だ。

漢・唐時代から清朝にしても、点と線を支配したに過ぎず、蒋介石支配下にあつても、話題にも上がらない地域であつた。老獪な中共政府は、歴代王朝などと異なる点を指摘して、自治区という甘言で誤魔化し、反対に宝の資源を搾取しているのではないだろうか。他に多くある自治区（省の下にある自治県を含む）にしても、辺境の地ばかりで、しかも、少数民族の居住区である事を考えると、私見も一つの見解かも知れない。何れにしても中央政府のお荷物には違いない。

１９６４年から、タクラマカン砂漠（新彊）のロプノールで、核実験が開始されて以来三十回にも及び、これに抗議する少数民族の三百名の学生が、最近北京で反核デモを行った。又、西安やウルムチに於ても少数民族の学生数千人が、絶対多数の漢族支配に対する不信と反発に端を発し、抗議デモを実施した。これらの目的が、地位の向上にある事を無視してはならない。

ウ ル ム チ の 概 要

中国最大の自治区である新彊ウイグル自治区の区都で、天山山脈の名峰「ボゴダ」峰の西方に位置し、人口百三十万の西域最大の都市である。

先史古代より遊牧民とオアシスの集落で、天山北路の要衝であつた。十世紀頃からウイルグが支配し、十三世紀にはチンギス汗の征服となつたが、名のある町ではなく、十八世紀の中頃に、清朝が此の地の反乱を鎮圧して屯田兵を置き、城を築いたことから、ジユンガル盆地の中心として栄え始めた。

自治区全般としては、十六世紀頃から中国の勢力下になったものの、十八世紀後半から英・露の勢力が侵入し始め、１８７７年に清朝の支配権が漸く確立した。第一次大戦後はソ連の影響を大きく受け、ウルムチを省都として中ソ貿易が盛んとなり、第二次大戦後もソ連の援助で水利・交通等が開発されたのである。地下資源は金・銀・鉛・石油・石炭等が豊富で、その他、皮革・羊毛・絹の産地でもある。

ウルムチは唐代は「輪台」、清代は「迪化」（テキカ）と呼んでいたが、その後、烏魯木斉と改称された。ウイルグ語では「美しい牧場」を意味するが、漢語では「闘争」を意味している。史実としては乏しい町である。

市内には多くの高層建築が建ち、防砂用のポプラ並木が三、四列に並び、其の間を透明なウルムチ用水が流れている。１９４９年に中共政府が成立し、１９５５年に民族の自治を尊重して自治区に移行し、去る１０月１日に３０周年を迎えたのであった。記念式典には日本の国土庁長官を始め、米・ソ・アフガニスタン等の代表が列席したという。

７８頁に記した「新彊」の由来を調査した。女真族が中国の覇権を獲得して「清朝」（１６３６）と称してから、自分等の出身地を「満州」と名付けると同時に、此の地方を「新しい領土」という意味から「新彊」と呼称したのである。此の意味から、現在の「雲南省」も亦、「新彊」と呼称した時期があつたと言われている。

国家統一を成し遂げた満州族（女真族）の多くは北京に駐屯したが、各地の主要な拠点に配置された者も居た。其の一つがシルクロードの要衝の地であつたのである。

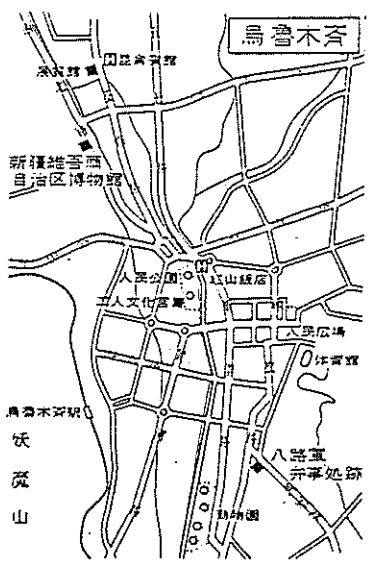
新彊地区に配置された満州族は、清朝が倒れてからも、シルクロードの民として其の地に定住し、その子孫が今日でも少数民族として居住している。最も悲劇的なケースは、乾隆帝（１７１１－９９）が三万の軍を辺境の地に派遣しながら、彼等のことを忘れたと云う悲劇であつた。

清朝は少数の満州民族が、多数の漢民族を支配しなければならなかつた。その為に次第に漢化され、漢字を使用することに慣れて、満州語を忘れてしまったのである。

満州族の一族といわれる「シボ族」も同じような運命をたどった。新彊の辺境に残された彼等は満州語を受け継ぎ、幻の言葉となった満州語が、ウルムチでは未だ生きているのである。実に中国は広く、その上に民族の歴史は興味が尽きない。

新彊ウイグル自治区博物館

我々の宿泊する事になつた華僑賓館は、三十周年記念行事の一環として、十月一日にオープンした高層建築である。しかしながら、暖房は十一月一日にならないと入れない規則のために、室内に居りながらオーバーを着用しないと、寒さに耐えられない始末だ。



地図を開いて緯度を調べると、旭川よりも北に当たる北緯４３度である。その上に９２０メートルの高地の温度は真冬と同じだ。朝は氷点下３度、日中も５度以下だという。全く待遇の劣悪には驚いたが、抗議する事もできず、辛抱するだけであつた。

最初に案内された自治区博物館は、ホテルからビルが建ちならぶメンストリートを通り、右手の紅山を過ぎて直ぐ左側にあつた。

大きなドームを頂く平屋建が、広い敷地に堂々として建っていた。イスラム寺院のようだ。パンフレットを読むと、１９５３年に西北博物館として設立し、１９５５年、自治区成立と共に自治区博物館と改名している。

正面入口から右側は、原始時代に始まる各時代のも

のが展示され、左側は少数民族の生活様式が展示されている。

先ず右側の展示場に入った。社会主義国専用の年代の分類が、原始社会、奴隷社会、封建社会、半封建半植民地社会時代とに分けられ、我々と違つて若干不自然に感じた。

原始時代（新石器時代）の展示場には、３２００年前の中国最古と言われるミイラを始め、前漢時代のタクラマカン砂漠で発掘したミイラ、唐代の高昌左衛大将軍「張雄」のミイラ等は、珍しいものである。

奴隷社会の展示場には、一束絲（シルク）は馬十一匹に相当し、五人の奴隷と同価値と、書かれていた。人間は絹や馬よりも以下であつたようだ。３０００年前の青銅器も貴重な展示品の一つであつた。

封建社会の展示場では、漢の張騫の絵が特に眼に留まった。唐代から南北朝時代のものが多く、唐代の中国領土図では、ソ連南部の殆どが中国領土のように示してあつた。支配の権力が及ばなかった土地までも、領土だつたと図示している点は面白い。

元・明・清時代のものでは、目新しいものはない。ただ清（１６１６－１９１２）の領土の中で、沿海州は瑷琿条約で清とソ連が共有し、その後の北京条約でソ連領となつた事には全くふれずに、清代領土として掲げてあつた。又、沿海州ばかりでなく、樺太までが清の領土に含まれていたのには、驚きと憤りを感じたのである。

樺太（サハリン）の歴史は１４５３年、酋長の銅崔台が、瓦硯を蠣崎信広に献上したのが始まりで、１６３５年に日本人が最初に上陸して以降、数度の探検が行われ、１８０７年に幕府の直轄地となり、間宮林蔵が探検したものだ。日本の領土であつた事は歴然としている。

１８６８年に明治政府が開拓使を開設し、１８７５年に露国（ソ連）と樺太千島を交換し、１９０５年にポーツマス条約で、北緯５０度以下を日本領としたのである。歴史を歪曲して自国民に教えている事には、抗議の一つも言いたいところであつた。

半封建・半植民地社会時代は、孫文を中心としており、近代中国のことは共産党の宣伝に過ぎず、余り興味のあるものはない。

我々が過去に見学した中国内地や台湾の博物館は、中国文化の粋を集めたものであつたが、此処は西域地区の限られた出土品や模写、写真が主で、中国文化の大きさと古さを感じさすものは少ない。矢張り辺地のものばかりだ。出色と思ったのは、前日に見学したアスターナ古墓出土の副葬品の類と、写本の断片ぐらいではなかろうか。

入口左側に展示された自治区の現状を示す会場では、少数民族の数の多い事が注視の的となつた。回族に始まり、カザック、モンゴール（約５０万）キルギス、カルカス、タジク、タタール、ウズベック、タプール、シボ、ロシア、満族など、十三民族が居住していて、各民族は衣装から生活様式まで違っている。

全館を通じて漢語とウイルグ語で表示し、多くの小学生が参観している事を見ると、少数民族の教育資料としているようだ。

現在でも、それぞれの民族の学校は異なり、放送局も五つの文字と五つの言葉で放送し、少数民族の博覧会場のような所である。

博物館の訪問とウルムチの記念として、玉の瓢箪を売店で購入し、館を去つたのである。

トルファン、アスターナ古墓出土の「伏羲と女媧」

絨 毯 工 場

次いで訪れたのは絨毯工場である。通訳は外貨獲得の一役を担って、安価な特産品だと盛んに宣伝に努めていたが、一行の中では購入した者は少ないようであつた。

ウルムチの絨毯技術は、中近東から伝わったシルクロードの賜物の一つであろう。工場一杯に四、五十人ほどの少女が糸の壁に向い、器用に手先を使って糸を操り、我々の参観にも眼もくれず、精を出していた。

二階にある展示場には、沢山の絨毯が美しく飾られていた。しかし、我々は余り其の方面には興味はなく、値段を聞く意志さえもない。一見したところ、中近東の方が優れているように見受けられた。

絨毯の見学よりも、通訳の横の座席に腰を下ろし、中ソ国境の状況を聞く方が何倍もの楽しみであつた。

中ソ国境線の現状は、ソ連が設備した鉄条網が張り巡らされ、中国側では何の施設もしていないとの返事であつた。同族の少数民族が彼我に分かれているのに拘らず、両国政府の親族の往来も許さない状態は、我々の理解に苦しむ事だと質問を続けると、中国側は希望しているところだと云う。ソ連は１９６２年に国境を閉鎖し、交流を禁止したと、一方的にソ連を攻撃していた。

彼との会話から判断して、政府間のみならず、辺境の国民の間にまでも不信感が浸透し、深刻なように感じたのである。

本日の観光は六時半に終わり、七時の夕食となつた。

ウ ル ム チ の 寒 い 夜

ホテルの新館は一旦、外にでなければ本館の食堂に行くことは出来ない。我々に対する最大の御馳走は「暖」であつたが、再び外の寒気にふれる辛さは身に泌みる思いだ。本館のロビーも薄暗く、売店も開かれていない事から察すると、外人専用のホテルとは考えられない。華僑賓館という名称からして、華僑相手のホテルではなかろうか。紅山公園の麓には、外人専用ホテルがあつた筈だと、口惜しがつても処置なしだ。広いばかりの寒い食堂には、我々一行のほかに日本人観光団の一組が加わつただけで、日僑ホテルという方が相応しいようだ。

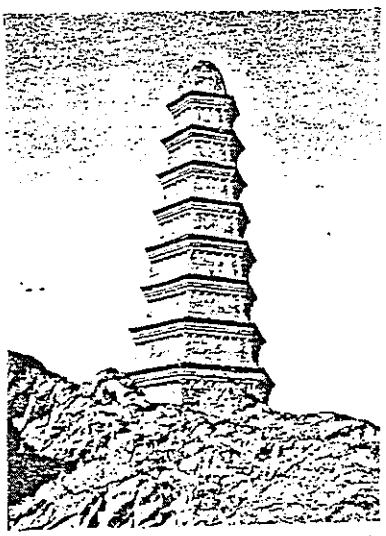
寒さに耐えるために厚着をして夕食のテーブルに就くや、冷たいビールとジュースだけで酒はなく、身が凍るようで飲めたものではない。河西回廊から西域にかけての食事は、概して粗末なものばかりで甘脆の味はなく、ウルムチでは寒さのために温かいスープが何よりであつた。

珍しく魚の料理が出された。おそらく上海から空輸されたものであろう。我々日本人の口に最も適している魚は、西安以来、十日間もお目にかかつた事

がない。西域最後の夜のサービスの意味だろうか。
シシカバブという羊肉の串焼も亦、初めての料理だつたが固くた食べられない。ソ連の中央アジアで食べたものよりも一段と固く、一片の羊肉さえも口にする事ができなかつた。シルクロードの旅の食事は覚悟の上で、早く部屋に戻り、持参したカップヌードルを食べる事しか考えずに、食事を終えたのである。
室に帰ったものの、今度は風呂の問題であつた。暖房はなく、室内温度が三度前後という中での就寝は、野戦の陣営と変わらず、野宿に等しい。入浴すれば風邪を引くこと間違いなしだと判断し、食堂で買い求めた葡萄酒を飲み、着のみ着のまま、床に潜り込んだ。
歴史的な史実の少ないウルムチの想い出は、寒稽古に似た夕食と就寝風景であり、修業道場のような一夜であつた。

十月十七日　　快晴

紅山とカシミヤ工場



夢とロマンのシルクロードの旅は、今日の午前で終了することになり、疲労と名残りを覚えながらホテルを九時に出発した。
高層ビルが並ぶ、乾燥した美しく明るい街には、漢語やアラビヤ文字のウイルグ語の看板が、白い壁などに掲げられている。多民族のカラフルな衣装を眺めながら、雑踏するメンストリートを北上し、紅山の頂上までバスは登った。
紅山は市の中央にあつて、全市を一望のもとに瞰下できる岩山の公園である。頂上の稜線には中国風の大小の楼閣が建ち（前頁）、天空に向かって聳える石塔（上の写真）は市のシンボルのようで、市を包むように囲んだ四周の禿山は、陽の光に美しく輝き、平和の里の感じを呈していた。
見おろす公園の山裾はロータリーとなつていて、百貨店やホテルが続き、繁華街となつて延びている。予想よりも遥かに大きい大都会だ。頂上の稜線を散策しながら通訳と話を交わし、種々と知識を求めるのには好都合であった。
ウルムチは日本との姉妹都市の締結が未だという事で、札幌を希望したものの、他の都市と締結済みで、残念がつていた。年間の観光客は昨年は五千人だったが、本年は七千人に増えた。其の中で日本人は４０パーセントの二千八百人で最も多く、次いで美国（米国）の１５パーセント千人、国境を接した俄国（ソ連）は皆無である。観光客の数も、国際情勢を如実に物語つているようだ。
教育については、ウルムチには七つの大学があり、自治区内では十五大学だという。医学部のある大学は三つというから、此の辺境でも難関らしい。学費は小学校が二元（一元は八十円）、中学校が三元、高校が五元である。社会主義の国では学費は無料だと考えていたが、この自治区では、義務教育制が施行されていないのである。
大学の主要外国語は英語が８５パーセント、ロシア語が１０パーセント、日本、ド

イツ、フランス語を合わせて５パーセントである。北京や上海の日本語の２０パーセント以上を考えると、遠い僻地という感じだ。軍の学校は総て中央政府の直轄で、最難関の一つだという。

医療費に就いて尋ねた。公務員や公営企業の従業員は無料、主婦その他の自由人は有料、農民も有料である。費用は西洋医学は４０銭で患者の４分の３を占め、漢方医学は２元で患者の４分の１に過ぎない。漢方の高価な原因は、薬草入手の困難性と、長期間の治療を要する事だ。しかし、漢方は副作用がない為に、高収入者には非常な人気があるそうだ。

その他に、ウイグル医学という初耳の医療方法があり、その病院も２院あるというから、新知識を得て博学になつた。

料理に使用する油は、主としてヒマワリ油と胡麻油で、胡麻は小粒の大豆ほどあるらしい。哈密瓜を筆頭に珍しい農産物の多いことにも、驚かされたのであつた。纏まりのない会話の中で、記憶したものを挙げてみたが、旅は母親のような愛情を持って接し、心を披瀝して意志の疎通を計り、新しい知識を吸収する事に役立つものだ。

彼と名刺を交換した。中国国際旅行社の社員の彼は、最近、北京と上海に民間の旅行業者が二社、設立したと教えてくれた。自由化の波に乗ったサービスの向上のためにも、喜ばしいことである。

紅山の眺めを堪能してから、次ぎはカシミヤ工場に案内された。一階は展示場兼即売場で、二階は工場となっていた。工場とはいうものの、若い女性が手編をしている家内工業に過ぎない。帰国してから知人に聞いた話では、最近、日本の商社が、ウルムチ・トルファン・カシミヤと称して宣伝し、人気があるそうだが、現場を参観した感じでは、それ程までの物とは思えない。カシミヤ工場を見学した機会に、「中国人と羊」に就いての歴史を繙いてみる事にする。

「中国人と羊」

中国で野生の羊の家畜化は、伏羲（中国神話の三皇の一人）の時代にまで遡ることができる。当時、網の発明があったので、狩猟の捕獲量が増え、生け捕りも可能になって、それを備蓄に回すようになつた。そこで飼養の必要が出てきた。「伏羲」の二字に、野生動物を柔順な家畜に飼い慣らして、犠牲に供するという意味がある。古代、祭祀用の動物を「犠牲」と称した。

中国の一番古い文字である甲骨文には、卜占や祭祀の記事が多いが、重大な祝典には、一度で三百頭を超える牛と羊を使ったとされている。「詩経」三百篇のうち、羊に触れているものが十三篇あるが、其の中の「無羊」篇は、周の宣王が牧畜業の復興に成功した事を、賛えたものである。

春秋時代以前の羊の飼育は、繁殖に重点を置いたので、官位のある者でも、みだりに羊を殺してならないという規定があり、祭祀の時と祝日以外は、随意に羊を殺して食べることは出来なかつた。したがつて、当時、羊肉を売る商人は未だおらず、羊の毛皮を衣類に使えるのは、士大夫のみに限られていた。羊が商品として売買され、羊商人が現われるのは、春秋時代以降である。

その後、秦、漢時代に羊の売買が盛んになり、条件の良い地方で大量飼育が始まった。漢の武帝の時、河西の人で卜式という牧畜業者は、羊の飼養に長じ、度々私財を政府に献上したので、関内侯と御史大夫に封じられている。南北朝の時代には、封建

王朝は広大な放牧場を占有し、百万頭を単位に数える家畜を擁していた。塞北の六鎮では、羊百頭について軍馬一頭を納めているという「後魏書」の記事があるが、当時、民間に牧羊が普及していたことが分かる。

唐代になつてから、交通が開けた為に、新彊トルファン地区のチベット羊が、外へ運ばれるようになり、牧羊は質的量的に大いに発展した。

宋朝が南方に移り、黄河流域住民が南下すると共に、綿羊も牧場主について、長江流域に移動したが、これが長期の馴化で、湿気や高温に強い湖羊となつた。狩猟牧畜民族が建てた遼、金、元の諸王朝は、農業地区を征してからも、漢民族の反抗を防ぐために、馬の飼育は許さなかったが、彼等の生活習慣上、牛と羊の飼育は奨励した。明、清時代になると、牧羊の目的は食用と衣類用のみにとどまらず、飼養の技術は一段と発展した。

「羊」、それは中国人にとつて「よきもの」のイメージである。「羊は祥なり」と吉祥の象徴とされている。また、中国人の食生活の中で、羊の肉は一貫して重要な地位にある。新彊風の串焼や、北京風の火鍋のシャブシャブの味は広く知られている。また、病気にも効き、体にも良い。明の李時珍の「本草綱目」には、羊の肉は暖の性質で、虚を補い、食欲を増し、体力をつける。その肝は目に良く、その血は解毒の効があり、角は肝機能の失調から来るめまい、しびれなどを静めると記されている。それから、羊毛は毛糸、毛織物、フェルトにと、体中に無用のものはなく、中国人にとつて羊は、全身これ宝である。

西域の大自然

最果ての天山を越えたウルムチの滞在は、僅かの二十四時間にすぎなかったが、遠い砂漠の彼方に足跡を残した事は、我がが人生にとって特筆すべき事であつた。旅の終わりを告げるに当たって、見聞したことに基ずき、大自然に就いて考えてみたい。

自　然

山は緑に、野には田畑が広がる日本は、美しい自然と穏やかな気候に恵まれて、自然の厳しさに余り気がつかない。今次の旅を体験して、想像も出来ないほどの、激しい砂と人の戦いを知ることができた。一歩、乾燥地帯に足を踏みいれると、自然の重圧に対して、人間の知恵が何千年来、戦いを挑みつづけ、現在も継続している。この姿を目の当たりに接してみて、我々がどれほど恵まれた生活を楽しんでいるかを、しみじみと感じると共に、人間の知恵の無限に驚いたのである。

回廊から西域にかけては、見渡すかぎりの乾きに乾いた砂の海で、殆ど雨が降らない。従って山々はすべて丸裸だ。白、黒、赤、黄色の土の色を其のまま見せて、砂の中に山脈を形成している。少々の湿気が上空に流れて、高い部分に雪を積もらせ、氷となっている。夏になって氷雪が解け始めると、山肌の無数の皺は川となって水を運ぶ。水流は砂漠に入ると砂に吸い込まれてしまう。地表に流れるものがあっても、高温のために干し上がり、年中、水を流す川は非常に少ない。

地下に吸い込まれた水は地下水となる。しかし其の存在は、焼け付く広い砂漠では、

推測する事もできないだろう。水位の高い所は草原となつているが、概ね半砂漠だ。
地下水が地表面に湧出している所がオアシスだが、多くは塩分を含んでいるようだ。放牧や隊商たちの休憩地となつても、我々には一日も生活できない程の地である。

遊 牧 民

このような所にも立派に人が生活しているのである。往時には中国を揺り動かすほどの力を現し、或は世界を席巻するような嵐まで起した。彼等の生活は、まばらな草を羊や牛や馬に食べさせて、その家畜の肉や乳を食用とし、皮や毛を衣類の材料としたのであつた。素晴らしい人間の知恵だ。
家畜が草を食べつくすと、他の草のある土地を求めて、群れを移動させなければならない。一地点に長く住み着く訳にはいかないのである。移動するためには固定した家ではなく、包（テント）に住まいすることになる。
衣食住の総てを家畜に任せる人々にとつては、馬は彼等の足となって砂漠を走り、牛は車を曳き、駱駝は荷物を背負って移動した。勿論、婦人や子供でも馬を乗りこなした。しかし、多くの家畜を引き連れて、広漠とした地を渡り歩く彼等は無防備であつた。だから集団生活が絶対条件となったのである。
反対に、中国内地の漢民族は、一地域に住まいをして田畑を耕作し、町や村を造り、耕地を中心にした社会を形成した。遊牧民と大いに異なるところである。
中国の歴史を繙くと、古代の戦いでは、北方や西方の遊牧民族、即ち騎馬民族の方が断然優勢であつた。それは移動範囲の広い、騎馬集団の機動力の威力である。遥か向うから地鳴りを響かせて来襲する、何百何千の力に圧倒されたからだ。捜索力の差も当然である。常に移動して生活する彼等は、地形を熟知しているばかりか、一地に定住しないために、攻撃目標を敵に与えなかったと言えるだろう。漢の武帝は匈奴に勝つためには、優れた馬を持たなければと天馬を求め、絹を利用して馬を集めたのも当然である。

オ ア シ ス

砂漠に生活する人の知恵は、遊牧民と違った生活様式を創造した。それがオアシスだ。何時の頃からかは知らないが、有史前ではなかろうか。
砂の海に浮かぶように山脈が走り、その山裾に近い砂漠地は、比較的に地下水が高い。井戸を掘れば地下水の利用が可能だ。川の流れから砂漠の中に用水を造って水を引けば、小耕地ぐらいは出来る。川が一年中流れなければ、末端に貯水池をつくり、水を貯えれば是れも小耕地になるだろう。これがオアシスであり、水のある所に人生ありだ。我々が見学したウルムチ、トルファンや敦煌、酒泉も其の通りであつた。
耕作地となるところは地下水を調べ、水利の可能性を知らなければならないが、古代の砂漠の人たちの知能が優れていたからこそ、地下に水脈を求められたのである。即ちカレーズ（６８頁参照）を造ったのだ。これには高度の土木技術と集団の力が必要で、驚くほどの知恵に感服したのであつた。しかしながら、オアシスの水量には限度がある筈だ。一定以上の耕作面積や人口を越える事はできない。又、生活物資も農

作物に限られ、必需品は他に求めなければならない。その為に物々交換にせまられて、隊商が生まれたのであろう。隊商が盛んになるのにつれて、中継地としての市場や宿場が活性化し、オアシスを点とし、隊商路を線とした、点と線の世界が形成されて行つたのであろう。

天　山　山　脈

水平線ばかりが続く灰色の世界の中に、大山脈が延々とのびている。概ね南はオアシスの地域で、北は遊牧の地帯のようだ。勿論、南に遊牧がないわけでもなく、北にもオアシス世界は存在するはずだ。

インドを襲う猛烈な湿気は、ヒマラヤで遮られるばかりか、崑崙山脈にも吸収されて、天山山脈の南は大乾燥地帯となつている。年間降雨量は１０ミリとか２０ミリというから、一夜の降る雨に等しい。それも年間を通じて何回かに分けて降るから、降らないのと同然だ。これでは人の住めるものではないが、前記したように、僅かな川の水や、地下水を利用して立派に生活をしている。我々が訪れた酒泉や敦煌、トルファンは歴史も古く、麦や果樹の栽培が行われていた事からも理解できた。

一面の天山の北側は、北氷洋の夏の湿気が、シベリヤに流れて広々とした大森林を育て、その一部が天山の北斜面にまで達している。此の影響から北斜面には草原の部分があり、地下水が高い関係から、乾燥に強い草が根をおろしている。そこで人間は羊や馬をやしない、育った家畜の肉や乳を食料とし、毛皮で衣服を作って暮らしている。

ウルムチ盆地は其の一例だが、北方には大砂漠地帯のジュンガル盆地を控え、乾燥地帯には違いない。しかし、南側ほどではなく、割合条件の良い遊牧の世界が展開している。遊牧民の匈奴、突厥、回鶻、蒙古族等の闘争が繰り広げられた歴史は、この事を如実に証明している。

天山を境にしたオアシス世界と遊牧の世界は、北方産の家畜と南方産の穀物や絹を交換し、その為に南北の隊商路が開かれ、シルクロードも北側に向かって延びたのではないか。この事から、ウルムチの要衝であつたことも納得できるようだ。

以上が、５０００メートル級の万年雪を頂く天山の南北を踏破して、気付いた事を纏まりもなく記述した次第である。

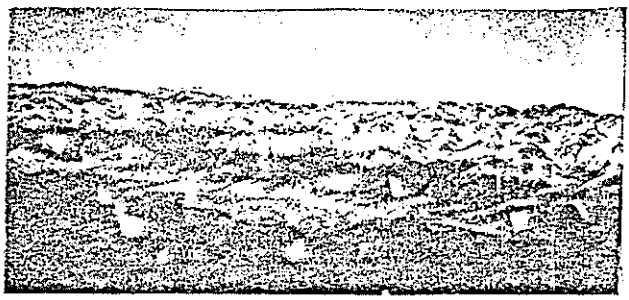
トルファン－上海

長い旅も過ぎてみれば一場の夢のようである。

西域最後の昼食は、ウルムチ空港のレストランであつた。ホテルの食事よりも数段良質だ。パキスタン行きの国際便はウルムチを経由し、空港ロビーに掲げた天山の雄壮な絵は、我々の眼を引き付けていた。登場時間を告げられてゲートを出ると、多くの中国人は哈密瓜を抱えていた。日本国内に搬入が許されるならと、我々の垂涎の的となつた事は、何回か食べた珍味が忘れられないからである。

１３時５分、離陸すると直ぐ右手に、峨峨たる純白の連山が鋸の歯のように切り立ち、砂漠の屋根と形容される神秘な姿を現わした。将に神仙の棲む天の山だ。

絶景を狙う乗客は、逆光を承知で素早くシヤッターを押した。



（右写真）天山を過ぎると、下界は灰色の世界に一転し、山も砂漠も区別がつかない。やがて３０分を経過すると、左に白雪を覆つた山なみが視野に入って来た。時間的、地形的から祁連山脈だろう。

黄河上流を眺めたいと凝視を続けたが、千里の彼方までも延びる黄灰色の地形では、見定める事は至難な業で、次第に眼の疲れを覚えてきた。

飛行機の旅は満腹の上に、食事の連続だ。飽食は睡気を誘い、長江を捜す意欲も眠気には勝てず、上海到着のアナウンスまで、深い眠りであつた。（上海１７時２０分）

僅か四時間の短時間だが、気温三度のウルムチから、一挙に二十二度の上海に到着した。二十度近い温度差は厚着の肌を汗ばませ、風邪は一変に吹っ飛んでしまつた。

半月ぶりに混雑する南京路を通り抜け、ガーデン・ブリッジを渡って大夏飯店に入り、上海特別料理の晩餐会となつた。鵬程万里の僻地を馳駆して粗食に甘んじ、食前方丈の御馳走が、王侯貴族の饗応と感じたのは、私一人ではなかったであろう。

宴が終わり、直ぐ近くの蘇州河畔にある上海大夏に移り、垢脂を流したのであつた。

上海新発見

熟睡から醒めたのは六時である。今天早起（お早よう）とボーイに声をかけて、朝の散歩に出掛けた。白人渡橋（ガーデン・ブリッジー）を渡り、黄埔公園の入場料三毛銭を支払って中に入った。早朝の浜風は適温で寒くはない。数百人の人が、所狭しと大極拳を演じていた。回廊から西域にかけては、拝見出来ない光景である。

朝食を終えてバスに乗車した。空港に直行するはずの車は黄埔公園に立ち寄り、通訳は一行を案内して廻った。一時間前に散策した園内を、再び見学する愚もなく、一行から離れて防潮堤の所に立ち止まった。

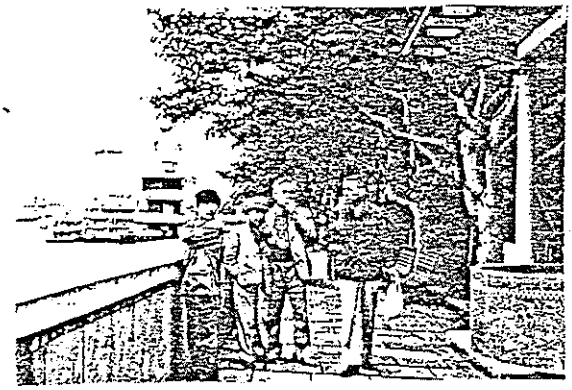
背の高い中国人が、笑みを浮かべて言葉をかけてきた。戦争中、日本軍の通訳をしていたと自己紹介した。流暢な日本語で懐かしそうに話し、あそこが日本領事館だつたとか、南京東路の建物を指差して、あれは英国銀行であつたとか、一人で説明を続けていた。年齢六十三歳にしては若く見える人だ。

貴方ほどの上手に日本語を話せば、通訳に就職をと、奨めたところ、旧日本軍に協力した者は、リストにあがつていて、公職にも就けず、白い眼で見られているそうだ。

戦後四十年も経過して、未だに旧歴を云々するとは、中共も大人げない事だ。いろいろと話をしているうちに、年金の話しとなった。彼は僅かの年金は貰っているが、宣伝するような生活が出来る金額ではないと、断言した。中国の失業者は三千万と聞いているが、と私の方から質問したところ、それぐらいではないと直ちに返答した。社会主義の国は真実を発表しない事が通弊だ。三千万は嘘かも知れない。大学出の若者が就職ができず、前途を悲観して北京駅頭で自爆したニュースが、脳裏に浮かんだ。

彼は最後に真剣な態度で、共産主義では絶対に発展しないと、力説したのであつた。

新発見の言葉であつた。（右写真の右端が彼）戦後五回も訪中して初めて耳にした事である。現在の上海市民の生活は、旧日本軍の占領時代は言うに及ばず、蔣介石政権下よりも酷いと、更に力を込めて語った。彼の前歴を差し引いたとしても、市民の間に不平不満が充満している事は疑いない。



昔から上海は革命、或は反乱分子の隠れ場所であつた。革命とは、天の命によつて改革する事だ。広い中国、十億の民の中には、其のような芽があることは、少しも不思議ではない。結社も予想されない事ではないだろう。但し、彼が其の一員かどうかはしらない。人格を尊重して、それ以上深く語ることは、当然ながら遠慮した。

彼と会話しながら緩りと歩いた時、背の低い中国人が愛想良く近寄り、写真を見せて自己紹介して来た。写真は和服を着用した角帽姿であつた。関西学院大学出身者で、那智権現のお札まで添付してある。彼は日本留学経験者だから、勿論、日本語は達者だ。帰国後、彼から手紙を貰ったが、日本人以上の文筆で、彼の書いた書と家族の写真まで届けて来た。書画の販売が主目的で、前者の人物とは語るに足らない人格だ。

集合時間が切迫して、握手を交わして離れた。前者の人との会話は意味深長であるばかりか、内容も理路整然としており、名残惜しい別れであつた。

再びバスに乗車して空港へと急ぐ車の中で、彼等は何の目的で私に接してきたのか、と思案した。懐かしさの為にか、それとも別の目的があるのか。彼等二人に横の連絡があるのか、興味津々であつた。（帰国後、後者は闇商人と判明した）

中国は急激な自由主義諸国との接触により、言論の自由は徐々に緩和の傾向にある事は、報道によつて明瞭である。しかし、日本のような完全な自由ではなく、社会主義の綱領の範囲内での自由に過ぎない。彼の発言のように、共産主義を否定する自由は許されず、依然として一党独裁には変わりはない。

老子や荘子の思想の中に、「遊」に就いて述べている。遊は人間の真のあり方、行動のしかた、或は、とらわれない生き方、を意味する言葉である。文字の構造からすると、人が旗を持って前進している形を表わし、一つの場所に釘付けされず、自由に動くという意味を持っている。要するに老荘の遊びの思想は、自由な心を持つということだ。

周の召公は「口を塞ぐ事は、あたかも水を塞ぐに似て、塞がれた水が必ず出口を破って、多くの人に災害をもたらすように、いつかは国を乱す事になるだろう。民が口で思うがままに意のあるところを述べれば、政事の善し悪しが、治める者に良く判り、それが引いては財と衣と食とを、国土にもたらす事になる」と王に諫言したと言う。

偶然に出会つた彼は、自由諸国を知り、見る眼を持つ人物であろう。自由の尊さを身をもって体験しているからこそ、あのような発言になつたと推察したい。

バスに揺られながら、中国の先哲の言葉を想い起し、上海を去ったのであつた。

中国雑感

紀行文の最後に、其の当時の訪問国の内外情勢やニュース等を、書き残して置くことは、後日、紀行文を再読する上に参考になるものだ。今回も若干だが雑感として記述することにする。

対日批判の裏を考察

今次旅行に鹿島立ちする半月ほど前の九月十八日、北京大学の学生千人が反日デモを行い、又、壁新聞を校内に掲示して反日運動を展開した。更に出発の前日、西安交通大学の学生も亦、鐘楼を中心として繁華街で三日間にわたり、反日デモを繰り広げたという、暗いニュースが報道された。この事件は日本のマスコミは一斉に報道したが、中国共産党機関紙人民日報は、同日、何の報道もしなかったのである。

北京の天安門広場では、「中曽根打倒・日本軍国主義打倒・靖国神社公式参拝反対」のデモが行われ、大学校内では許されていないに拘らず、対日批判の壁新聞を貼つた。

九月二十七日の人民日報は、日本側がこれまで表明した戦争への反省を、今後は行動面でも示せと声明を発表した。また、日本国内には日中友好に反対し、侵略戦争を美化し、軍国主義をたくらむ一部勢力があり、其の影響が存在すると指摘した。これらの新聞記事の一部を、紀行文の末尾に掲載しておく。

一連の反日批判の記事を読んだ日本人は、どのような感想を持ったであろうか。中国に好意を持ち、彼等を愛す私でさえも、憤慨と残念の胸宇を押さえ切れない興奮であつた。

１９７２年９月２９日、日中国交が平常化して平和条約が締結した。其の中に「内政不干渉」が明記されているが、今回の事件は甚だしい内政干渉だ。ソ連を含む共産国家は、条約を平気で反古にしたり、反古にするような言動を許すのであろうか。

９月１８日の反日デモに就いて中国外交部は声明を発表し、学生と同じような対日批判を行い、中日友好条約の諸原則に基ずく、両国の友好関係の発展を呼び掛けた。これ以外に、実は今年八月から、中国政府は執拗に抗日戦四十周年を宣伝し、胡総書記も「日本は二千万人の中国人を殺した」と、しきりに批判していたのである。

実は此の動きと前後して、北京では、中国共産党全国代表者大会を始めとする各種の党会議が、開かれていた事を注目する必要がある。結論的には、自分たちの内部の矛盾や失政をそらす為に、日本を引合いに出し、日本を批判する事によって、権力闘争を勝ち抜こうとしたのではないか。

北京大学や天安門広場のデモや集会が、官製デモの疑いが濃厚である。北京大学当局は、このデモは自発的なものだと云うっているが、共産主義国家において、民衆が自発的にデモを行い、壁新聞を貼れる筈がない。

例えば、「民主の壁」に壁新聞を貼つた魏京生という「中国の春」の指導者は、十五年の強制収容所送りになつたと伝えられている。まだ開放されたとはいえ、大衆が勝手にそのような事が出来る程の国に、成長していない。

今回のデモの学生が逮捕されたという報道もない。明後日、取材があるから待機するようにと、二日前に北京在住外国特派員に、通知があったという事も耳にしている。

デモの予告である。官製の疑いは充分だ。
二千万人の犠牲者という数字は、胡総書記の作り上げた数字ではないか。戦争終結時の中国軍最高司令官であつた何応欽将軍（国民党軍）は、犠牲者は軍民合わせて八百九十八万人と、明らかな数字を発表した公式記録がある。
抗日戦争を戦ったのは中共軍であり、中国共産党である。そして日本に勝ったのは中国共産党だと、盛んに主張しているが、知る人ぞ知るである。抗日戦の主体は蒋介石の国民党軍だ。これらは華国鋒支持派の多い人民開放軍に、こびを売るためだろう。
このように光栄ある共産党を強調し、そして党代表大会を推進し、鄧小平派の権力を確実にするという狙いがあるようだ。それだけ自派の力を大きく誇示しようとして、対日批判を行ったとも疑う事ができる。
中国の大衆は、確かに数百万の中国民を殺した日本に、不信感を持っている事は事実だ。我々も深く懺悔している。しかし、四十年も前のことであり、平和条約も締結されている今日、大人げない事ではないか。日本が悪いというのであれば、其のような悪い国と、何故、国交回復したのかと反論したくなる。
彼等首脳は、借款や技術援助を望んでいるからだろうが、反日批判は日本国民に不快感を与えるだけで、自国のためにならない事を、自覚して欲しいものだ。
我々が中国を旅行して感じることは、十億の大衆は過去を忘れ、隣国の日本人に親近感を持っている事だ。互いに仲良くしたいものである。

経済体制改革の目的

最近の中国は資本主義国になつたのではないかと、思うような動きがある。マルクス学説を否定し、必死になつて経済発展を計ろうとしているのが、現況である。
１９７５年及び７６年と二年続けて訪中した時は、華国鋒が主席の座を失脚し、末席の副主席に転落した時であつた。それから四年を経る間に中国は変化した。最も著名なことは、鄧小平が毛沢東の失敗をみて、マルクス主義の誤りを深く知ったことである。
建国三十年を過ぎて気がついてみると、中国は世界で最も遅れている国になり、国民生活も世界の最低となつていた。それと正反対に、日本を始めとする周辺国家は長足の進歩を遂げた。同胞台湾の十数分の一に過ぎない所得である。
今までのような政策をとり続けていれば、国民の反政府、反党気分が強まり、中国共産党の一党独裁体制が崩壊すると自覚した。それと同時に、経済改革と日本への接近強化や、ソ連への迎合策となつたのであろう。
鄧小平の「白い猫でも黒い猫でもよい、よく鼠を捕る猫が良い猫だ」と言った彼の言葉は有名だ。実践することが大切で、架空なイデオロギーに捉われてはならないというう事である。イデオロギーに捉われれば、共産党政権に対する国民の反発を強め、共産党独裁を不可能にしてしまうという、彼の考え方のようだ。
何しろ建国以来、共産主義を貫き、情報鎖国を続け、中国が世界一と教えつづけて来たために、俄かな方向転換についていけない者も一杯出てきた。しかし、この防止策も放置されていたから、汚職が蔓延する現象が現われている。毛沢東が文化大革命を起したのは、汚職、腐敗の党員を粛清することが発端であつた。鄧小平派が精神汚

染一掃や整党に必死になつていることは、前車の轍を踏まないためである。
人民日報は折りにふれて改革の成果を伝え、月刊誌の中国建設（中国人むけのもので中国語文）には、中国城市的経済改革や中国的農業経済改革の重要性を訴えている。中国的と書いてあるのに意味があるようだ。
以上のことから、中国は資本主義に移行するのではないか、と考える事は楽観的に過ぎる。中国首脳陣は、共産党一党独裁だけは死力を尽くして守る決意である。マルクス学説を捨てても、共産党独裁を守るために、経済体制を改革したのではないか。即ち彼等の言う「中国の特色を持つ社会主義」だ。

権力闘争は消滅したか

昨年の国慶節を前にして、最高権力者の鄧小平と党政府首脳を、一挙に爆殺しようとした暗殺未遂事件が発覚し、当局を仰天させた。これは公安部の高級幹部が漏らしたということだ。
この計画はラジコン飛行機を飛ばし、国慶節の閲兵式典で、閲兵行進に参加するジェット機と、戦車の騒音にまぎらはせて、爆殺するという計画らしい。
中国では最優先させているものの一つに、公安機関の新鋭化がある。日本などの資金援助と技術導入によつて最新の装備を整え、エレクトロニクスをも駆使して、今度の爆弾ラジコン機を摘発したという。日本などの資金と技術が、暗殺を未然に防いだのである。
八月ごろから十月一日の国慶節までの期間、特別保衛大隊は、祝典時に万一の問題が発生しないように、爆弾探知機を装備した車で、天安門一帯を徹底的に調べていた。矢張り、党政府としては反対者の弾圧に最も力を傾注し、世界でもトップクラスの探知装備を備えているという。
今回の事件の背景には、言うまでもなく、空軍関係者が関係しているのではなかろうか。党首脳に強い不満を持つ保守軍人と、民主主義的傾向の若手軍人の動きを、示しているようだ。
去る九月に開催された中国共産党全国代表者会議は、中央委員会の大幅若返りを実施し、工・農業の年間平均成長率を七パーセント前後として、堅実なバランス成長を実施するように求めた。第七次経済五か年計画（１９８６－９０）に関する党中央の提案を採択して、二十三日に閉幕した。
同会議閉会式では、鄧小平、陳雲両政治局常務委員が、六日間にわたる討議をしめくくる演説をした。両氏の間では対立点が浮き彫りになり、李先念同常務委員が、閉幕の挨拶でこれを折衷する形となつた。
鄧氏は、１９７８年以来の党の経済改革路線は、農業改革で目覚ましい成果を上げたと指摘し、また、現在進めている都市経済体制の改革に、積極的に取り組むように呼び掛けた。
しかし、陳雲氏は、農業改革の中で生まれた「万元戸」（裕福農家）は、実は極めて少数であり、農業本来の食料生産から生まれたものでなく、副業や農民の小規模工業、商業から生まれたものだと、厳しく非難した。農民は今や食糧生産に意欲を持たなくなつたとして、行き過ぎた副業生産をもたらした、これまでの農業改革路線に反

省を求めた。
鄧小平氏ら主流派は、農業改革の方向として、食糧などの農業生産は専門農家（専業戸）が請負い、その他の農民は、農村で工業、商業、サービス業に従事することで、それぞれ富裕になることを奨励している。
一方の陳雲氏は、此の改革に必ずしも賛成せず、「無農不穏」（農業を立派にやらなければ安定はない）、「無糧則乱」（食糧がなければ乱が起きる）と警告して対抗した。
又、都市の経済体制改革についても陳雲氏は、「計画経済を主とし、市場調整を従とする方針は、未だ時代遅れになつていない」と述べ、経済に対する国家管理を少なくしょうとする主流派路線を、厳しく批判した。
陳氏は続いて、工業なくして富裕なしの声が、農業なくして安定なしの声を圧倒するという、ゆがんだ情勢が生まれていると指摘した。更に食糧生産を基軸とすることは、経済問題でも政治問題でもあるとして、農村の現状を正すように警告した。
結局、主流派は、９０年代には、中国の特色を持った活力ある経済体制の基礎を確立する、としている。つまり、経済に対する国家の直接管理を少なくし、経済を主として市場の動向や、金融などの経済手段に委ねるという方向である。
陳氏の警告は、提案が打ちだした方針に強い懸念を持つている事を示しており、第七次五か年計画を通じ、進められている経済体制改革が、つまずきを見せるような事があれば、路線の違いが政治的対立となつて、表面化する事も考えられる。
次ぎに軍の問題である。葉剣英氏ら十人が、中国共産党政治局員を辞任することが、九月十六日に発表された。其の中の八人は、いずれも輝かしい軍歴を持つ指導者で、其の中でも葉剣英氏ら三人は、１９５５年に任命された十人の元帥のうちの三人である。このことを考えると、軍の実権は今後、主流派が固めるのではないだろうか。勿論、開放軍の中には、華国鋒支持の左派勢力の根強い事も忘れてはならない。
要するに、権力闘争の芽は依然として存在している。全国代表者会議において、若返りを目指した人事は、経済改革や開放経済路線の積極派が占め、左派及び保守派の昇格者はゼロであつた。しかし、反主流派は今回も、かなりの居残った現状からすると、当分の間は急激な変化はないのではないか。

百万削減の人民開放軍

四月二十九日、胡総書記が訪問先のニュージランドで、世界平和擁護に貢献するために、「開放軍を来年までに百万人削減する」と宣言して、世界の耳目を奪つたのである。此の発言に対して自由主義陣営側は、中国の平和指向の表れと歓迎した。
中国政府の開放軍百万人削減問題は、これより先の六月四日、中央軍事委員会の席上で、鄧小平主席が公表したのである。大意は次ぎの通りである。
中国は社会主義の現代化した強国を建設するために、力を集中して経済建設を行うべきである。何よりも必要なものは平和な国際環境だ。中国は此の理由からも、世界環境の創出と維持に努力する。経済建設は我々の大目標であり、総てをこの観点から按配しなければならない。開放軍の百万人削減は、政府と人民に自信があることを表明したものだ。十億の人口を擁する中国は、実際の行動で世界平和に貢献しなければ

ならない。（人民中国九月号）

北京国際戦略問題学会は、国際情勢と戦略問題をテーマに、軍の意向を代弁して国際交流に当たる組織だが、其の高官の一人は「ソ連軍の増強は主として米国に矛先を向けたものである。ソ連の指導者は変わっても、覇権主義の政策は不変で、中国に対する脅威も主としてソ連から来る」と明快に述べている。

極東ソ連軍、特に海空軍は主として米軍に対抗するものだが、百万以上の陸軍は中国向けであり、若し中国に全面侵攻を仕掛ける時は、ベトナムも呼応して動くだろう。

中国の百万人削減はソ連の動向を見て決めたものでないだろう。ソ連への警戒は緩めていないが、国際情勢全体を見て削減できると判断したようだ。「万一ソ連が攻めてきても、十億の人口と開放軍の力で対抗できる。兵員数の削減は、戦闘力を弱めるのではなく、強めるための処置だ」と述べている。

国防の近代化には時間がかかるから、それまでに万一の事態を迎えたら、ソ連軍を国境で食い止める力はない。国内に深く侵入されることを覚悟しなければならないだろう。「だからといつてソ連は中国を支配できるか。侵入軍は目的を達成して無事に引き上げて行くことが出来るか」というのが、中国軍首脳の考え方のようだ。ここに中国人の楽観論の根拠がある。このような人民戦争理論は、今後とも、長期にわたつて開放軍の思想的根拠となるのではないか。近代化と人民戦争論は矛盾しない。対ソ警戒と兵員削減も矛盾しないと考えているようだ。

中国は目下、四つの現代化を目ざしている。農業・工業・科学技術・国防の四つだが、先ず農業の改革は７９年に着手した。次いで工業、そして科学技術の改革がスタートした。これらの経済改革は国防の近代化に先んじて進められ、国防はあと回しとなつた。その為に国防予算も毎年横這い状態であつた。そこで軍の近代化を目ざす中国としては、近代化資金を何処に求めるかが、悩みであつたのである。

その決め手が大幅な兵員の削減であり、それによつて予算をひねり出す事であつた。だから兵員百万人（１９８４年調、総兵力４２０万）削減は、中国の平和志向だと単純に受け止める事は早計である。

軍の近代化は兵器装備の近代化であり、電子化である。それに対応できる若い兵士を鍛え上げることが、専門化、知識化である。文革中に膨れあがつた兵員、しかも旧式教育しか身に着けていない五十歳前後となつた老兵の整理が、問題となつてきた。そこで軍首脳は、軍隊は全力で国家の経済建設を支援しなければならない、と全軍に指令した。軍事費の負担を抑制し、軍の人数、施設、技術を積極的に民間に転用し、経済の活性化に協力することが、軍近代化の早道であると言うことだ。即ち、人海戦術の毛沢東の軍隊から、近代的国防軍に脱皮しなければならない訳である。

軍の中心は精簡整編（小数精鋭化、機構の簡素化）だと盛んに述べているが、従来の開放軍では考えられない画期的な大胆な方針である。

この前例のない大規模な「精簡整編」が、今後順調に進むかどうか。そして二年間で兵員の百万人削減を達成するという大事業は、経済改革の成否とも絡み、これから大いに注目するところである。

中国国歌の内容を知れ

起て！　奴隷となることを望まぬ人びとよ！
我らが血肉で築こう新たな長城を！
中華民族に最大の危機せまる、
一人びとりが最後の雄叫びをあげる時だ。
起て！　起て！　起て！
もろびと心を一つに、
敵の砲火をついて進め！
敵の砲火をついて進め！
進め！　進め！　進め！

上の歌詞は中華人民共和国の国歌である。

国歌の原名は１９３５年（昭和１０年）に創作された「義勇軍行進曲」として知られており、田漢作詞、聶耳作曲である。

当時は、「風雲児女」という映画の主題歌であつた。この映画は１９３０年代、日本が中国の東北三省（旧満州）を侵略し、中華民族が生死の危機にさらされた時、当時、国民党（蒋介石総統）支配区にいたインテリーが悩み、迷ったあげく、勇敢に抗日前線へ赴くさまを描いたものである。

劇作家であり詩人でもある田漢は、この映画の梗概と主題歌の歌詞を書きあげると直ぐに、国民党当局に逮捕された。その後、劇作家夏衍が其の未完成の作品を引き継いで、映画のシナリオに纏めあげ、聶耳が其の主題歌の歌詞に作曲した。

「風雲児女」が上映されると、たちまち其の主題歌は導火線のように、広範な観客の胸をついた。抗日救国の熱情を燃え上がらせ、瞬く間に全中国の大地に広がり、人民が強暴に恐れず、戦友の屍をのり越えて突き進むのを、鼓舞する大きな力となつた。

「義勇軍行進曲」の歌詞は深い印象を人々に与え、曲の調子は高らかで激しく、美しい中にも力強さがあり、中国人民が民族開放の事業を闘いとる為に命を捧げ、鮮血を流す決意を表明し、中華民族の勇敢、堅固、団結は、外国の侮辱に抵抗する優れた伝統を具現している。

この歌は中国人民の中に強大な生命力を持つからこそ、治にいて乱を忘れぬ、人民の愛国主義精神を大いに励ましているのである。

１９４９年９月２７日、中国人民政治協商会議第一回全体会議で、「中華人民共和国の国歌が正式に制定されるまで、義勇軍行進曲をもつて国歌とする」との決議が採択された。１９７８年に一度、国歌の歌詞が改められたことがあるが、１９８２年１２月４日、第五期全国人民代表者大会第五回会議で、「義勇軍行進曲」の原歌詞を復活させ、それを中華人民共和国の正式の国歌と定めた。

以上、記したことは、すべて中国当局が発表した国歌制定の要旨そのままである。

我々日本人が此の歌詞と背景、制定の要旨を読んで、感想や如何。総てが日本を敵としたものが、国歌として子子孫孫にまで歌われることは、日中友好に影響はしないか。若い世代の人々の大半は日中戦争を知らない。殆どの日本人も亦、歌詞の内容を

知らないのである。中国を愛し最も親しみを覚える一人として、日中友好の如何に危弱であることを憂慮するものだ。

以下、当時の歴史を簡単に記しておきたい。

１９２８年、満州の軍閥であつた張作霖が、日本軍によつて爆死したのち、中国では排日侮日、反帝国主義運動が激化した。日本軍は在満既得権益擁護と日本人居留民保護の名目のもとに、満州確保策をとつた。

１９３１年の昭和６年９月１８日、旧日本陸軍が瀋陽（旧奉天）郊外の柳条溝で、計画的な列車爆破事件を引き起こし、満州事変に発展して行つた。（日中史上の暗い９、１８記念日）

旧日本軍は政府の制止を無視して、数か月のうちに全満州を占領し、１９３２年３月に満州国を作りあげ、１９３４年３月、清朝の末帝であつた「宣統帝溥儀」を迎えて、立憲君主制を施いたのである。（３２年１月、上海事変を誘発している）

これは第一次大戦後の経済恐慌から生じた日本の大陸進出政策と思うが、五族協和を掲げて諸産業の開発進展につとめた。そして１９３３年５月、塘沽（タンクー）停戦協定等を結んで、国民政府も事実上、満州の独立を承認したのである。

１９３５年（昭和１０年）１２月９日に、北京の学生一万人が集り、当時の日本が実施しようとしていた華北五省の自治化に反対し、日本帝国主義打倒などをスローガンにしてデモ行進した。これが中国学生運動の「１２、９」運動である。

１９３７年７月７日（昭和１２年）、北京西南郊外の永平河にかかる盧溝橋（マルコ・ポーロ橋ともいう）で、演習中の日本軍が、行方不明の兵一名の共同捜査の要求に応じない中国第二十九軍を攻撃した。これが日中事変（日中戦争）の発端である。

以上、３０年代の歴史を振り返ってみたが、主として国民党支配の蔣介石軍及び地方軍閥と戦ったのである。旧満州地区では中共軍とは殆ど戦火を交えていない。作詞者の田漢氏が国民党に逮捕されたことは、国民党の戦争不拡大方針によるみのと思われる。

その後の日中事変に発展した後においても、主な戦闘は蔣介石軍との戦いで、現中国開放軍の前身である中共軍とは、一部のゲリラ戦に過ぎなかつた。

前記したように、中国国歌が３０年代を背景にしたのであれば、中国共産党との関係は、余りにも小さいものである。

私も従軍者の一人として、日本の侵略は如何なる理由にせよ、弁明の余地はないと強く反省している。しかし、敗戦後の日本は完全に戦争を否定した。国民の総意である。軍国主義復活云々と攻撃する中国首脳や学生諸君に対し、日本国民の不戦の固い決意を理解してほしい。今の日本は３０年代の過去の日本ではないのである。

中国・瀋陽郊外の柳条湖で旧日本軍が列車爆破事件を引き金にした日――九・一八は「満州事変」から「十五年戦争」へ拡大した日の前日。その日から五十四年目の当日、北京で発生した学生の反日運動は、「日中友好」ムードなるものが、実はいかに虚妄であるかを教えた。中国の指導者たちが求めるもの、北京で見た日中関係の実像を、あらためて点検してみたい。

理解いまだ日中の間

戦後最大の反日学生運動を点検

国行き深い問題意識

九・一八反日運動とは、一体何だったのか。「反日」の中身は何なのか。

簡単明瞭にみると、中国指導者の清明社公式発表問題は、「日中友好」の新しいベールに覆い隠されて見えなかったものの不満や、うんざりするようなコントロールされた中国的なプライドを、一挙に爆発させた結果として使用したと言えるようだ。

天安門広場を埋めた学生のシュプレヒコールは「日本帝国主義の復活を許すな」「中曽根を倒せ」だった。北京大学の新聞にも、靖国参拝批判の長文のアピールがあった。しかし新聞論説は、日本製品をのさばらすことが、日本人に差別されることか、日中友好に矛盾する結果は問題だとかまで、実に多様だった。

「北大人」（北京大学生）を自負する若者が、新聞紙上で「国家デモ」をするほど中国であるわけはなく、問題提起はかなり慎重に進行された。

比較的ストレートな表現が多かった中国人民大学の壁新聞には「日本商品をボイコットしよう」と大書したものが出た。日本商品の大きな新聞広告張り、その上に黒々と「中国侵略」「中国万歳」「国恥」と書いたものもあった。

街にテープレコーダーでも日本製が売れて、中国製は残念にも、この反日運動には、日中関係のあり方、中国の対日政策の当否を問うた面がある。

しかし、日本の政治経済界、経済活動の中に、危険を察知する中国人の目をさまし、当の日本人以上かもしれない。国家デモや反日ビラ出現は、八・一五（終戦当日）でも九・三（中国の抗日戦争記念日）でもなかった。九・一八までの一か月間には、靖国問題だけでなく、「対日政策の誤り」「首脳代」問題、中国が輸入した日本製トラックの大量故障などがあり、中国の新聞はいずれもねちっこく報じている。

抗日戦争四十周年記念行事で興奮しやすくなっていた学生たちは「正体見たり」の思いに駆られたに違いない。

九月の声を聞くと、日本から続「代表団」がどっと北京に繰り込んで来て、中国の要人と面談する。今月上旬、ある政治家グループが中国の経済開発にあたる彩国土と言う日本人以上かもしれない。

日本の代表団員「日本には死者はムチ打たない伝統があり、朝敵・平将門も死後は勇敢な武将とあがめられました。外国人にはわかりにくいでしょう」

「靖国問題」もその伝統的心情として、中国政府は理解する当面のトラブルの主題は、中国側の政策変更にあったはずなのに、親般は解けていない。

中国人大学生と話していて、今月初めに「人民日報」などに載った日本製トラックの故障発生の一件が意外に「怒り」になっているのに驚いた。五年八百里という大兵戦争のせいもあってか、メーカーはすぐ謝ってしまったが、親しられたように「日本側がだました」のかどうか、疑問が残った。

この報道から三日後に、瀋陽市の石炭機リーダーやリフターが続発した。この記事の発出が「日本から帰ったヘリ業務」。日本側に責任があったかどうかは未明のままだ。

日本がしきりにキリ三億ある本当の原因は、いまいちはっきりしないが、「友好」の言葉がしきりに聞かれる裏には、親般の進め方が遅々としていることは事実。「日中新時代」のかけ声にふさわしいコミュニケーションがないなら、反日運動の教訓を生かされないだろう。

（北京・松山幹夫記）

日本から来た観光客や商用者が、中国人に対してこう言葉に出る強烈はあまり見かけない。むしろ気を使っているくらいなのに、日本流のサービス精神が受け取られているとみえる。

新時代の交流考えて

プラント買い付け解約でも、上海の宝山製鉄所は、中国の地位ある人の間でさえ、まだ「日本に押しつけられた高い買い物」と思われている当面のトラブルの主題は、中国側の政策変更にあったはずなのに、親般は解けていない。

中国人大学生と話していて、今月初めに「人民日報」などに載った日本製トラックの故障発生の一件が意外に「怒り」になっているのに驚いた。五年八百里という大兵戦争のせいもあってか、メーカーはすぐ謝ってしまったが、疑しられたように「日本側がだました」のかどうか、疑問が残った。

この報道から三日後に、瀋陽市の石炭機リーダーやリフターが続発した。この記事の発出が「日本から帰ったヘリ業務」。日本側に責任があったかどうかは未明のままだ。

日本がしきりにキリ三億ある本当の原因は、いまいちはっきりしないが、「友好」の言葉がしきりに聞かれる裏には、親般の進め方が遅々としていることは事実。「日中新時代」のかけ声にふさわしいコミュニケーションがないなら、反日運動の教訓を生かされないだろう。

（北京・松山幹夫記）

商品流入への不満、そこへ靖国問題

「中国の誇り」あらわに

北京市内にあふれる日本製品の大きな広告（松永博撮影）

商品が入ってくるのは日中国交回復の証明でもある。日貿排斥のスローガンを書く若者が込む出やっぱりデッキなどよそれを目撃しないはずがない。

戦争への感覚のズレ

言ってみれば、中国に日本商品が入ってくるのは日中国交回復の証明でもある。日貿排斥のスローガンを書く若者が込む出やっぱりデッキなどよそれを目撃しないはずがない。

北京大学構内で壁新聞を読む学生たち（北京支局撮影）

国人も減くないと思いますが」

日中間の感情はそもそもこの間の感覚のズレが解消しているとは思えない。中国民衆の大多数は、発達工業国の隣人日本にはライバル的好感を持っているが、最近はこのナイーブさが刺激しなかり、そこはかとない反感に転じる気配が見える。

ある米人記者は、ホテルの従業員から「日本人は親切になった」と言われた。「国家大投資の回報を新聞で読んで

ったが、しかし新聞論説は、日本製品をのさばらすことが、日本人に差別されることか、日中友好に矛盾する結果は問題だとかまで、実に多様だった。

「北大人」（北京大学生）を自負する若者が、新聞紙上で「国家デモ」をするほど中国であるわけはなく、問題提起はかなり慎重に進行された。

比較的ストレートな表現が多かった中国人民大学の壁新聞には「日本商品をボイコットしよう」と大書したものが出た。日本商品の大きな新聞広告張り、その上に黒々と「中国侵略」「中国万歳」「国恥」と書いたものもあった。

街にテープレコーダーでも日本製が売れて、中国製は残念にも、この反日運動には、日中関係のあり方、中国の対日政策の当否を問うた面がある。

しかし、日本の政治経済界、経済活動の中に、危険を察知する中国人の目をさまし、当の日本人以上かもしれない。国家デモや反日ビラ出現は、八・一五（終戦当日）でも九・三（中国の抗日戦争記念日）でもなかった。九・一八までの一か月間には、靖国問題だけでなく、「対日政策の誤り」「首脳代」問題、中国が輸入した日本製トラックの大量故障などがあり、中国の新聞はいずれもねちっこく報じている。

抗日戦争四十周年記念行事で興奮しやすくなっていた学生たちは「正体見たり」の思いに駆られたに違いない。

九月の声を聞くと、日本から続「代表団」がどっと北京に繰り込んで来て、中国の要人と面談する。今月上旬、ある政治家グループが中国の経済開発にあたる彩国土と言う日本人以上かもしれない。国家デモや反日ビラ出現は、八・一五（終戦当日）でも九・三（中国の抗日戦争記念日）でもなかった。九・一八までの一か月間には、靖国問題だけでなく、「対日政策の誤り」「首脳代」問題、中国が輸入した日本製トラックの大量故障などがあり、中国の新聞はいずれもねちっこく報じている。

抗日戦争四十周年記念行事で興奮しやすくなっていた学生たちは「正体見たり」の思いに駆られたに違いない。

九月の声を聞くと、日本から続「代表団」がどっと北京に繰り込んで来て、中国の要人と面談する。今月上旬、ある政治家グループが中国の経済開発にあたる彩国土と言う日本人以上かもしれない。国家デモや反日ビラ出現は、八・一五（終戦当日）でも九・三（中国の抗日戦争記念日）でもなかった。九・一八までの一か月間には、靖国問題だけでなく、「対日政策の誤り」「首脳代」問題、中国が輸入した日本製トラックの大量故障などがあり、中国の新聞はいずれもねちっこく報じている。

抗日戦争四十周年記念行事で興奮しやすくなっていた学生たちは「正体見たり」の思いに駆られたに違いない。

北京大学壁新聞に若者の怒り

禁止破り掲示

背後に多くの支持者

北京大学の壁新聞は、構内の新華書店前にある掲示板や古びた校舎の壁に張り出された。掲示板には、学部の次の授業の学習予定、クラブ活動のお知らせなど公式の通知が、ガラスケースに収まっている。

壁新聞は、この通知を覆い隠すように、ガラス窓に張られた。

中国では、いま、政治的な内容の壁新聞を出すことは厳しく禁止されており、憲法上も、かつてあった「壁新聞の自由」は削除されている。卒業後の就職先が、基本的に、国家によって決められる大学生が、もし政府、大学当局にらまれたら、「北京で、中央政府で能力を発揮したい」と思っていても、チベット、青海省などの片田舎に行かされねばならない。

それをあえてやった——壁新聞には、学生の切実な声が表されているともいえる。その一方で、壁新聞を書いた"禁止した学生"の背後に、物言わぬ大多数の「投学生がいる。彼らはどう感じ取っているのか——。

壁新聞の前で、多くの学生がノートにとっていた。中には、カメラで写したり、読み上げテープレコーダーに録音する学生も現れた。この"近代武器"の多くが日本製というのは皮肉な話だ。

対し無駄となっても、自分自身が切腹自殺できるだけだ。天皇にもう一度隆伏文書に調印させたいのか。恥ずかしいことだ。

（「山本五七」は旧日本海軍の山本五十六司令長官の名前をもじったもの。「南洋」は戦前の"からゆきさん"を指す。"からゆきさん"という流行歌が流行した。「蘇州夜曲」が中国でヒットした）

「世の春」

天安門広場は祖国の象徴だから必ず行く。民族精神と祖国の繁栄のために、また繁世のために、国恥を忘れてはならない。われわれは人が心配しているような類を過ぎのグループではない。われわれの心の中に中華民族の尊厳がわいてくるのだ。われわれは、国際的、国内的な影響を決して忘れない。民族に光栄を与えてあげる。

（九月十八日、天安門広場でのデモに参加する決意を述べたもの）

国語国文学部八四

「私の自白」

「日本帝国主義を打ち倒せ」というスローガンが没収された。紫の大門が、われわれと外界を隔てさせた。彼一人だけが、赤旗をあげて向こうからやって来た。胸の白い花が私の方をじっと見ている。早くこちらに来てくれとしわがれ声が私を呼んでいるようだ。

私は、足が震え、心臓がドキドキしている。私は前に出て、彼を手伝ってあげたいと思ったが、私は卑怯（ひきょう）だ。

目の前の警察とこれからの運命が恐ろしい。中国人もそれを恐れている。北京大学の者もそれを恐れている。

国恥の日。一人の北京大学、私。

（九月十八日、天安門広場でのデモに参加しようとしたが、北京大学の校門が閉ざされ、自分も恐れからデモに行かなかった心情をうつったもの）

卑怯な私

「民族の血　血　血」

われわれの血がこんなにわき上がり、われわれの血がこんなに煮えてしまい。

この怒り、なぜ得たのか。

「警察と帝国主義」

中華民族は、永遠にこのように冷えてしまっているのか。

ふるい立て、同胞。

出血が多かった。もしかしたら、貧血だ？

（「警察」は、天安門広場での学生デモが十八日、警察によって規制されたこと「帝国主義」は中国市場を奪けんする日本製品を象徴している）

楊建国　9・18晩

「日本の根本を忘れた山本五七に笑る」

帝国主義がはびこり、世界人民に苦い災難を与えた。しかし最もひどい災難を受けたのは、帝国主義、つまりわれた帝国主義国の人民だ。

これはもう歴史で証明されている。山本君は、父親から原子爆弾の威力を聞いたことがあるでしょう。母親から南洋での売春のみだらな状況を聞いたでしょう。今また、日本は、帝国主義が灰の中からくすぶり出した。山本君は、これにときの声をあげ、支援している。君の姉妹にもう一度、南洋の体験をさせたいのですか。また、自分自身がもう一度原子爆弾の威力を体験したいのですか。

中国侵攻隊があっても、たゞ無駄に死ぬだけだ。東洋にいてくるのだ。われわれは、

「われわれ北大人（北京大学生）の血は熱い」と大書した壁新聞（北京支局撮影）

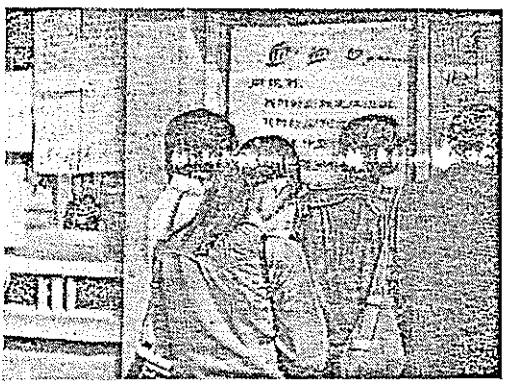
北京大の壁新聞

日中関係にも不二先

経済優先を批判

日本頼り皮肉る

【北京十九日＝松永特派員】中国の名門大学である北京大学の構内に十八日から十九日にかけ張り出された壁新聞には、対日批判とともに、現体制の経済優先政策、幹部の特権への心情的な不満もみられた。



「血、血、血……」と書かれた壁新聞を読む学生たち（松永特派員撮影）

百枚を超す壁新聞の中で、多くの学生を引きつけていたのは、「支那人への公開の手紙」と題する文章。旧日本海軍の山本五十六司令官をもじった「山本五十七」という日本人が出した手紙の形を取っている。壁新聞は、「私（山本）は、悪魔。当然、人を殺し、放火をしたい。私は資本家。当然金もうけし、他人に損をさせてやりたい。――結局、欠点はあなたの身から出ている」と皮肉っている。

また、「今日の契約交渉のなかで、あなたたち代表団長は、ラドン2、酸素――さえ知らないのに、眠そうな目つきで調印した。そのあげく、わたしたちの倉庫の中から五十四年前の化学工業設備を買い込んだ。なんと愚かな支那人だろう」と上海の宝山製鉄所建設の際いわれた「日本が中古機械を売った」との中国側の批判を持ち出し、"だまされた日本"とだまされた知識、技術のない中国の両方をあてこする内容となっている。

さらに「まだ覚えているでしょう。中国友好の船が、日本観光に行った時、関係者の親類がどっと申し込んだ。あなたたちの家族関係が水と乳が溶け合うように緊密な様子は、本当にうらやましい」と、中国友好の船に幹部の親せきが多かったことを持ち出し、"特権階級"批判を行っている。

壁新聞は、現在の経済優先政策にもホコ先が向けられている。「第四の興亡に気をつけろ。惨めに死んだ同胞を禁ける」という文章は、中国政府に九月十八日を「国恥の日」と定めるよう要求している。

また、北京大学学長にあてた壁新聞は、日本で①「ああ、海軍」「東条英機」といった軍国主義映画の登場②教科書の中国侵略の内容改訂③中曽根首相の靖国神社参拝――を批判し「われわれは経済面の小さな利益のために、屈辱の苦い実を飲み込んでしまったわけではあるまい」と警告し、「中国の見識の浅い者が急場しのぎをして悪い結果をかえりみないで、中国経済の一時的復興と繁栄を達成しても、われわれは賛成しない」と、日本の資本と技術を求め歴史を忘れて"日中友好"を進める現中国政府の政策にも批判を加えている。

中には、一九三〇年代の旧日本軍兵を皮肉り、「四十年前、刀で中国人の首を五十ちょん切った。しかし、今、おれの会社は、たくさんのカラーテレビを中国に売っている」と書かれたものも見られた。

※開問題で示した態度が、デモ、北京大学内での抗議集会など一連の反日行動の原因となったという文脈で、学生の行動を是認する形になっている。

中国政府が反日デモを擁護

【北京二十日＝丸山特派員】中国外務省スポークスマンは、さる十八日の柳条溝事件（「満州事変」の発端となった事件）記念日に北京の学生が行った「記念行事」について、十九日付で談話を発表し、中曽根首相ら閣僚の靖国神社公式参拝が「中国人民の感情を著しく傷つけた」と、強い言葉で批判した。

談話は、天安門広場での反日学生デモなどには直接触れてはいないが、日本政府が靖

※

戦争への反省
日本は行動で示せ

人民日報論文

【北京二十七日＝共同】二十七日の人民日報は「困難に耐えて築いた中日関係を大切にせよ」と題する一万字以上の長大論文を発表、日中関係は今や「重要な正念場」に差しかかっているとし、日本側がこれまで表明した戦争への反省を今後は行動面でも示し、日中間の友好関係を維持しようと呼び掛けた。

中日友好協会の孫平化副会長と文化省の劉德有次官補が執筆した同論文は両国間の友好運動を、"井戸掘り人"といわれる先輩の活動を中心に、日中戦争直後から今日までを回顧したもので、靖国神社公式参拝以来揺れている日中関係について中国側の考え方をまとめた初の総括論文といえよう。

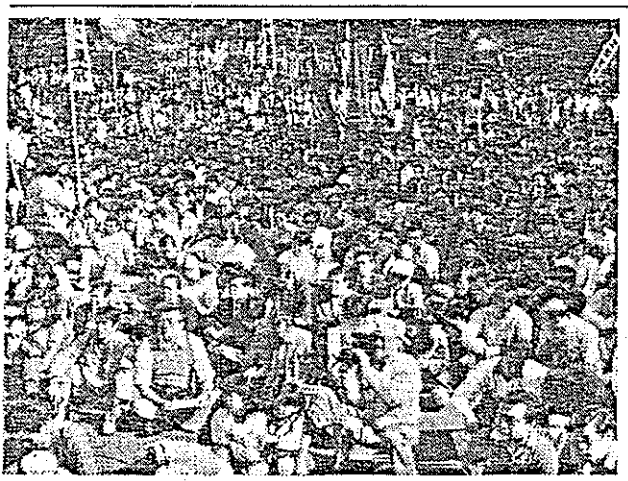
論文は、両国関係が「正念場」にある理由として、日本国内に「日中友好に反対し、侵略戦争を美化し、軍国主義の復活をたくらむ一部勢力とその影響」が存在することを挙げた。また八二年の教科書問題に続くことしの「靖国神社事件」を挙げるとともに、「異なった意見は両国の経済関係でも存在している」と指摘した。

さらに、日本側はこれまで再三中国側に対し「過去の戦争が中国人民にもたらした不幸を引き続き反省し、決して再び軍国主義の道を歩まない」と「厳粛に表明した」と述べ、今後はこの誓約を一行動の上でも十分に実現し、両国関係が長期にわたり順調に発展するよう保障することを希望する」と強調した。

論文はこのほか、七二年九月、国交回復のため訪中した田中首相（当時）が、北京の歓迎宴でのあいさつで、過去の対中侵略戦争に関し、「添了麻煩」（迷惑をかけた）と実に軽く謝罪して、中国側に「強烈な反感を引き起こした」事実を回顧。日中共同声明では「責任を痛感し、深く反省する」と書き改められたと指摘、中国側が戦争賠償の請求を放棄したことにも改めて言及した。これらは、間接的ながら日本側に、国交回復時の厳しい「原点」に立ち返り、日中友好に真剣な態度で臨むよう求めたものとみることができる。

「経済侵略」はない
中国紙、反日行動を批判

【北京二十六日＝共同】二十六日の中国紙、中国青年報（共産主義青年団機関紙）は第一面で、日本の対中経済進出を「経済侵略」として反発する最近の傾向を取り上げ、今日の中国の対外貿易は平等互恵の原則で進められており、いわゆる「経済侵略」は存在しないと指摘し、若者らのこの面での反日行動を批判した。九月十八日の北京における学生らの反日デモ以来、中国公式紙が「経済侵略」問題で一部学生らの考え方を批判したのは初めてで、中国当局が学生らの反日行動のうち靖国神社公式参拝への非難と「経済侵略」非難を区別し、前者には理解を示しながら、後者は誤解であるとしていることが明確になった。



国連軍縮週間の中央行動集会（東京・上野公園で）

靖国公式参拝

中国側に説明へ

政府方針　反日デモ、真剣に対応

北京大学の学生による反日デモ（十八日）と、これを擁護する形で示された中国外務省スポークスマンの談話発表（二十日）という事態への対応を検討してきた政府は、二十一日までに、「反日デモの発生を安易に考えてはならない」（安倍外相）との判断から、とりあえず北京の日本大使館を通じて中国側に靖国神社公式参拝問題への理解を求めるとともに、安倍外相が来月訪中する際、改めて、靖国公式参拝や新防衛計画決定が日本の軍国主義復活、軍事大国化につながるものではないことを岡外相から直接、中国側要人に説明させる方針を固めた。

靖国神社公式参拝への中国側の反発が沈静化する中で、一九三一年（昭和六年）の柳条湖事件記念日の十八日に突然、反日学生デモが発生したことに当惑気味の政府は、「根強い反日感情の表れ、『反日』に名を借りた国内政策への不満表明など立場や見方によってはいろいろな解釈はできるが、現段階で確定的なことは言えない。しかし日中両国の友好関係に影響はない」（外務省幹部）との感度。

政府は現在のところ①今回の学生デモは、中国政府が後で糸を引いた"官製デモ"ではない②靖国公式参拝問題に焦点が絞られたもので、防衛費の国民総生産（GNP）一％問題とは間接絡んでいない――と分析、「一過性」（外務省前）のものとの見方を強めている。

この反面、政府内には、学生デモが北京大学構内ではなく天安門広場で行われ、中国公安当局もこれを黙認していること、デモの直後に中国外務省スポークスマンが談話を発表、これと呼応する形で、在日中国大使館の徐敦信公使が自民党の二階堂副総裁に、日本の軍国主義復活に対する中国国民の懸念を伝えたことなどから、今回の反日デモを持つ"警告"の意味を過小評価すべきではない、との深刻な受けとめ方もある。

靖国公式参拝とこれに続く新防衛計画決定に、中国も含めアジアの近隣諸国の間に、日本の軍事大国化への警戒感が広がり始めており、こうした状況を重視する安倍外相は、ニューヨークでの第四十回国連総会で、東南アジア諸国連合（ASEAN）加盟国外相と会談する際、周辺諸国の不安解消のため、靖国問題と合わせ、わが国の防衛政策を説明する意向である。

また特に中国に対しては、十月十日からの第一回日中定期外相協議に臨むため、北京を訪問した際、外相自身の口から趙紫陽首相、呉学謙外相から中国側要人に日本側の考えを説明することにしている。

中国側の理解求める

官房長官が方針

藤波官房長官は、二十日午後の記者会見で、中国外務省が、中曽根首相ら閣僚の靖国神社公式参拝を批判する談話を発表したことについて、「深く心配している。外交ルートを通じて、公式参拝は、戦没者を追悼すると同時に、二度と戦争の惨禍をもたらすことのないよう平和を祈念するものであるという、こちらの真意を改めて説明し理解を得る努力をしたい」と述べた。

「国民に対日懸念」

駐日中国公使

駐日中国大使館の徐敦信新公使は、二十日、自民党本部で二階堂党副総裁と会談、最近、北京で続発している大学生による反日デモについて「中曽根首相以下、閣僚がそろって靖国神社に参拝したことで、戦前の日本になるのではないかという懸念が中国国民に生じたためだと思う」と述べた。

地方でも反日運動

中国　数千人の学生が参加

【北京三日＝丸山特派員】中国の反日学生運動が地方に飛び火し、西北地方の中心都市の西安・西安で、二日まで連続三日間、延べ数千人の学生が街の中心部で反日集会を開いた。文府当局が反日運動を規制しない方針にしていることもあり、日中経済関係強化の恩恵が少ない地方の内陸部市などに反日運動が波及していく恐れがある。

西安駐在筆者や旅行者の話によると、国慶節（新中国の建人が、市の中心にある名所・鐘楼の周辺に集まり、「日本商品をボイコットしよう」「日本軍国主義の復活を許すな」などのプラカードを掲げて、集会を開いた。

翌二日には、西北工業大、何名校の西北大からも学生が加わり、鐘楼のほか隣の西安市庁前の広場でも、夕、夜にわたり気勢をあげた。集会はさらに二日夜も開かれ、この夜だけで数千人、国慶節休暇三日間では数千人の学生が参加

バレー日本打倒祝う

中国 天安門前で学生ら気勢

【北京二十日共同特派員】北京市の天安門広場に二十日夜、北京大、清華大学生ら約千人が集まり、同広場の中心部にある人民英雄記念碑前で、中国国歌を合唱し、気勢をあげた。

北京大キャンパスでは同日午後、ワールドカップ・女子バレーボールの日本対中国の試合で、中国が日本をストレートで破ったことを祝い、学生らが天安門広場で集会をしようと呼び掛けた。集会目的は表面的には、中国チームの優勝、祝賀にあるとみられる。

しかし、この日同キャンパスで配られたビラには、中国チームの優勝を「日本との関係で中国が最も誇るべき日」と強調する個所があるなど、反日的雰囲気となっている。

同大キャンパスで配られたビラはまた、中国が日本の「経済侵略にさらされており、中国はこの危険性を認識すべきだ」とも述べている。日本の“オオカミ”を中国に招き入れ、私腹をこやしている者が中国当局の中にいる、とも批判した。

天安門広場の集会はこの日午後八時（日本時間九時）ごろ始まったが、反日スローガンは叫ばず、中国国歌を歌ったほか「中華万歳」などと何度も叫んだ。これは、当局が反日デモを禁じているため、愛国スローガンを隠れみのにしたものだが、実際には反日感情を反映したものと北京ではみられている。

警官隊は当初、遠巻きにするだけで、集会を規制せず学生らはいったん午後十時（日本時間同十一時）ごろ、自三的に解散した。

しかし、学生らは午後十時半（同十一時半）ごろから、今度は自転車に乗って現れ、八百人以上が「中国万歳」「勝利万歳」などと叫びながら、天安門広場の周囲を回った。広場では、九月十八日の柳条湖事件（満州事変）記念日に、北京大学生ら約千人が集まり「中国銀行打倒」「日本の経済侵略反対」などと叫んでデモを行進した。

北京大などでは現在、来月九日に、五十年前の抗日愛国デモを記念する集会を準備しており、反日運動が再燃するのではないかとの情報も流れている。

天安門広場で“自転車デモ”する学生たち
＝20日午後11時（共同）

「12・9」抗日運動50周年

中国学生が記念行事

【北京二日＝松永特派員】学生はグループを作り、革命旧跡や先輩を訪ね、さらに、記念映画を見るなどするという。

二日の中国党機関紙「人民日報」によると、中国共産主義青年団（共青団）、中国全国学生連合会（全国学連）などは、一九三五年に中国の抗日救国運動のきっかけを作った「一二・九」運動の五十周年記念活動を行うことを決定した。活動計画によると、前日の十二月八日午後に共青団などの関係団体が、同運動に参加した老革命家を招き、多数の青年、大学生、党指導者らと北京で記念大会を開催する。このほか、各学校は同運動に参加した先輩を招いて話を聞き、

う。

「一二・九」運動とは、一九三五年十二月九日に、北京の学生二万人が集まり、当時の日本が実施しようとしていた華北五省の自治化に反対し、「日本帝国主義打倒」などをスローガンにデモ行進を行ったもの。これに対し、中国警察が弾圧し、多数の学生負傷者、逮捕者を出した。これがきっかけとなり、全国に抗日救国運動が急速に高まりを見せた。

それによると、九月十八日の柳条湖事件（満州事変）記念日での反日行動の後、北京大学の一部学生は引き続き、学校内外で交流活動を展開、「一二・九運動」を名目として、全国大交流の中核組織を作り、代表を全国各地の大学に派遣した。

学生たちは①腐敗（汚職）と不正の廃絶②「売国求栄」（国を売って繁栄を求める）③官僚化――の三つに反対するスローガンを提起している。

大規模抗日デモ計画

北京の大学生

【香港二十一日＝共同】二十一日発売の香港の雑誌「争鳴」臨時増刊号は、北京大学の一部学生を中心とする中国の学生たちが来月九日の「一二・九北京学生抗日愛国運動」五十周年に向けて全国的な大デモを計画している、と報じた。

あ と が き

１９７８年８月に日中平和条約が調印され、中国との友好を望む人は、誰でも訪問できるようになつて、７年を経過した。

数年前までは、人民公社、工場、文化施設、学校、病院等が日程の中に組み込まれていたが、今は完全に内容も改変され、国家の近代化を進める一環として観光事業の発展に力を注ぎ、徐々に改善されていることは喜ばしいことである。

１９７９年に日中共同取材班がシルクロードを取材し、その映像が報道されてから、シルクロードは我が国でも注視の的となり、三年前から一般人にも開放された。其の刺激から私の未知の夢を呼ぶ地となり、漸く念願が実現したのである。

周朝以来、歴代王朝の国都として繁栄を誇り、世界でも有数の歴史をもつ西安（長安）は、起源は紀元前四千年頃までも遡るといわれ、１９６３年に北京原人よりも古い「藍田猿人」の骨が発見されたニュースは、強く我が脳裏に刻まれている。前宋の都「開封」附近の戦場で青春を過ごした我々にとつては、西安は憧憬の古都であつた。幸いにも滞在すること３泊に変更となつたことは、中国の古代史を知る上に得難い結果となり、過去の苦しい黄河との闘いが報いられたような感じがする。

西安を起点とするシルクロードは、１８７７年、ドイツの地理学者リヒトホーフェンから「ザイデン・シュトラッセ」と呼ばれ、これが後日、英訳されて「シルクロード」、さらに中国では「絲綢之路」と呼んだのである。紀元前一世紀頃、前漢の武帝時代に中国と西方諸国との交易が開始され、首都の長安（西安）からパミール高原へ抜けるルートが作られた。河西４郡を通り、崑崙山脈の北麓に沿う西域南道と、トルファンから天山山脈の南麓沿いの西域北路の二本であつた。唐代になると長安は国際都市となり、大文化圏を形成して東西交流が盛んとなつたが、西域南路は荒廃し、代わってウルムチを通る天山北路が開設された事は、本文の通りである。

このシルクロードは単に交易のためではなく、文化、宗教伝来の路として大きな役割を果たした。此の歴史的な万水千山の道を踏破することは、「懐古欽英風」、即ち古代の先駆者を慕う事であり、そこに私の最大の意義があつたのである。訪れた各地の深い印象は、何時までも旅の余韻として末長く尾を引かすことだろう。

昭和六十年（１９８５）１０月

石川県加賀市山代温泉神明町七一三　　寺　前　信　次
☎０７６１７－６－０３２１